
バカと武術と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと武術と召喚獣

【Nコード】

N6030V

【作者名】

直井剡那

【あらすじ】

この物語は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

また『真剣^{まじ}で私に恋しなさい』とのクロスものです

オリ主が幼馴染の明久とそして秀吉、雄二、ムツリー二等の

FクラスメンバーやAクラスメンバーと

そして真剣恋^{まじ}の川神姉妹たちと

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだという人はバックしてください。

一応原作に沿うようにはしたいと思います
気が向いたら読んでいただけると嬉しいです

バカテス

この物語は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

また『真剣^{まじ}で私に恋しなさい』とのクロスものです

オリ主が幼馴染の明久とそして秀吉、雄二、ムツリー二等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと

そして真剣^{まじ}恋の川神姉妹たちと楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだという人はバックしてください。

一応原作に沿うようにはしたいと思います

気が向いたら読んでいただけると嬉しいです

設定

この物語はバカとテストと召喚獣と
真剣で私に恋しなさいのクロスものです

設定

- ・ オリ主が明久たちバカテストメンバーと川神姉妹と学園生活を面白おかしく過ごしていきます
- ・ 明久はもちろんの事、観察処分者です。
- また、オリ主と川神百代も観察処分者になっています
- ・ オリ主は川神百代と同じ位の武力を持つ

変更点

- ・ 明久は姫路に恋心を抱いていない
- ・ 川神百代が2年生ということにしています
- ・ 明久は健康的な食生活をしている

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

プロローグ（前書き）

プロローグです。

今回は明久とオリ主の登場です

プロローグ

『試験召喚システム』――

科学とオカルトの偶然により完成されたそれは
テストの点数に応じた『召喚獣』を呼び出し戦うことのできる最先
端システムである。

その召喚獣を用いたクラス単位の戦争――

それが『試召戦争』――試験召喚戦争である。

試験によりクラスがAクラス、Bクラスにまで振り分けられる。
振り分け基準は勿論テストの点数である。

頭が良ければAクラス、そこからB、C、D、Eと下がっていき、
最も頭が悪ければFクラスとなる。

更にこのシステムが運営されている、
この『文月学園』では、テストの上限がなく、クラス毎に設備が変
わる。

Aクラスでは、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライ
ニングシートなどの

設備が整っており、全て学園側から支給される。

一方Fクラスはというと、机は卓袱台、椅子は座布団、チョークす
ら用意されていない、

蜘蛛の巣がはっついていて、カビ臭い。

しかしそんな設備も『試験召喚戦争』により変えることができる。

下位のクラスは上位のクラスに勝てば施設を交換できる。
逆に負けた場合は施設が一段階悪くなる。

今日はそんな学園のクラス分けテストの日……
俺は試験を受けていた

「それではクラス振り分け試験始め!!」

教師の合図で全員がテストをめくる。

明久「(難しいと噂の試験だけどこの程度なら十問に一問は解ける
!!)」

ここに、試験に取り組む少年がいた。彼は吉井明久という。
明久は俺と中学からの親友である。

『ガタンッ!!』

突然明久の近くで誰かが倒れた。

明久「ひ、姫路さん!?!」

明久は席を立ち、二人に駆け寄る。

教師A「吉井!!試験中だぞ、席につけッ!!」

明久「でも、姫路さんが……」

教師A「姫路、…体調が悪いなら保健室に行くか？」

ただし試験中の退室は『無得点』扱いとなるがそれでいいかね？」

明久「ちよっ！！具合が悪くて退席するだけでそれは酷いじゃないですかっ！！」

姫路「……た、退席します……」

教師A「では姫路、お前は無得点だ」

姫路「……はい……」

明久の必死の抗議も聞き入れてもらえず、結局姫路さんは無得点扱いに。

ちよっと理不尽すぎやしないか？こんな事で無得点なんて。

姫路「失礼………しま………あ……！」

明久「っ！姫路さんっ！」

フラフラしながら教室を出ようとする姫路さんがバランスを崩し、咄嗟に明久が支える。

明久「姫路さん掴まって。僕が保健室まで付き添うから」

姫路「よ……吉井くん……、でも……」

教師A「吉井、何をしている！早く席に戻れ！！」

明久「こんな状態の姫路さんを放っておく事なんて出来ません！」

教師A「貴様も無得点扱いにするぞ!？」

明久「ご自由に。姫路さん、行こう」

教師A「待て、吉井!！」

『ピシヤッ!』

先生の言葉を気にも止めずに、明久は姫路さんを連れて教室から出ていった。

……そうだよな、明久はそんなヤツだからな。

自分が大事だけどそれ以上に周りの人を大事にするヤツだから……。そんな明久だから、俺はアイツの親友でいられるんだ……。

(さあて、そしたら俺はどうするかなあ……)

皆には悪いけど明久と同じクラスになりたいしな、いつそ名前無記入で出すかなあ……。

と、そんな事を考えていたら……。

教師A「チツ、クズが……」

……あ?

気のせいだろうか…。この教師、今小声で許しがたい言葉をほざいた様な…。

教師A「まったく、バカの考える事はよくわからん」

……………。

『ガタッ!』

教師A「ん?何だ真田、お前も無得点にされたいのか!？」

何か言ってるみたいだけど全然聞こえない。

今、俺にはテストよりも大事な事しなくちゃいけないことがある。
何かって?それは。

『ツカツカ』

教師A「な…、何だ!？」

八雲「(ニコッ)」

『バキッ!!!』

教師A「ぐぼおっ!!!？」

俺は教師の腹を殴りつけた

八雲「すいません。真田八雲まなただやくも、気分悪いんで早退します」

悶絶してる教師と啞然としてる他の生徒に一瞥もくれず、俺は拳を振りながら教室から出ていった。

プロローグ（後書き）

さて今話から物語のスタートです。

今後マジ恋キャラは誰が出るのかお楽しみに

このキャラをだして欲しいという要望があれば教えてください。

なるべく希望に添えるようにしたいと思います

男達の朝

俺はいつも明久たちと登校する。今日もいつもとかわらない

明久「おはよう八雲！」

八雲「おう、おはよう明久！」

麗子「ほらーっガクオ！早くしなさいよ！！八雲ちゃん達行っちゃうよ！」

俺の家の隣にある島津家が騒がしかった。隣にいる島津家とは昔からの知り合いだ。

ガクトの母麗子さんには小さい頃から世話になっているし、俺の家が武道の家なのでその門下生に食事なども出してくれている

岳人「うるせーな！あんまり恥かかせんな母ちゃん！」

八雲「やあ、名前負け」

岳人「いきなり喧嘩売ってんのかてめー！」

八雲「冗談だ。今日も超かっこいいぞ」

岳人「おいおい、よせやいいきなり本当の事を。髪型とか、ピシッと決まってるだろ」

明久「やけに自信満々だね」

岳人「秘訣はこの本にあるんだぜ。髪型のキメ方から何から、この本の通りに」

行動すれば女は落ちるって、このモテ×2本に書いてあるんだぜえ」

八雲「なんだその見るからに自費出版の安物本は」

岳人「ネットで見つけたんだ」

明久「……………しょうもないね……………」

岳人「はん、俺様はお前のほうが心配だぜ明久くんよあ」

明久「何その不快な上から目線」

岳人「男の八雲でさえ俺様にモテオーラ感じるってのに」

八雲「あれ俺何か言ったっけ？」

岳人「今日も超絶かつこいいと言っただろう」

八雲「そんなの嘘に決まってるだろう。馬鹿かよ」

明久「ガクトの頭が心配だね。将来大丈夫かな」

岳人「なんだこの幼馴染たち容赦ねー！！！！ってか明久には言われたくねー！」

八雲「でも明久はガクトよりは成績は良いぞ」

明久「でもガクトは余計な事はしないで己の体を信じればいいと思
うよ」

岳人「そうだな。本に惑わさせず肉体美で売っていこう」
そういうとガクトはクルミをコリコリ握り始めた。

俺と明久とガクトは川沿いを歩いていく。
春の日差しの暖かさが心地よい

八雲「ぽかぽかの天気だ。この川原で昼寝したいなあ」

明久「・・・1人で？」

そうだよ。俺、彼女いないもん

岳人「女がないからって俺様に走るなよ？」

八雲「ゴリラはバナナでも食べてろ」

誰がお前なんかと寝るか！

岳人「人間扱いしろよ」

バキッ（クルミを砕いた）

八雲「霊長類であるだけ感謝」

岳人「おいレイチョールイって何だ？」

明久「良く学校に入れたよねガクト」

八雲「土地を持つてるから裏口に違いないさ」

岳人「俺様が死ぬ気で勉強したの知ってるだろうが！」

ガクトの家は昔からここら辺の土地を持っていてその一部を学校に提供してくれている。

男達の朝（後書き）

今日2話目の投稿です。

マジ恋からガクト参加です。

ガクトはネタでかなり使えるので出しちゃいました（笑）

次回はいよいよ姉さん登場です。

まだキャラの要望受付中です。

一応Bクラス戦までの募集にしようと思っています。
もしかしたらまだ伸びるかもしれませんが、

キャラの要望があれば教えてください。

これからも応援よろしくお願いします

川神百代 登場！

明久「なんであそこに人が集まっているんだろ？」

集団の視線の先、川岸を見るとそこには

八雲「げえ、なんてこった」

見るからに不良な男達が集団（12・3人）で1人の女の子をグルリと取り囲んでいた。

しかも男達はバットとか武器持っているし。

周りで見ている文月学園の生徒の連中は助けもしないむしる連中はこの見世物をワクワクした目でキャラクター見ているのだ。

八雲「これは朝から大ピンチだな」

明久「早く止めないと大変な事になっちゃうよコレ」

八雲「じゃあ行つて来い明久」

明久「やっぱり僕が行くの」

岳人「つかお前弟だろ」

明久「弟っていうか弟分なんだけど……まあいいや」

明久が向こうへ駆けていく

明久「君達待て待て待てー！ー！ー！」

取り囲みの現場へと飛び込んでいった

明久『ここは僕が食い止める!』

大声で叫んだ

明久「だから今のうちに早く逃げるんだっ!」

必死に語りかけている

不良A「……はあ!?俺たちに言ってるの?」

不良たちに。

明久「そっすだよ!早く逃げて!っっていうか相手見て喧嘩売ったほうがいいよ。」

おの女の人誰だかわかっているの?」

不良A「分かってんよ。川神百代だべ?」

不良B「クス…女だからって手を出せないと思っなよ」

不良C「くっくっく、お、お前は通学路で多くの生徒が見ている中、敗北していくのだ」

百代「テトリス、か。懐かしいな」

不良D「あ、何言ってるんだお前」

不良E「だから何だっ！関係ねーだろっがあ!？」

不良F「つつか何落ち着いてだお前!!“ムカツク”ぜ!」

百代「久々にやってみたくなった。協力してくれ」

不良E「ああ!？」

百代「こんな風にしてお前達をブロックに見たてよう」

ボキッ

不良E「ぎっ!？」

男の腕間接がありえない方向に曲がっていた

不良E「い、いてえええ！俺の腕があああ!!!!」

不良A「て、てめえ！よくもやりやがったな!」

不良C「皆で“ヤ”つちまええええ!!!!」

百代「遅い!!お前ら赤子か!？」

一瞬で男達は全員フツとばされていた。

周囲の観客から、待ってました、とばかりにドッと歓声があきおこる。

観客の多くはうちの学生だ。男子も女子もキヤーキヤー騒いでいた

明久「相変わらず姉さんは動きすら見えないよ」

八雲「1人1発ずつ蹴りを入れていったな」

岳人「そ、そうだな。うん。すげー蹴りだった」

八雲「嘘。実はパンチ」

岳人「キャップてめえ」

明久「……ガクトでさえ見えなかったのね。八雲は良く見えるね」

八雲「鍛えているからな」

俺たちが話している間に不良達をテトリスのように積まれていった

百代「ふふっ、美しく積みあがったな」

明久「姉さん、これはもはやホラーだからね」

人間が塔になってしまっている。

百代「おっとテトリスは並んだら消さないとな」

百代が回し蹴りで積み上がった男達を吹っ飛ばす。

百代「駆けつけてくるのが遅いぞア・キ・ヒ・サ。私の弟分なんだからキリキリな」

ずい、と明久との距離を縮めるとグリグリと頭を撫でる。

ちなみに明久は中学の時にファミリー入りし、その時百代に気に入られ弟分となった。

明久「早く行かないと遅刻しちゃうよ」

百代「…んっ！？待て待て群集に見慣れぬ顔を発見！」

百代がギャラリの中へ突撃。

八雲「まーたはじまった。娘あさが……」

おそらく今年新しく入ってきた新入生をお姫様抱っこしている。

しばらくしてその女の子をおろして満足そうにこちらに戻ってきた

百代「見たかお前ら。あの娘完全に脈ありだ」

岳人「見たか、じゃねえよモモ姉」

百代「なん？」

岳人「いつも可愛い女の子を一人で持っていていきすぎ！俺にも回してくれよ！」

百代「いやだね。欲しけりや自分で調達すればいいだろう。」

まあ可愛ければ私が略奪するが。ふふふ」

明久「過激だ」

岳人「美人の女好きって超もつたいねえよ……」

百代「おいおい私は別に根っからの女好きじゃないんだぞガクト。
ただ周囲の男が魅力なくちな。女の子にちよっかいも出さ
さ」

八雲「いや、百代のハードルが高すぎるんだよ。

皆“俺には無理”って言ってアピールすらないし」

岳人「俺様はそんな軟弱コンブどもとは一味違っぜ！

タフガイな俺様と付き合ってくれ！」

明久「いきなり告白とか頭大丈夫？」

百代「だめだ、魂がこもっていない。それより以前にムサすぎてア
ウトだ」

一刀の元に切り捨てられた。

岳人「なんのまだまだ。知ってるか？人生にはモテ期ってのがあ
らしい」

明久「それ都市伝説な気がするよ。だって僕ないもん」

百代「じゃ、ま。時間も時間だ。ガッコに行くか」

周囲のギャラリー達もそろそろ遅刻と分かってか移動を開始してい
た。

橋に到着。この橋を渡っていけば文月学園だ。

川神百代 登場！（後書き）

今回は川神百代登場です。

次回は妹が出てきます。

次回の更新も頑張りたいと思います。

応援よろしくお願いします

ワン子登場！

一子「みんなーっ、おはようーっ！！！！！！」

百代「お、妹が来たぞ」

八雲「よっ（挙手）」

明久「おはよ」

走ってきた川神一子に挨拶。

岳人「おうワン子」

一子「なんか川辺で大勢のびていたけど、お姉様？」

百代「ああ。つまらない相手だったな」

一子「あはっ、やっぱり凄いや！」

岳人「ワン子。今日はひきずってるタイヤ2つか」

一子「うん、その分川沿いに隣の県まで行ってきたよ」

明久「昨日は静岡まで走りに行ったのに元気だね」

一子「いっぱい鍛えないといけないもん！アタシはお姉さまに比べ
るとまだまだだから」

百代「健気だろ。どうだ自慢の妹だぞ」

一子「いやー照れるなー」

百代「百兆円で売ってやろう」

一子「え？アタシ売られちゃうの？そ、そんな」

百代「冗談だよ。本当にそうなくても金だけ奪ってお前は売らないさ」

一子「さすがお姉様 強くて素敵

いずれお姉様と肩を並べられる強さを手に入れるわ」

明久「この人が2人とか勘弁してほしいよ」

百代「んー？今のは聞き捨てならないな舎弟」

百代が明久の頭を手で圧迫する

明久「痛い痛い！！景色がかすむ！！」

百代「鞆を持たせないだけ優しい姉貴分だろう」

俺たちに合流した事で、一子も普通に歩く事になった。

……… タイヤをひきずりながら。

岳人「歩く時ぐらいはトレーニングはよそうぜ」

一子「アタシはいついかなる時も鍛える事を忘れないのサ。
それにこうして鍛えておけば、強くなるだけでなく、
体もお姉様みたいにバイーンとなるわけよ」

八雲「スタイルでも並ぼうと？」

一子「うん！何をおいても、お姉様はアタシの目標」

百代「頑張れー妹。私のバストは90あるぞ」

明・岳「「!？」」

一子「とりあえず牛乳を飲むんだ」

八雲「それでも無理だろ」

一子「なに喧嘩売ってるのキャップ？勝負する？」

俺はモモ姉とワン子の体を見る。

八雲「やっぱりワン子には無理だろ」

一子「何イ馬鹿にしないでよねっ！

いつか巨乳になって。“おいおいお前の体は果物屋か？
メロンが2つもあるぜ”とか言われてやるわっ！」

明久「あはははははは」

八雲「ナイスギャグ。合格！」

岳人「おお、キャップにも受けたぞ。はははは」

一子「バカども笑うなーっ！真剣まじなのよーっ！」

八雲「いや、今は笑うな。ははははは」

一子「な、なによお。笑うなよお……」

泣きが入ってきた。

百代「よしよし、なでなで」

一子「えへへへ」

復活した。

一子「お前ら調子乗ってるからブチのめすわ！もちろん物理的にね
」！

八雲「黙れタイヤ」

一子「た、タイヤ？」

明久「確かにタイヤ引きずってるからね」

一子「あはは、そのネーミングセンス小学生？
そんなんでアタシを挑発しようかバカ？」

八雲「やーいタイヤ」

一子「うるさいなっ！……！」

明久「タイヤー」

一子「た、タイヤじゃないわよ……！」

岳人「タイヤー。タイヤー」

一子「……タイヤって言うなよお……やめろよー」

泣きが入ってきた。

百代「お前ら妹あまりいじめると私が相手するぞ」

八雲「いいだろう」

明久「受けて立つ。ガクトが」

岳人「なんで俺様に回ってくる？」

八雲「ごめんなー、ワン子。機嫌直せ」

一子「頭の中はアンタを殴る事でいっぱいよ！」

八雲「じゃあまずはガクトを殴れ」

岳人「キャップてめっ」

一子「妹キック！」 ベシッ

百代「姉パンチ！」 ドカツ

岳人「いてええええ！！！！」

明久「モテるじゃんガクト」

騒がしいがいつもの風景なので皆気にしない。

そして俺たちは学園に向かっていった

ワン子登場！（後書き）

ワン子登場です。

そしてやっとな次回クラス分けです。

さて皆どのクラスに配属されるのかお楽しみに。

そして今、募集中のマジ恋メンバーで出ているキャラは

マジ恋からは

マルギツテ、梅子先生、あずみ、

小雪、辰子、伊予、卓也^{モロ} の7人

マジ恋Sからは

燕、弁慶、ステイシーと李 静初のメイド2人、

天神館の石田 三郎、大友 焔、尼子 晴 の7人

計14人が案として出ています。

それで今、現在で出そうと思っているキャラが

風間ファミリーではすみませんが風間とモロの2人は出ません。

なのでファミリー名も変わります。

キャップとモロ好きの方はすみません。

また、マユツちも考え中です。

風間ファミリー以外では

九鬼英雄とあずみ、ハゲ（準）、冬馬、小雪、マルさんは出そうと

思っています。

以上のキャラ以外に出して欲しいというキャラがいたら教えてください。

全てのキャラを出せるわけではありませんが出来るだけ出そうと考えています。

俺達のクラスは!?

西村「お前ら、遅刻ギリギリだぞ」

明久「あ、鉄じ　　じゃなくて、西村先生。おはようございます」

八雲「鉄人　　違った、鉄村先生。おはようございます」

百代「鉄人おはようございます」

岳人「鉄人オツス!」

一子「西村先生おはようございます」

西村「川神妹おはよう。吉井は今、鉄人って言わなかったか？」

明久「ははっ。気のせいですよ」

西村「ん、そうか?あと真田、俺の名前は鉄村じゃない、西村だ」

八雲「すみません噛みました」

西村「わざとだな。それに川神姉、島津お前らは完全に鉄人って言ったよな。」

そして島津!教師に向かってなんだその挨拶は!」

ゴン!　　鉄村先生がガクトの頭を殴りつける

岳人「いてええええ!!!!」

西村「以後気をつけるように。まあバカな話はそのくらいまでにして受け取れ」

明久「あ、クラス分けの紙ですか。どーもです」

一子「アタシ思ったんですけど、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を

発表しているんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいと

思っんですけど」

明久「あ、それは僕も思った」

西村「普通はそうするだけだな。まあ、ウチは世界的にも注目されている

最先端システムを導入した試験校だからな。

この変わったやり方もその一環ってワケだ」

明久「ふーん。そういうもんですかね」

西村「今回の事は他の先生方から聞かせてもらった。吉井」

明久「はい」

西村「俺個人の考えとしては、お前の行動を褒めてやりたい。

出来ればもう一度チャンスを与えてやりたい。だがルールはルールだ」

明久「はい。大丈夫です、後悔してませんから」

西村「そうか…、ならいい」

明久は微塵も後悔していない。真っ直ぐな視線で鉄村先生にそう伝えた。さすが明久だな。

西村「だが、問題はお前だ真田！」

八雲「ええっ!?!」

突然、鉄村先生に呼ばれて我に帰る。俺が何をしたと?

西村「いくら大事な幼馴染みがバカにされたからといって、教師を殴り飛ばすとは何事か!?!」

明久・一子「「ええっ!?!」^{キャップ}八雲そんな事したの!?!」

八雲「何言ってるんですか!寧ろ1発で済ませた事を褒めてもらいたい位です!

本当だつたら病院送りにしてやりたい位ですよ!?!」

西村「その1発で殴られた先生は病院送りになったのだから?」

八雲「あれえ?」

あの時、頭に血が上ったから手加減できなかったかな

……… スッキリした事は黙っておこう

明久「八雲だめだよ。怪我なんかさせちゃ……」

西村「吉井の言う通りだ。解ったら少しは反省して」

百代「そうだぞ。そういう時は間接を外す位にしとけ」

八雲「そうだな。今度からはそうする」

明久「そういう意味じゃないと思うけど」

西村「とにかくっ！真田には今後、嚴重な監視が必要だと先日の職員会議で決定した！」

そう言いながら鉄先生は懐からさっきとは別の封筒を取り出し、俺に差し出してきた。

西村「受け取れ、これがお前に対する罰だ」

八雲「何ですかコレ？」

西村「見れば分かる」

封筒を上から破って、中の紙を開いた。

明久「ちょ…、八雲…！？」

一子「こ、これって…」

後ろから覗き込んでる明久達が動揺してるみたいだが、俺は意外とすんなり受け入れる事が出来た。

まあ予想はしてたし、当然といえば当然だしな。

真田 八雲

上記の者を文月学園指定《観察処分者》として認定する

西村「そして川神姉妹に島津、今だから言っがな」

一子「はい、なんですか」

百代・岳人「なんだ」

3人は封筒を開けようとしている

西村「俺はお前らを去年1年見て、

『もしかすると、お前らはバカなんじゃないか?』なんて疑いを抱いていたんだ」

岳人「それは大いなる間違いだな。

ワン子ならともかく俺様にまでそんな誤解をしているようじや、

更に『節穴』なんて渾名をつけられちまうぞ?」

一子「そうですよ。アタシはガクトほどバカじゃないよ」

西村「ツッコミたいところは山ほどあるが」

激しく同意する

西村「振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

一子「そう言ってもらえると嬉しいわ」

百代「私もだ」

岳人「当たり前だぜ」

そこで3人がビツと軽い音を立てて封を切る。中を覗くと、そこには一枚の紙が入っていた。

西村「喜べ3人とも。お前らへの疑いはなくなった」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『Fクラス』

百・一・岳「「え・・・・・・・・」」

西村「お前らはバカだ」

こうして俺たちは最低クラス生活の幕を開けた。

俺達のクラスは！？（後書き）

予想できていたと思いますがやはり皆Fクラスです。

今回はバカテスメンバー登場です

これがFクラス！！

明久「・・・・・・・・・・何だろう、このバカでかい教室は。」

八雲「教室をこんなに大きくする必要ないよな・・・・・・・・・・。」

一子「格差社会が目の前にあるわ・・・・・・・・・・。」

俺たち5人が去年ほとんど行ったことのない3階に行きまず目にしたのは

普通の5倍はあろうかというAクラスの教室だった。

5人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性学年主任の高橋洋子が立っていた。

一子「あ、高橋先生だ。」

八雲「やっぱりあの人が担任なんなんだな」

一方、明久とはAクラスの設備に目を向けていた。

明久「ねえ、あれ！冷蔵庫とエアコンが個人であるよ！」

岳人「ていうか何だあの大型ディスプレイは！？それに天井ガラス張りだぜ！」

そのあまりの設備に俺たちは度肝を抜いていた。

高橋「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に

来てきてください。」

霧島「……………はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女―霧島翔子だった。

八雲「さすが霧島さんだな」

霧島さんは1年の頃から成績だ学年トップなのである

百代「それじゃあ私達も行くか」

百代の声に俺たちは頷き、Fクラスの教室に歩き出した。

岳人「なあ、俺様たちはいつのまに山奥にきたんだ?。」

八雲「ガクト。現実逃避したくなる気持ちは分かるが現実をみる」

今彼等が目に行っているのはとても教室とは思えない、
それこそ山奥の山小屋のような教室だった。

一子「これは……………Aクラスとは真逆の意味ですごいわね」

百代「これが勉強する環境か」

そのあまりのひどさに5人は絶句していた。

明久「と、とりあえず中に入る。きっと外よりはマシだよ」

いつまでも突っ立てはまずいと思ったのか明久が切り出した。

一子「そ、そうよね。外見だけだよ。中は少なくともちゃんとしてるよね。」

八雲「そうだな。そう願おう」

一子「それじゃあ私が先陣きらせてもらっわ。」

そう言うと一子は教室の戸を開け、

一子「すみません。ちょっと遅れました」

雄二「遅いぞウジ虫野郎！」

入って初めてかけられた言葉は凄まじい罵声だった。

一子「私ウジ虫なの……」

雄二「げえ！？一子か！？いや、すまん！。明久だと思って勘違いして」

その声にツンツンと立った短髪の少年で先ほどはやてに罵声を浴びせた少年

坂本雄二はその方に目を向けた。

百代「ふーん。私の可愛い妹をウジ虫呼ばわりするとは、覚悟は出来てるんだろっな」

百代はにこりと笑みを浮かべている。目は一切笑っていないが。ちなみに一子は突如の罵声にうなだれ、俺がよしよとなぐさめている。

雄二「ち、ちよつと待ってくれ！。言い過ぎた。俺が悪かった！

だから………あ、明久！。助けてくれ！」

百代の尋常ではない殺気にたまらず雄二は明久に助けを求める。

明久「………雄二。君の事は忘れないよ」

雄二「な！？後生だ明久助けてくれ」

明久「しょうがないな姉さん、そこでストップだよ」

百代「なに？」

百代はいくらか殺気を収め振り返る。

明久「後で雄二が姉さんとワン子に飯おごるから許して欲しいって」

一子「飯！？アタシ肉がいいわ！」

一子が『飯』という単語に反応しすぐに応答する

明久「だって雄二」

雄二「わ、わかった。肉おごるからその振り上げた手を下ろしてくれ！」

百代「ちつ、しょうがない。約束は守れよ」

雄二「ああ、わかった」

八雲「とんだ災難だったな」

雄二「本当だ」

岳人「まあドンマイだな。ワンスの食べる量は尋常じゃねえぞ」

雄二「……ま、マジか？」

八雲「マジ」

福原「すみません、ちょっと通してもらえますか？。」

背後から声をかけられた。

そこには寝癖付きの髪にヨレヨレのシャツを着たおじさんが立っていた。

福原「席についてもらえますか？。HR始めますので。」

明久「はい分かりました。」

俺たちは人はそれぞれ好きな席に向かう。

福原「え、担任の福村慎です、よろしくお願いします。」

教壇に立った福村先生は自己紹介をし、

黒板に名前を書こうとしたがその手を止めた。理由はチョークがない

からである。

福原「皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があったら申し出て下さい。」

明久「これで不備がないって言う人に会ってみたいよ」

八雲「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、

自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

スクツ

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。だけど秀吉は男なんだが……次はその前の少年が立った。

康太「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。

彼はムツツリー二というあだ名を持っているが本名よりも

そっちの方が知名度が高い。
秀吉とムッツリー二とは去年からの付き合いだ

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。」

あ、でも、英語も苦手です。趣味は」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です。」

島田が明久に向かって手を振っている。おい島田、明久が震えているぞ

岳人「島津岳人だ。力なら誰にも負けねえ。これからよろしくな」

百代「川神百代だ。よろしく」

一子「川神一子よ。お姉様共々よろしく頼むわ」

と淡々と皆が自己紹介をしていく。次は俺の番だ

八雲「真田八雲だ。これから1年間よろしく頼む」

忠勝「源忠勝だ」

おっゲンさんだ。相変わらずゲンさんはカッコいいな。
ちなみにゲンさんは俺の後ろの席に座っている。

今度は明久に回ってきた。

明久「ーコホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

次の瞬間、

F「「「ダアアーリーーン!!。」「」」

野太い男の大合唱。

明久「……………失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお願いします。」

明久は吐きそうな顔で座る。

八雲「お前バカだろ」

明久「ごめん。まさかあんな反応するとは思わなかったんだよ」

そこへ

?「あの、遅れて、すいま、せん。」

F「「「え?。」「」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

福原「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、
姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしく願います！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F「はいっ、質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員（俺と明久を除く）がそう思っていた事だった。

彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、

最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

瑞希の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見て、俺は一言。

八雲「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします！」

姫路は逃げるように、雄二の近くの空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしま
う。

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か？」

姫路「えーっと……、あなたは……」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しく願いします。」

深々頭を下げる姫路さん。こーゆートコからでも彼女の育ちの良さが伺えるというものだ。
ウチのヤツラに学ばせたいな

雄二「ところで姫路。体調の方はもう良いのか？」

明久「あ、それは僕も気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君！？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

明久「え？」

姫路「目もパッチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言った様な表情に。

明久「え？ それって」

姫路「そつ、それって一体誰ですか!？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

雄二「確か、久保……………利光だったか？」

八雲「やっぱりか」

久保利光 性別（ノオス） 現在Aクラス所属

雄二「おい明久、さめざめと泣くな」

八雲「よりもよつて男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通こつなると思うぞ?」

雄二「……………まあ、確かにな」

パンパン!

福原「はいはい。その人たち、静かに」

バキィッ! パラパラパラ……………

福原「してください……………ね?」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

福原「え〜。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしてみてくださいね」

八雲「どんだけ酷い設備なんだよ!？」

福原「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何度目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

雄二「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

八雲「何だ、明久が気になるのか？」

姫路「え？ っ、いえ、そういうわけでは……」

八雲「ふーん、じゃあそういうことにしとくよ」

俺は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。

秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじゃ、またお主ら3人で悪だくみかの？」

八雲「さあな、どうだろうな。でも面白い事になりそうだ」

秀吉「やれやれ……まあお主らしいのう」

たがいに笑いあつて、俺は1人取られない様廊下へ。
そしてゆつくりと建て付けの悪い扉を開いて……

雄二「つまり、姫路の為だろ？」

明久「そつそつという訳じゃないけど……でも、姫路さんには酷い環境だから、

改善してあげたいって気持ちはある」

雄二「素直じゃねえな。まあどうせ、試召戦争はやるつもりだった。世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

それを聞いて、俺はこそこそするのをやめにして、思いきり戸を開けた。

八雲「何だ？俺を差し置いて、随分と面白そうな話をしてるじゃないか」

明久「八雲！」

八雲「俺にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、俺が乗らない

訳ないだろ？」

明久はそれを聞いて感激し、雄二も不敵な笑みを浮かべた。

雄二「全く、お前も物好きだな……つと、先生が来た。入るぞ」

八雲「それじゃFクラス代表のお手並み、拝見と行こうか？」

雄二「ああ、任せておけ」

俺と明久は、雄二に向けてグツと親指を立てた。

雄二もそれに倣い、同様に親指を立てる。

八雲「それより明久、試召戦争を提案したからにはお前も頑張れよ？」

明久「うっ……」

八雲「ちゃんと勉強位教えてやるよ」

雄二「改めて言うが、お前も物好きだな。明久に勉強を教えるなんて」

八雲「まあ俺の周りは馬鹿が多いからな。コレくらいなんともない」

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

再び再開された自己紹介。あいつは確かFFF団のリーダーか…

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。

福原「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

雄二「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

そこで、あいつは少し……間を空けた。どうやら始まるか…

雄二「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、

みんなの視線も自然とそれを追っていた。

雄二「カビ臭く、すき間風が通る教室。古く、うす汚れて綿もスカスカナ座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。」

そして再びみんなを見てから口を開いた。

雄二「そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

雄二「不満はないか？」

F『『『『大アリじゃあつ!!!!!!』』』』』

不満大爆発だ。

雄二「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている」

雄二は頷きながら同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

F『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

F『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！あまりにも差が大きすぎる！』

F『そつだそつだ！』
引き継ぐように坂本は口を開いた。

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

雄二は一呼吸おくと

雄二「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

雄二は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふっと笑い

八雲「面白くなりそうだ」

と呟いた

これがFクラス！！（後書き）

今回は少し長くなりましたがFクラスのメンバーと戦争の引き金を引きました。

今、出ているマジ恋メンバーは
百代、一子、ガクト、ゲンさんの4人です。

ちなみに皆さんにお聞きしたいのですが
明久のCPから外れる姫路と島田ですが
この2人にCPの相手が必要と思いますか？
一応、皆さんにきいておこうと思いましたがこうして書いてみました。

戦争の引き金を引くもの！

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんかいれば何もいらぬ』

『川神さんと結婚したい』

『俺も！』

戦力の差から既に諦め悲鳴を上げる人や関係ないことを話す人が出始めた

百代「さっき告白したヤツはちよつと来い！」

『すいませんでしたああああ』

全く困った奴等だ。すると雄二がみんなの言葉を制した

雄二「確かにみんなの言うことはよくわかる。

だから、俺たちがAクラスに勝てるという根拠となる要素を示そうと思つ」

F『要素？』

雄二「まずは……康太。豊に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

康太「……………（ブンブン）！！」

姫路「へっ？ひゃあああ」

雄二に呼ばれたムツツリー二は必死に顔と手を横に振って否定して

いる

雄二「土屋康太。こいつがかの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

康太「……………！！（ブンブン）」

ムツリーニは全力で首を振る

F「ムツリーニ……………だ……………と？」

F「ヤツがそうだというのか？バカな……………」

F「だが見る。未だに隠そうとしているぞ……………」

F「ああ……………まったくだ。ムツリーの名に恥じない姿だ……………」

さすがムツリーニ…本当にお前は本当に凄いな

雄二「姫路は説明不要だろう。その实力はみんなが知っている通りだ」

姫路「ふえっ！ わ、私がですかっ？」

そうだな、姫路はAクラスに匹敵するしな！

雄二「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

F「ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか」

F「たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな」

F 『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらぬいな』

さつきから誰だろう。姫路さんに積極的にラブコールを送る人は

雄二「木下秀吉だっている」

秀吉「む？ ワシか？」

F 『おお……！』

F 『確かアイツ、木下優子の……』

F 『秀吉好きだああ』

秀吉「ワシは男じゃ！！」

ドンマイ秀吉

雄二「そして川神姉妹もいる」

一子「え？」

百代「ん？」

雄二「川神百代は皆も聞いたことがあるだろう。

うちの学園の『文月四天王』の1人であり、この川神四天王の1人でもある」

F 「なに！？ 『文月四天王』だと！？」

F「確かそれってうちの学園最強の4人に称される名だろう」

F「それに川神四天王ってあの武道の頂点の4人のことだろ」

F「そんな人がFクラスに」

雄二「そうだ。それが今は俺たちの味方だ。

そしてその妹の一子も姉ほどじゃないが強い」

一子「照れるなあ」

百代「まあ面白うそうだな」

雄二「そして真田八雲もいる」

八雲「ん？俺か？」

雄二「そうだお前だ。こいつもAクラス並の実力があるし、

武術も川神に引けをとらないはずだ」

F「すげえAクラス並も成績が2人もいるのかよ」

雄二「当然、この俺も全力を尽くす」

F「確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな」

F「『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』」

F『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

そういえば雄二も頭良かったんだよな。今は知らないが

雄二「そして吉井明久だっている！」

シーンとクラスが静まり返った……って

明久「ちよっ?! 雄二っ!! どうして僕の名前がそこででてくるのさ!

ぜんぜんそんな必要なかったよね?!」

F『……誰だ? 吉井明久って』

F『いや、知らん』

明久「ほらせっかく、もり上がっていたのに、

なんでテンション下げるようなことするのさ!」

すると雄二は任せておけと言うようにこっちを見た後

雄二「なんだ、みんな知らないのか? 知らないなら教えてやるこいつは《観察処分者》だ」

あつ雄二。余計なことを

F『まじかよ! 初めて見たぞ』

F『それって、学園最低のバカの称号じゃなかったっけ?』

明久「ちがうよっ！ちよっとおちやめな十六歳につけられる愛称だよ！

あとそれ以上言つと色々危ないよ」

雄二「確かに問題を起こした奴に与えられる称号だが

そのかわり物に触れたりすることができる」

え？珍しく雄二がフォローを入れた。何だあの雄二なんか怖いな

F『おおそれは確かに凄い！』

雄二「だが、教師立ち会い下でしか召喚できないし、

フィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が受けてしまうのさ」

するとみんなは再び話し始めて

F『て、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しむってことか』

F『おいおい、それじゃあ、あまり召喚できないヤツがいるってことじゃないか』

F「《観察処分者》なんて使えないじゃないか！」

お前らそんな事言つてると後でどうなるかしらないぞ

雄二「そうだ。結局はFクラスの観察処分者は使えない役立たずだ。居ても居なくてもあまりかわらないヤツだ」

明久「……雄二」

雄二「なんだ明久」

明久「僕は雄二や皆のことを忘れないよ」

雄二「は？お前は何を言って」

百代「お前ら覚悟はできてるんだろうな？」

そこで武神が腕組して立っていた

八雲「言っでなかったが俺と百代は観察処分者だからな。

だから明久に言っでいた言葉がそのまま俺と百代に当てはまる事になるからな」

俺は教師を殴ってなったが、

百代は授業態度が悪かったりしたので学園長の鉄心のじいさんが観察処分者にさせたのだ。

雄二「な、なんだと!？」

明久「だから言っただのに」

雄二「明久助けてくれ!!」

F『吉井、真田助けてくれえ!!』

明久「姉さん」

百代「なんだ？」

明久「死なない程度にしてあげてね」

百代「もちろんだ」

雄二「な！？明久。ぎゃあああああああああ！！！！」

F『ぎゃあああああああああ！！！！』

百代の成敗からしばらくたって

八雲「観察処分者は物に触れることができると言うことは

雑用を多くすることになるがその分コントロールが上手くなるんだ」

ここで一応フォローを入れておく

F『おお！召喚獣対決ではほぼ最強じゃん！！』

F『確かに俺たちの戦力になってくれるな！！』

再びクラスはテンションが上がっていった

雄二「まずは小手調べにEクラスを攻め落とす」

雄二はそう言うとしし間をおいてから話し始めた

雄二「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

F「当たり前だ！！」

雄二「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

F「おおーっ！！」

姫路「お、おー……」

姫路が雰囲気におされて小さく腕を上げている。
みんなやる気で満ち溢れている

戦争の引き金を引くもの！（後書き）

ここからは少しオリジナルを加えながらの話になります。

まずはEクラス戦ですが、

次話はオリキャラや学園についての紹介をしたいと思います

これからも応援よろしくお願いします。

また、まだマジ恋キャラ募集中なので出して欲しいキャラがいたら
ドンドン教えてくださいね

文月学園 設定1

文月学園

私立校だが、それぞれの個性を重んじるための自由な校則とユニークな行事・授業が特徴的で市内を代表する学校。

2年生からは成績に応じてクラスをA～Fの6つに分けられる。

また、この学園には生徒の自主性、競争意識を尊重するため、そして高めるために決闘や試召戦争というユニークなシステムがあり、

お互いの合意があれば、白黒つけて戦う事を許可している。

【校訓】

切磋琢磨

【教育目的】

頭だけでなく体も鍛え強い心を鍛える

これからの社会で生き抜き、勝ち抜くための術を教える

召喚戦争のルールと各科目について

～ 召喚戦争のルール ～

1、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。

なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

2年学年主任：高橋洋子

西村 宗一に関しては全教科、総合科目での勝負の立会いを可能とする

- 2、召喚獣は各人1体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。
- 3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。
- 4、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。
- 5、相手が召喚獣を喚び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は
戦闘放棄とみだし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。
- 6、召喚可能範囲は、担当教師の半径10m程度（個人差あり）。
- 7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。
召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。
ただし決闘の場合はこれには当てはまらない。
- 8、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。
この勝敗に対し、教師が認められた勝負である限り、経緯や手段は

不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

） 試験科目について ）

【 科目 】

- | | | |
|-------|-----|-------|
| ・現代国語 | ・数学 | ・保健体育 |
| ・古典 | ・化学 | ・英語 |
| ・世界史 | ・物理 | ・現代社会 |
| ・日本史 | | |
- 以上、計10科目に設定しています。

総合科目は上記の全ての点数の和とし、
召喚獣の腕輪は各教科400点以上の時に装備される。
総合科目では4000点の時装備される。

各クラスの総合科目の点数

- | | |
|--------|------------|
| ・ Fクラス | 1000点以下 |
| ・ Eクラス | 1000～1300点 |
| ・ Dクラス | 1300～1600点 |
| ・ Cクラス | 1600～1900点 |
| ・ Bクラス | 1900～2200点 |
| ・ Aクラス | 2200点以上 |

こんな感じに考えてます。

ただし、A～Eクラスは定員50名となっているので
Eクラス並の点数でもFクラスになる可能性がある

） 宣戦布告 ）

相手に宣戦布告する際は、各クラス毎に置かれているワッペンがあるので、

戦争の意志を伝え、クラスのワッペンを置く事。

そうしてようやく戦争を行うことができる。

その後は教師に戦争を行うことを伝える事

） 決闘システム ）

お互い合意があれば、白黒つけて戦う事が許可されている。

（互いのワッペンを重ねる事で）

形式は、勉強でもスポーツ、喧嘩でもなんでも良い。

決闘中の怪我は合法である。

もちろんいくつかの規則がある。

1、肉体を使用する決闘の場合は決闘法を明記し教師に届け職員会での承認が必要。

2、決闘に立会人が必要な場合は、教師がそれを担当し公平な立場でジャッジをする

3、肉体を使用する決闘の場合は必ず2人以上の教師が必要

4、決闘はなるべく召喚獣を用いて行うこと。

ただしそれが絶対ではないが教師の許可が必要

文月学園 設定1（後書き）

今回はこの物語の設定についてです。

質問やご意見がありましたら教えてください。

オリキャラ紹介1

真田 さなだ
八雲 やくも

- ・身長 176cm
- ・誕生日 7月29日
- ・一人称 俺
- ・あだ名 八雲
- ・武器 槍と拳
- ・好きな食べ物 魚料理や肉、お菓子
- ・趣味 ゲームや漫画（軽いオタク）
- ・特技 色々と器用にこなせる。
武術を扱うこと

- ・見た目は戦国バサラの真田幸村で髪の色が黒である。
- ・真田幸村の子孫で槍を使う事が得意である。
- ・両親は武道家で道場を開いていて凄腕の持ち主である。本人も両親の血を引いているので腕のほうはピカ一である。
- ・両親は現在は海外のほうで指導していて、道場の門下生が暮らしている寮で生活している。
- ・実家に自室があるがなんとなくこちらに住んでいる。
- ・この寮自体はまだ新しいので門下生は誰も住んでいない。
- ・友達や仲間が侮辱させる事が嫌い
- ・八雲の武道の腕前は物凄く高く川神百代に匹敵するほどの腕前。
- ・主に槍を使うが拳でも充分に戦える事ができる。
- ・成績もAクラス並あり文武両道である。
- ・常に仕込み槍を所持している（暴れた百代を抑えるため）
- ・明久と同じ観察処分者である

- ・時々まじめだが時々フリーダムな男
- ・バイトを数箇所掛け持ち中

< 召喚獣 >

- ・武器と防具は戦国無双3の真田幸村の装備
- ・腕輪の能力は『風林火山』

『風』・・・風を操ることができる。

『林』・・・1分間だけ召喚獣の姿を消す事が可能
風を纏う事でスピードを上げることが可能

ただし攻撃しようとする姿を現してしまう

『火』・・・炎を操ることができる

炎を纏う事で攻撃力が増す

『山』・・・大地を操ることができる

土を纏う事で防御力を増す事が可能

< 成績 >

	平均
・現代国語	300点
・古典	100点
・日本史	700点
・世界史	400点
・現代社会	200点
・数学	600点
・物理	500点
・化学	300点
・英語	100点
・保健体育	300点
・総合科目	3500点

今後伸びる可能性あり

オリキャラ紹介1（後書き）

オリキャラの紹介でした。

戦争前の話し合い

雄二「明久、お前にはEクラスへの宣戦布告の使者をやってもらう。大役だ、任せるぞ」

明久「下位勢力の使者って、たいがいヒドい目にあうよね？」

雄二「大丈夫だ。たかが学生の戦争ごっこで本当に危害を加えるわけはない」

明久「ほんとうに？」

雄二「もちろんだ。俺は友人をだますような真似はしない」

明久「けど……」

八雲「だったらワン子を護衛につけていけ。それなら安心だろう」

一子「え？アタシ？」

八雲「行ってくれたら今度昼飯おごってやる」

一子「アタシ行くわ！」

エサをやると簡単につれた

明久「ワン子。いいの？」

一子「勿論よ！早く行くわよアキ」

そう言うとワン子は明久を引っ張り教室から連れ出した。

しばらくして明久とワン子は無傷で帰ってきた。

ワン子の人付き合いの良さのおかげで無事だったらしい

雄二「……ちツ（無事だったか）」

明久「ねえ、今舌打ちしなかった？」

雄二「さて、今からミーティングを行うぞ」

明久「あれ、今スルーされた？」

八雲「じゃあ行くこうぜ。明久もブツブツ言っていないで行くぞ」

一子「早く行きましょー！」

康太「……了解」

明久「ムッリーニもつ畳の後なら消えてるよ」

康太「……！！（ブンブン）」

八雲「いや、今さら否定されても」

康太「……………！！（ブンブン）」

八雲「大丈夫だ。ムツリーニがHなのはよく知っているから」

康太「……………！！（ブンブン）」

明久「……………ちなみに何色だった？」

康太「みずいろ」

……………即答かよ

明久「さすがムツリーニだね」

雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

そして、屋上にて。

雄二「で、明久。時間は伝えたのか？」

明久「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」

雄二「今日も弁当か明久」

明久「うんそうだよ。はい、モモ姉、ワン子、八雲」

八雲「いつも悪いな」

俺たちは明久から弁当をうけとる

一子「わーいお弁当だ！いただきます！」

パクパクパクパク

八雲「おい落ちついて食べるよワン子」

一子「だっておいしくてつい」

姫路「あれ、川神さんが食べてるお弁当って？」

一子「アキが作ってくれるのよ」

百代「弟の弁当は美味しいからな」

島田「え？吉井が弁当作ったの？」

明久「そうだよ」

姫路「う、嘘です。吉井君が料理できるなんて信じられません」

島田「そうよ。本当は誰が作ったのよ！」

雄二「いや、その弁当は本当に明久が作ったんだぞ」

秀吉「明久の料理は美味しいからの」

康太「……………また食べたい」

岳人「そうだけ。明久の数少ない利点だからな」

八雲「え？ガクトお前利点って言葉知ってるのか？」

ガクト「おい、それはどういう意味だ！」

雄二「さて話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

ガクトの言葉を無視して話を進める

秀吉「Eクラス相手じゃな。どんな風に戦うのじゃ？」

雄二「いやEクラス相手には作戦という作戦はない。ガチで戦う」

秀吉「Eクラス相手に作戦なしじゃと？」

雄二「そうだ。色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。

明久見てみる。ここにいるメンバーを」

雄二が明久に集まったメンバーを見ると言い、明久は全員の顔を見直し言っと、

明久「えーと、美少女が3人、バカが2人にムツツリが1人と天才が1人

筋肉が1人に犬が1匹いるね」

雄二「誰が美少女だと!？」

明久「どうして、雄二が美少女に反応するの!？」

康太「……………（ポッ）」

明久「ムツツリーニまで!? どうしよう!? 僕だけじゃツツコミ切れないよ!？」

美少女に雄二と康太が反応して明久は声を上げる。

ガクト「俺様が筋肉だな」

一子「誰が犬よ!!」

八雲「おっ、わかつたか」

一子「わかるわよ!」

秀吉「まあまあ皆落ち着くのじゃ」

秀吉が明久たちを落ち着かせると

雄二「ま、要するにだ」

コホンと咳払いして雄二が説明を再開する。

雄二「姫路や八雲に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。」

今回の目的は八雲と明久、姫路の点数確保が目的だ」

一子「どういふこと?」

雄二「この3人は振り分け試験を途中退席したから今の点数は0点になっているからな」

秀吉「それを回復試験で点数を回復するわけじゃな」

雄二「そうだ。初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？」

姫路「あ、あの〜」

雄二「ん？ どうした姫路」

姫路「えっと、その………吉井君と坂本君は、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

雄二「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて」

明久「それはそうと！」

明久「タイミングが悪いぞ。少し聞こえたんじゃないか？」

明久「さっきの話、Eクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる………いいか、お前ら。」

ウチのクラスは 最強だ」

島田「良いわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「……………(グッ)」

姫路「が、頑張りますっ」

百代「まあ面白そうだしな」

ガクト「俺様がやっつけてやるぜ」

一子「アタシも頑張るわ」

八雲「じゃあいっちょ頑張りますか」

雄二「そうか。それじゃ、一度教室に戻るぞ」

戦争前の話し合い（後書き）

次回はEクラス戦です。

どのように戦うのかお楽しみに

皆さんの感想・ご意見お待ちしております

これからも応援よろしくお願いします

Eクラス戦

雄二「戦争の前に軽く作戦を伝える。Eクラス戦には数学の長谷川先生を使う。」

丁度5時現目でEクラスに向かうのでそこで確保する」

島田「数学って事はウチの出番ね」

島田さんはドイツからの帰国子女なのでまだ日本語が得意ではないらしい。

数学は数字なので文章題を除けばかなりの点数だったはず

雄二「そうだ。その島田の数学を主力にして戦う」

島田「姫路さん数学は？」

姫路「苦手ではないですけど・・・」

島田「なら姫路さんも一緒に戦えるね」

雄二「いや、それは無理だ」

一子「どうして？」

八雲「姫路は俺と明久と同じで試験を途中退出したから0点扱いだからな」

雄二「でも試召戦争が開戦したら回復試験を受ける事ができる。」

それを受ければ途中からでも参戦できる。

験を

だから八雲と明久、姫路は戦争が開始されたらすぐに回復試

受けるんだ。先に言っておくが姫路は今回の戦争では出さな
いからな」

秀吉「それはどうしてじゃ？」

雄二「まだ姫路を隠しておきたいからな。今後の戦いに必要だから
な」

雄二「で一子とガクト、秀吉は島田と一緒に前線に向かってくれ。

ムツツリーニは今回は情報収集を頼む」

康太「……………わかった」

百代「私はどうすればいい？」

雄二「川神姉については自由だな」

明久「自由にしているの？」

雄二「まあ今回はいいだろう。今回はストッパーがないしな」

八雲「ストッパーって俺か？」

雄二「まあとりあえず皆頑張ってくれ」

F 全員『了解!!』

キンコーンカーンコーン

ガラッ

F「長谷川先生を確保したぞお！」

雄二「開戦だあ！！総員戦闘開始！」

F全『おおお！！』

FクラスとEクラスは隣の教室なので廊下に出ればすぐに戦闘が開始される

島田「島田美波、いきます！」

秀吉「木下秀吉、参戦いたす！」

一子「川神一子、勝負するわ！」

ガクト「島津岳人、いくぜえ！！！」

長谷川「承認します」

島・秀・一・ガ『試験召喚獣召喚！！』

4人の召喚獣が召喚される。

島田の召喚獣は軍服にサーベルという武器

秀吉は袴に薙刀、一子は武道着に薙刀、

ガクトは上はタンクトップで下は普通の長ズボンで武器は籠手のよ
うだ

Fクラス<	数学	>
島田	158点	
秀吉	76点	
一子	65点	
ガクト	45点	

島田「来るわよ」

Eクラスの生徒がFクラスへ乗り込もうと次々現れる

一子「ここを通りたいならアタシたちを倒す事ね」

三上「三上良子、受けます」試験サモン召喚獣召喚！！」

Eクラス< 数学 >

三上 81点

三上「こいつっ」

三上さんの召喚獣がガクトの召喚獣に攻撃する。数点ガクトの点数が削られる

三上「トドメ！」

三上さんがガクトの召喚獣にトドメをさそうとするとそこへ島田さんの召喚獣が割り込み攻撃を防ぐ

島田「それはこっちのセリフよ」

島田さんの攻撃により三上さんの召喚獣は0点となった

三上「そ、そんな」

島田「数学ならEクラスには負けないんだから」

ドシン　　そこへ

西村「戦死者は補修室に集合！」

島田「あれは!?!」

秀吉「鉄人」

西村「召喚戦争のルールに則り戦死者には補修を行う」

三上「た、助けて〜、鬼の補修はイヤ〜」

Eクラスの三上さんが鉄人によって補修室に連れて行かれた

秀吉「ここを通りたければワシらを倒していくのじゃ」

そこでFクラスとEクラスの戦闘が行われることになった

一方 教室では

俺と明久、姫路が回復試験を受けていた

百代「で雄二。どっという作戦で戦うんだ」

雄二「作戦なんてねえ。力任せのパワーゲームで押し切られたほうの教室に敵が流れ込む。そして代表が倒されたほうの負けだ」

百代「そうか」

雄二「おそらく押し込まれるだろうが、こちらには川神姉がいるからな。

それに押し込まれるまでには時間がかかるだろう。

その時には八雲と明久の試験が終わるからな」

百代「なら期待にこたえるよう頑張るさ」

雄二「頼むぞ」

しばらくして

島田「大変押し切られる！」

その言葉通りEクラスの人たちがFクラスへとなだれ込んだ。

今のところ残っているのは雄二と百代、秀吉、島田、一子、ガクト、ゲンさんの7人だ

まだ、あの3人は回復試験から帰ってきていない

一子「ごめんなさいお姉様。アタシ達じゃとめられなかったわ」

百代「別に良いさ。ここからは私がやるさ」

一子「え？お姉様が」

百代「ああ、暴れたくてウズウズしてたんだ」

雄二「じゃあ川神姉たのむな」

川神「川神百代、いざ参る『サモン試験召喚獣召喚！！』」

Fクラス< 数学 >

百代 55点

中林「な、何よ。勿体つけちゃって。そんな点数では私たちには勝てないわよ」

百代「それはどうかな」

そこで百代の召喚獣が一気に駆け出していく

E「な、なに！？動きが早いぞ」

百代の召喚獣は敵の攻撃をどんどんかわしていく

百代「いくぞ！川神流奥義『無双正拳突きイ！！』」

一度の攻撃でEクラスの敵を5人まとめて戦死させる

中林「なによあの動き！？」

雄二「知らないのか？あいつは観察処分者であり文月四天王の1人だぞ。

観察処分者だから召喚獣の操作はピカーだからあんな反則的な動きができるんだ」

百代「さあどんどんかかって来い！」

一子「さすがお姉様」

ガクト「モモ姉が味方で助かったぜ」

その間にもモモ姉がドンドン敵を倒していく

雄二「……そろそろだな」

中林「クツ！なら代表を狙うわよ」

明久「それはさせないよ」

中林「だ、だれ？」

雄二「やっと来たか明久」

明久「吉井明久よしいあきひさ、いきます。」「試験召喚獣召喚サモン！……」

Fクラス< 数学 >

明久 105点

中林「負けないわよ。」「試験召喚獣召喚サモン！……」

Eクラス< 数学 >

中林 89点

明久「じゃあいくよ」

明久は中林の攻撃を余裕でかわしていき攻撃を加えていく

中林「Fクラス相手にい」

明久の攻撃により中林の召喚獣は倒れた

中林「そ、そんな」

こうしてこの試験召喚戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた
この後戦後対談でEクラスと設備を交換し戦争は終わった

八雲「あら？俺の出番なし!？」

雄二「いや、思ったたより川神姉の動きが良くてな」

百代「たまにはこういう戦いも面白いな」

八雲「え!?!え」

明久「八雲、次回頑張ろうね」

俺はしぶしぶ了解し、明久たちと帰っていった

Eクラス戦（後書き）

あっさりとEクラスには勝ちました。

さすが百代という感じですよ。

まだまだマジ恋キャラ募集中です。

ちなみに今、登場決定しているのが
マジ恋では、

大和、京、クリス、九鬼英雄、あずみ、マルさん
準、ユキ、冬馬
の9名と

マジ恋Sでは

燕さんと、

天神館から、石田三郎、焔、晴の 4名です。

そして皆さんに2つ質問なんですけど

マユっちは参戦させたほうがいいですか？

今、かなり悩んでいます。

もし出したなら1年として出そうと考えています。

そして2つ目の質問なんですけど

燕さんの武器の平蜘蛛ってどんな武器だと思いますか？

腰に巻いてあるホルスターが気になるのですが………

扉を開けて入ってきたのは

大和「直江大和なおえやまとです。今日から2-Fのメンバーになります。
皆さんよろしく願います」

京「……椎名京しいなみや。よろしく」

福原「席は空いてるところに座ってください」

F「女子だあああああ」

F「やべえマジ可愛いんだけど」

F「俺と付き合ってください」

今、おかしいことが聞こえたが気にしない。今はそれより

八雲「久しぶり2人とも」

明久「大和に命じゃないか！？久しぶりだね」

百代「久しぶりだな大和、京」

一子「京久しぶり」

ガクト「おう大和、元気にしてたか」

大和「皆、ただいま」

京「皆、久しぶりだね」

八雲「お前らなんでここに？」

大和と椎名は俺たちと小学校からの友人だ。

とある事情で県外の高校に行ったはずだが何でここに？

ちなみに2人は付き合っています。

それを皆に伝えたら暴徒と化したが百代が一発殴ると一瞬で収まった

大和「いや、あっちの学校がつまらなかつたから転校してきたんだ」

京「私もだよ」

明久「そうなんだ。それよりこれで僕達のグループは元通りだね」

俺、明久、百代、一子、ガクト、大和、京の7人で小学校の頃からずっと仲良くやってきた

俺たち8人で真田ファミリーと名乗っている。

一応俺がリーダー（キャップ）という事になっている。

八雲「まあこれからまた楽しくなりそうだな」

大和「そうだな。ところで俺が来たのはこのクラスはFクラスなんだよな」

一子「そうだよ」

大和「じゃあなんでEクラスの設備にいるんだ？」

八雲「ああそれはな」

俺はそこでこの文月学園のルールと昨日行われた戦争について話した

大和「そういうことか」

八雲「じゃあこのクラスの代表を覚えておくな。おーい雄二！」

雄二「どうした八雲？」

八雲「こいつが俺たちの代表だ。そして俺のダチだ」

大和「初めまして先ほども言ったが直江大和だ。よろしく」

雄二「ああ、このクラスの坂本雄二だ。好きに呼んでくれ」

八雲「大和は俺たちファミリーの軍師だ。だから頭がすぐくきれる。今後の試召戦争で必ず役に立つぞ。あそこでワン子と話してる京は弓がかなり上手い」

雄二「そうか。これからよろしくな」

大和「こちらこそよろしくな」

その後は大和と京にこの学校でできた友達を紹介した。

そして昼休み

俺たちが食事を食べ終わると

八雲「よしそろそろ仕掛けるか。仕掛けて仕損じはなし。

おーい皆聞いてくれー！あと1人の転入生だけど性別もわ

からなくて、

謎に包まれているだろ？

どうせなら男か女か賭けないか？賭け札作ったんだ」

須川「お。いいな。真田が胴元になるのか」

八雲「ああ。手数料なんざとらねえよ。男か女か1つに絞って賭けるってことで。

で、札は1枚千円。配当はどっちも2倍、公平だろ？」

百代「よし、乗った！私は男に3枚だ！！」

八雲「おー早速かい。毎度あり。ちなみに上限1万ね

ってか百代金、大丈夫か？」

百代が自信満々に買ったことで他のメンバーも買い始めた。

須川「情報だと男って噂がきてたからな」

忠勝「はっ……くだらねえが…小遣い稼ぎにやいいか」

一子「ちよつと軍師大和、これどっちなのよ正解は？」

大和「知らない。だって俺今日転入してきたんだぜ。情報がねえよ」

明久「あれ、ワン子やらないの？ ださいね。八雲、女に3枚！」

一子「やってやるわよ！！！！ 女に1枚！」

最終的にはFクラスの全員（大和と京、姫路以外）が買っていた。

ちなみにほとんどが男にかけている。
女にかけているのが明久、一子、雄二、秀吉、ムッツリーニ、ゲン
さんの6名だ。

そして

雄二「明日試召戦争をするから明久。Dクラスに宣戦布告して来い」

明久「嫌だ」

雄二「やっぱり断るか」

明久「当たり前だよ」

八雲「昨日は明久がいったから今日はガクト言っ来て来い！」

ガクト「なんで俺様が」

八雲「確かDクラスの子は力が強い男が好きだった気が・・・」

ガクト「仕方ない。俺様がいつてきてやるっ」

ガクトはそういつとDクラスに向かつていつた

明久「ねえ八雲。その話本当？」

八雲「あんなの嘘に決まってるだろうっが」

雄二「やっぱりな」

すると

ガクト「だまされたあああ!!」

ガクトがボロボロの状態に戻ってきた

八雲「ガクトお帰り。ちゃんと明日の宣戦布告してきたか」

ガクト「八雲この野郎。嘘だったじゃねえか!」

八雲「え?何が?」

ガクト「Dクラスだと、俺様が超もてるって言ったただろうが!!」

八雲「俺そんなこと言った?」

京「ガクトの気のせいじゃない」

大和「まあガクトは名前負けしてるからな」

京「それもそうだね」

ガクト「なんだこの2人。戻ってきたと思っただらコレかよ」

八雲「それがガクトの運命なんだよ」

大和「だな」

百代「そうだな」

一子「そうね」

京「そうに違いない」

明久「そうだね」

ガクト「なんだこの幼馴染達。本当に容赦ねーな」

秀吉「凄いカオスじゃの」

雄二「面白いから良いんじゃないのか」

康太「……………（コクン）」

ちなみに大和と京は俺の道場の寮に住むことになったらしい。

大和たちが住むのは今年新しく建てたほうなので、俺もそこにすんでいる。

また。そこはガクトの母麗子さんが平日、食事をつくってくれる。

詳しくはまたどこかで……………（多分）

新しい仲間（後書き）

大和と京参加です。

朝からの挑戦者

次の日、川沿いを歩いていると

大和「こつも天気が良いとそこの川辺で昼寝したいな」

八雲「それ俺も思った。じゃあ昼寝でもするか？たまにはいいだろ」

明久「だめだよ。八雲、今日はDクラスとの試召戦争があるんだから」

八雲「なんだ誰もサボリフレンドはいないのか？」

ガクト「今日は試召戦争だからな、俺様の見せ場だしな」

八雲「どこかに同志は……誰か、笛もってきてるか？」

京「当然。ブリーダーには必需品」

大和「俺も持つてる」

ガクト「俺様も。面白いからなこれ」

八雲「ワン子呼んでくれ」

明久「じゃあ吹くよ」

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

明久が笛を吹くと遠くからワン子が走ってきた

一子「呼んだっー!? ていうか、おはよー!」

八雲「ようワン子。おはよう。そして笛を吹くとすぐ来る習慣は偉いぞ、いい味出してる」

一子「なによ。アンタ達がそういう風にしたんでしょ」

皆で面白がってしつめたのだ。

一子「ちゃんと来たんだから、サ、ね?」

期待したような目で見上げられる。

八雲「キャラメルやるよ」

一子「これじゃ栄養足りないわよ! 肉的なものを出しなさいよ」

大和「英語で言ってみてくれ」

一子「……いんぐりっしゅ?

ぷ……プリーズ ミート イン マイ マウス フロム モーニング」

ガクト「お前馬鹿だよなあ。恥ずかしいヤツだ」

一子「あははっ! ガクトには言われたくないわね!」

明久「馬鹿っぽいなあ」

京「実に馬鹿」

一子「…な、なんだよお…イジめるために呼んだの？」

八雲「とりあえずキャラメル系を食え系で」

俺は一子の口にキャラメルを詰め込んだ。

俺は専ら一子の教育・世話係みたいなものだ。

一子「むぐむぐ系。これはこれで美味しい系」

簡単に機嫌が直った。食べ物を食べさせれば大抵落ち着く。

百代「皆揃っているな。どうした道端で」

ガクト「はて、これもともとの話だっけか？」

大和「ワン子、馬鹿って言い返すチャンス到来だぞ」

一子「ぐまぐま」

キャラメルを咀嚼していた。

八雲「……皆揃っちゃったし登校するか」

明久「うん。サボって鉄人に目をつけられるのはイヤだしね」

八雲「だな」

大和「よし行くぞ」

仲間が7人揃って、川辺を歩き始める。

傍から見れば仲良し幼馴染軍団だが、普通とはひと味……いや、なな味ぐらい違うな

京「ん？ 橋の所に誰がいるよ。こっち見てる」

百代「男か。……武道やっている人間だな」

一子「お姉さまか八雲目当てじゃないかしら？」

明久「また挑戦者……か」

百代「面白い。この前の不良どもじゃつまらなかったんだ」

俺を除いた女子が武道集団なのだ。まあ俺は真田道場の跡取りだからな。

この前の不良軍団と違い、道義を身を包んだ拳法家風の男が1人で待ち続けていた。

拳法家「……貴女が川神百代さんで、貴方が真田八雲さん？」

百代「いかにも」

八雲「そうだが」

拳法家「私は雲野十三。武の探求者だ。高名な川神院の鉄心先生に相手を願おうとしたところ、

貴方に勝てないと勝負を受けられないと」

百代「そういう仕組みになっている」

八雲「あのじいさんめ。なんで俺まで加えるんだよ。

まあいいや、百代よろしく。俺はパスする方向で」

百代「もちろん私がやる！」

拳法家「…フフツ…フフフフ、フハハハハ！！！」

かわかみてっしん
川神鉄心、噂だけの男だったのかい！」

百代「ん？」

拳法家「そうだろう？こんな美人な女子学生と

試合しろなんて正気の沙汰とは…（ジロジロ）」

拳法家『…！！！！！！？』

（な、なんだ良く見ると全くスキがない、端目にはただの

美人だが…

俺には理解できる、その理不尽なまでの強さ）』

拳法家「大変失礼な事を！！！！ 申し訳ない！！！」

いきなり相手が謝った。

拳法家「貴方は武道家でありました。お手合わせを」

百代「…承知…ふふふ。場所は今ここで。すぐに戦おう。服はこれで問題ない」

モモ姉が嬉しそうに笑った。相手の心意気に応えるべく本気だ戦うようだ。

また周囲にギャラリが集まろうとしていた。

百代「今回は正式な死合いだ。観客は遠ざけてくれ」

俺たちはすぐさま動き観客を遠ざける。

八雲「ワン子、はじまるぞ」

一子「おっとお。これは絶対見届けないとね」

川原で百代と拳法家が対峙する。

拳法家はすぐさま構えをとる。

百代「構えているが…仕掛けてもよろしいか？」

拳法家「な！？あ、ああ」

百代「せいっ！」

拳法家「ぱぎゅら！」

稲妻が横を走ったように見えた。

八雲「勝負あり」

みれば挑戦者は10mほど吹っ飛ばされている。完全に気絶しているな。

ピシッとした姿勢で相手に一礼する百代

一子「さすが自慢のお姉様。ね、ね、凄いでしょ…」

明久「ワン子揺らさないでよ、わかってるから」

その後百代が川神院に連絡をいれ、挑戦者の治療を頼んだ。きちんと試合形式をとった者には、フオローする。

礼を欠く外道には、その悪の上に行く鬼畜さで処刑するのが百代のスタイルだ。

その後は普通に学校へと向かって行った。

今日は午前10時からDクラス戦が開始される。

Eクラス戦では活躍できなかったが今回は頑張るとしよう。

朝からの挑戦者（後書き）

次回で残りの転入生1人を紹介します。

まあ皆さん検討がついているかもしれませんが・・・

これからも応援よろしくお願いします

ドイツより参上!!

朝のHR

福村「昨日の今日ですが転入生をお知らせします」

凄いな始業式からまだ2日しか立っていないのに3人も転入生かよ

福村「では紹介します」

Fクラスの皆はどんな人かざわついている

ガラガラッ!

転入生? 「ゲーテン・モルゲン」

ざわ ざわ ざわ ざわ ざわ ざわっ!!

一子「え? あ、あの人が転入生だっていうの?

ちよつとふけてる感がないかしら?」

教室に入ってきたのは外国人のオッサンだった

ガクト「そこが問題じゃねーよ!!」

姫路「あのう身体的特徴をしてはいけないと思いますが」

秀吉「突っ込むところが違う気がするが.....」

康太「……………ツツコム……………（ブシュー）」

明久「ム、ムツツリーニ！！」

八雲「お前は何に興奮したんだ？」

福原「皆さん勘違いしないでください。この方は転入生の保護者の方です」

明久「あ、そーなんだ、びっくりしたよ」

福原「あの、ご息女は？」

転入生父「ご安心を。時間には正確な娘です。間もなく駆けて来るでしょう」

オジサンが指差した先、窓に視線が集中する。

転入生父「グラウンドを見てみるがいい」

大和「……………？ げっ!？」

すると窓から外を覗いていた大和から驚きの声があがる

ガクト「どうした大和、何が見えるんだ？」

大和「女の子が学校に乗り込んできた」

ガクト「なんだそりゃ!!！」

大和がそんな事を言うので皆が窓に近づき外を覗く

明久「うん確かに乗り込んできたねえ」

明久「馬で」

クリス「クリスティアーネ・フリードリヒ!! ドイツ・リユーベ
ツクより推参!!」

この寺子屋で今より世話になる!!!!」

馬に乗り、風にたなびく金髪が美しい。

須川「おおお金髪さん!可愛くね、マジ可愛くないか!?!」

ガクト「超・当たりなんですけどおおおお!!!!!!!!」

百代「アレは本当に可愛いなあ」

乗り込んできた美少女に男子達が咆哮する。

1人女子がまぎれているが.....

八雲「はははは、馬かよ！面白いなあいつ」

島田「うわ…あれはもう完全に負けたわ…でも馬って」

クリス父「日本では馬は交通の手段だろう」

明久「いや、あの、道路とか見ましたよね？」

クリス父「自動車が多かった。だがTVでは馬も走っている」

秀吉「それは時代劇だと思うのじゃが」

クリス父「おお、あれはまさか……」

八雲「ん？げえ！！よりによって例外が……」

窓の外を見るとよりもよって例外が現れた

クリス「ここが今日から自分の学び舎か。

自分の他に馬登校はいないのだろうか？」

英雄「フハハ！転入生が朝から馬で登校とはやるな」

あずみ「おはようございますっ」

それは俺たちと同じ学年の九鬼英雄だ。

あいつは九鬼財閥の息子で人力車で登校している

そしてメイドのあずみだな。1人で人力車を動かすとは本当に凄い女だな

クリス「それは……ジンリキシヤ」

英雄「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄くまひであである！」

クリス「自分はクリス！馬上にてご免」

英雄「我が名は九鬼英雄！いずれ世界を統べる者だ！

この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！！！」

そこで九鬼は金ぴかの学ラン（特注）の背中に書かれている昇り龍
を見せ付ける

クリス「おお、まるで遠山！」

クリス父「人力車で登校の生徒もいるとは、さすがはサムライの国
ですな。ハハハ」

クラスの皆があんぐりと口を開けていた

明久「雄二……この人達つてもしかして」

雄二「ああ……“日本を勘違いしている外国人”だ」

あの後も転入生は馬でここまで来ようとしていたし、
あの福原先生でも頭を抱えていた。

クリス「クリスティアーネだ。改めてよろしく！」

凜とした声と立ち振る舞いに男達は見惚れていた。

ガクト「はいはい！！質問です。 えーと、くりすていあーね？」

クリス「自分としてはクリスと呼ばれることを希望する」

ガクト「クリス。 彼氏はいたりすんのかな？」

ガクトの質問にFクラスの男子が身構える。

皆、よく言ったという顔で返答を待っていたが

クリス父「そんなものいないに決まってるだろうガツ！！」

クリスの親父さんの怒号でクラスが静まりかえってしまった。

クリス「父様のおっしゃる通りだ」

ガクト「そ、そーすか……」

クリス父「クリスにちよつかいを出す者は軍が殲滅する」

姫路「GUN？」

クリス「父様は任務に私情を持ち込まない軍人だ」

秀吉「いや、今持ち込んでいた気がするがのう」

クリス「友達から日本の良さをいっぱい聞いてきた。

日本のドラマも見ている」

明久「ちなみにそのドラマって何？」

クリス「大和丸夢日記や鬼兵などだな」

クラスの皆がやっぱりか、という顔をした。
いずれも日本では有名な時代劇だからな。

クリス「ここに来る前に、京都にも観光で1度寄ったのだが、

ドラマ（時代劇）そのものの場所で感動した！」

ガクト「映画村だ。それ絶対映画村だ」

姫路「日本のどういいうところが好きなの？」

クリス『武士道精神！』

クリス「自分は騎士道精神を父様より教わったが…

驚いた事に日本のボクサーは負けると切腹するという、
何と誇り高い！ボクサーまでサムライとは

姫路「あのそれ…一部の人が勝手に言っただけで…」

秀吉「しかも負けても切っておらぬし」

クリス「SUMOUのRIKISHIのKIは全てを貫通するとい
う。まさに神技」

康太「……………それはネット上のコラージュ」

雄二「つまり日本人を過大評価しすぎているんだ」

クリス「父様、これが武士の“謙遜”なのですね」

クリス父「うむ。日本人は慎み深いと聞く」

クリス「素晴らしい考えだと思います」

雄二「もう何を言っても無駄だろうなこれは…」

その後、クリスの親父は馬を連れて帰っていった。

最後に「何かあれば戦闘機でかけつけてくるからな」と言っていた。それを聞いてFクラスの皆はかなり落ち込んでいた。

その後追撃で俺のトトカルチョで皆はずしていたのでショックを受けていた。女にかけた人と俺は儲けたな。

ドイツより参上!! (後書き)

クリス登場です。

そして何気なく英雄とあずみを出してみました。

次回はいよいよDクラス戦です。

Dクラス戦 ～開幕～

その後HRが終わるとすぐに試召戦争の準備に入った。
クリスには試召戦争について軽く説明しておいた
大和と京には昨日話した。

雄二「皆、明日はDクラスと戦争を行う。」

昨日のEクラスと違った戦いになるが俺たちには
昨日言ったように強力な仲間がいる」

F「そうだ！俺たちには姉御がいるんだ」

F「それに姫路さんもいる」

F「一子タン俺とつきあってくれ」

F「京さん俺と結婚してくれ」

今また何か幻聴が聞こえた気が……

雄二「そこで昨日は戦争になれるため何も言わなかったが、
今回からは隊を作る」

明久「隊？」

雄二「ああ、前線部隊、中堅部隊、遊撃舞台、情報部隊、近衛部隊、
補給支援部隊の6つの部隊を作ろうと思っている」

八雲「で雄二、もう割り当ても考えてるんだろ」

雄二「ああ、今それを張り出す」

そして雄二は紙に書かれた部隊表を黒板へと貼りつけた。

< 前線部隊 >

部隊長 源忠勝 補佐 川神一子

以下 8名 計10名

< 中堅部隊 >

部隊長 吉井明久 補佐 木下秀吉・島田美波

以下 7名 計10名

< 遊撃部隊 >

部隊長 真田八雲 補佐 川神百代・クリス

以下 8名 計10名

< 情報部隊 >

部隊長 直江大和 補佐 土屋康太

以下 3名 計5名

< 補給支援部隊 >

部隊長 椎名京 補佐 島津岳人

以下 8名 計10名

< 近衛部隊 >

部隊長 坂本雄二 補佐 姫路瑞希

(代表と兼任)

以下 13名 計15名

とかかれてあった。

俺たちFクラスは他のクラスより11名ほど多い。

理由は成績上位からクラスを分けていて席の数が決まっているので各クラス毎に50名なのでFクラスに残った者が送られるからである

雄二「という風になっている。俺からも指示を出すが

大和からも指示を出すようにしているから大和の指示にも従うように」

大和「ちよつといいか。俺と京は今日きたばかりなのに部隊長をやつて良いのか？」

雄二「ああ、八雲がお前らは役に立つと言ったからな」

大和「それだけで」

雄二「そうだ。まあよろしく頼むぜ軍師さん」

大和「わかった。期待に答えられるようがんばるとしよう」

八雲「なあ雄二。俺の負担でかくないか？」

雄二「気のせいだ」

八雲「絶対気のせいじゃない気がするが……」

雄二「で作戦だが、まずは源率いる前線部隊がDクラスと戦う。

その後ろに明久率いる中堅部隊が状況を見てから

援護しろ。情報部隊はムッツリーニたちで情報を集めてきて

もらっつ。

大和だけは明久たちと一緒に指揮をとって欲しい。
八雲率いる遊撃部隊はまあ自由にしろ。

残りはクラスで待機だ。それでどうだろうか大和」

大和「いいんじゃないか」

雄二「では皆頑張っつて欲しい！」

開戦時間になり、Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切つて落とされた。

一子「はあああああああああああああ！！！！」

一子が叫び、突撃する。

忠勝「突っ込め！！！！！！！！！！」

一子が敵の先手とぶつかる。

Fクラス	川神一子	VS	Dクラス男1
化学	53点		135点

一子は薙刀を上手く使い相手の間合いの外から振り下ろす。
そのまま相手を切り裂き、相手の召喚獣は消滅した。

一子は明久や俺達と比べると召喚獣の操作は上手くないが
普通の生徒と比べるとかなり上手いほうだったから一瞬で倒す事が
できた。

一子「一番手柄、Fクラス、川神一子！！！！」

一子はそのまま敵の群れの中に入った。
その操作の高さで敵をバタバタと倒していく。
倒し損ねた敵はゲンさんが上手く味方を使い倒していく
薙刀を器用に回転させ、なおも敵に切り込む。

忠勝「あそこだ、一子が討ちもらしたヤツらを狙え!!」

敵がひるんだ所にゲンさん達が突っ込んでいく。

D男2「クソっ！Fクラス相手にやられてたまるか」

Fクラス	源忠勝	V S	Dクラス男2
化学	253点		138点

D男2「なんだよあの点数は!?!本当にFクラスか?」

もともとゲンさんはAクラス並の点数を持っている。

試験当日は用があつて試験を受けてないからFクラスらしいからな。

D男3「塚本どうするんだ?」

塚本「焦るな。俺達のほうが点数も数も上だ!囲んでつぶすんだ!
!」

今、前線部隊は10名それに対しDクラスは30名近くいる。

10対30の戦いが始まっていた。
が、すでに一子により6人ほど倒している。

今、遊撃部隊では

百代「おい、八雲どうするつもりだ。私は早く戦いたいのだが」

クリス「自分もだ。早く活躍したいぞ」

八雲「まあ今は待つてよ。今はゲンさんと一子たちが粘っているからさ」

百代とクリスを抑えていた。

そして中堅部隊では

明久「今は前線はどうなっているの？」

大和「今は源とワン子が粘ってくれてるが、そろそろヤバいな」

明久「なら、援護に向かってほうがいいよね」

大和「そうだな。ならまず班を2つに分けて、

えっと木下だったよな？」

秀吉「秀吉でよいぞ。でワシがどうしたのじゃ？」

大和「まず秀吉が4人連れて前線部隊を援護してきてくれないか、
で、その人、八雲に作戦通りに行動してくれと伝言を頼む」

秀吉「わかったのじゃ。では行ってくるぞ」

明久「気をつけてね秀吉」

大和「明久と島田もいつでも出られえるようにしておいてくれ」

島田「わかったわ」

明久「了解」

大和の指示でテキパキ動いていた。

それからしばらくして

F伝「伝令、前線部隊残り半分を切り、木下率いる部隊も2名やられ、

残りは7名となりました」

明久「ゲンさんとワン子の状況は？」

F伝「源隊長は点数が3桁をきり、川神補佐官は先ほど2桁をきりました」

明久「大和！」

大和「ああ、明久たちも行ってくれるか。源とワン子を戦死させないでくれ」

明久「了解！中堅部隊、残った前線部隊を助けに行くよ」

F中『おおう！！！！』

大和「伝令さん、遊撃部隊に動いてくれと伝えてくれ」

F伝「了解」

Dクラス戦 中堅部隊参入

一子「さすがにこれはヤバいわね」

化学
8点

忠勝「チツ、ここまでか」

53点

秀吉「……ここまでかのう」

34点

前線部隊はこの3人を残して全滅してしまった。
相手はまだ17人が程いるし、援護として5名ほど加わってしまった。

3人とも戦死を覚悟していたが

明久「試獣^{サモン}召喚!!」

吉井明久

化学 130点

明久「これより中堅部隊を援護する!皆、僕に続けえ!!」

明久たち中堅部隊が援護に入った。

明久「3人とも大丈夫?」

一子「何とか大丈夫よ」

秀吉「明久たちのおかげでギリギリ間に合ったぞい」

忠勝「だがこれ以上は戦えねえ！」

明久「ここは僕達が引き受けるから回復試験受けてきなよ」

忠勝「すまねえ」

明久「皆！この3人を下がせるよ。援護して」

F中『了解っ！！』

とりあえず指示を出し終わったあと、また別の声が聞こえた。

美春「ようやく見つけました！お姉さま！」

島田「げっ！ 美春」

明久「何？島田さん。知り合い」

清水「……お姉さまに捨てられて幾数日、美春は、美春はこの瞬間を待ち続けていました！」

島田「もう！ いい加減うちのごとは諦めなさい！」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

清水「イヤです！ お姉さまは、いつまでも……いつまでも、美春

のお姉さまなんです！」

繰り返された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

島田「来ないで！　ウチは普通に男が好きなの！」

清水「嘘です！　お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

どう見ても島田さんは本気で嫌がっているはずなのだが、

清水さんにはそう見えならしい。

島田「て、やあ」

清水「負けません！」

何回かの打ち合いがあったが、その全てで美波の召喚獣は打ち負ける。

明久「島田さん！　点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメだ！」

島田「そんな、こと、言われても、細かい、動作は、できない、のよ、

きやつ！？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

清水「ここまでですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。

2人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。

当然、清水さんが94で島田さんが53だ。

清水「さ、お姉さま、勝負はつきました」

島田「ほ、補習室は嫌あつ！」

清水「補習室？……フフツ。そんな無粋な場所へお姉さまを送り込んでやりませぬわ。」

「さあ、参りましょう」

「そう言うと、清水さんは島田さんの手を取った。」

島田「な、なにを……」

清水「この時間ならベッドも空いてますわ」

島田「い、いやよ。よ、吉井。助けて」

「仕方ないな。ここで戦力が減るのもイヤだし」

清水「邪魔者は殺します！」

明久「はっ！」

「僕は清水さんの攻撃を軽くかわし木刀をのどに突き刺した」

清水「そ、そんな……」

「召喚獣を一撃で倒された清水さんは、呆然と立ち尽くした。」

島田「補習の西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします
！」

鉄人「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに
来い」

清水「お、お姉さま！美春は諦めませんから！

このまま無事に卒業出来るなんて思わないでくださいね！」

最後に恐ろしい言葉を残して連れ去られていった。

Dクラス戦 〳中堅部隊参入〳(後書き)

清水登場です。

Dクラス戦　　く決着く

清水さんは倒したけど、その間に仲間が数人やられていた。しかもあそこにいるのは数学の船越先生だ。相手は一気に僕達を片付ける気だ。

このままじゃヤバイな……………

と明久が考えていると

『ピンポンパンポーン』

《連絡致します》

F中1「校内放送？」

明久「あれ？何かどっかで聞いた事のある声…」

F中2「なあ、こいつ須川じゃねーか？」

F中3「ああ、須川だな」

これは大和か雄二の策かな

須川《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

明久「どうやら何かの作戦みたいだね」

島田「多分、先生を別の場所に向かわせて時間を稼ぐのが狙いじゃないの？」

明久「しかも船越先生とはタイミングがいいね」

《島津岳人君が体育館裏で待っています。

なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

ガクト「チクシヨーーーー！！！！！！！！！！」

遠くでガクトの叫ぶ声が聞こえた。

船越先生はすぐ様ここを離れ体育館裏へと向かっていった。

ちなみに船越先生は今年も婚期を逃し、生徒に単位を使っておどし迫ったほどの人物だ

明久「皆、ガクトの死を無駄にするな！！」

F中1「なんてヤツだ。あいつは」

F中2「クラスのために命を捨てるなんて」

F中3「この戦いは負けられないな」

D2「こんなヤツがいるクラスに俺達は勝てるのか」

今の放送によって味方の指揮があがり、相手には動揺が広がった。

そこへ

京「明久、援護に来た」

京、率いる支援部隊が到着した。しかも教師を連れてやってきてくれた

明久「京、助かるよ」

京「もう少ししたら本体も来る。だからこのまま耐えて」

明久「うん、わかったよ」

明・京「^{サモン}試獣召喚!!!」

Fクラス 吉井明久 & 椎名京

世界史 217点 312点

明久「皆、ここが踏ん張りどころだよ。もう少ししたら雄二たちがくる

それまで耐えるんだ。京は援護お願いね」

京「援護は任せて」

塚本「あちらの本体が来る前に敵を倒すんだ」

平賀「塚本援護に来たぞ」

塚本「代表、すまない。あの2人を倒せばこちらの勝ちだろう。」

アレ以上の点数を持つヤツはいないだろうしな」

今の戦力は

Fクラス 明久・京・島田 以下14名

Dクラス 平賀・塚本・玉野 以下35名

塚本「吉井を困んで倒せ！ヤツがこの場の指揮官だ」

明久「そう簡単にはやられないよ」

明久は自慢の操作技術で敵をかわしていく。

そこへ京の援護の矢が敵に刺さっていく

塚本「なんだこいつらの連携は」

平賀「そう慌てるな。もうこいつら以外はもう残っていない」

いつの間にかにFクラスの中堅部隊・支援部隊は2人を残して全滅していた。

雄二「明久！生きているか！俺達が行くまで耐えろ！」

そこへ雄二率いる本体が向こうのほうからやってくる。

塚本「っ！もう着やがったか。あいつらが来る前にこの2人を倒すんだ。」

代表は念のために下がってくれ」

平賀「わかった」

八雲「そうは問屋が卸さないぜえ！遊撃部隊コレより代表平賀を狙う。皆、かかれえ！！」

雄二たちが来ている反対のほうから俺率いる遊撃部隊が参上する。

今、Dクラスをはさみうちに行っている。

平賀「所詮はFクラスだ。あいつらを破って離脱するぞ」

八雲「百代、クリス。随分待ったから共に暴れようぜ！！」

百代「ああ！！」

クリス「もちろんだ！！」

八・百・ク「サモン試獣召喚」

玉野「近衛部隊が受けますサモン試獣召喚！」

Fクラス 真田八雲 & 川神百代 & クリスティアーネ

保健体育 352点 363点 312点

VS

Dクラス 玉野美紀 & D近衛1 & D近衛2 & D近衛3 & D近衛4
保健体育 158点 142点 139点 150点 147点

D近衛1「なんだあの点数は!？」

D近衛2「本当にFクラスか」

D近衛3「しかもあの川神百代って四天王の1人だよな」

八雲「本当にお前らは保健体育だけは点数良いよな」

百代「一応、武道の娘だからな」

八雲「それなら他の教科も頑張つて欲しいよ」

百代「あーあー何も聞こえない」

八雲「それにしてもクリスは凄いな」

クリス「そうだろ」

八雲「じゃあそろそろやるか。今の間に本隊も着たようだし、

俺と百代は2殺で、クリスはひとまず操作に慣れてくれ」

クリス「任せろ」

百代「どうせなら私が全部やるが」

八雲「ダメだ！俺この前の戦争では何もしてないからな。今回は暴れたいからな！」

D 近衛1「何だと!？」

D 近衛2「舐めやがって!!」

八雲「じゃあ散開!!」

Fクラス 真田八雲 VS Dクラス 玉野美紀 & D

近衛1

保健体育 352点 158点

42点

八雲「行くぞっ!」

俺は一気に駆け出し距離をつめ槍を振るう

八雲「はっ!!」

それ続いて突いていく

D 近衛1「っ!!」

その後は相手の武器を叩き落とし胸を貫き、まず1人終わらせる

玉野「まだ、私もいるよ」

近衛部隊の1人の玉野さんが俺に向かって斬りつけて来る

俺はそれ攻撃を槍を使って受けながし、

八雲「甘い！これで終わり！！」

槍で玉野さんの召喚獣の首を跳ね飛ばした。

百代とクリスもどうやら倒し終わったみたいだ。

向こうのほうでもDクラス代表の平賀が姫路に討ち取られたみたい
だな

Dクラス戦後対談とある出会い

F「「「「うおおおおッ!!」「」「」」

F「凄えよ!!本当にDクラスに勝てるなんて!」

F「これで畳や卓袱台ともおさらばだ!!」

F「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな!!」

F「坂本万歳!!」

雄「あーまあなんだ。そう褒められるとなんつか・・・
そういうと雄二は頭をポリポリかいて照れていた。

F「坂本!!握手してくれ!」

F「俺も」

八雲「明久もお疲れ、頑張ったみたいだな」

明久「そうかな。僕より大和の指示のおかげと京の援護射撃のおかげだよ」

京「明久も頑張っていたと思うよ」

大和「そうだぞ明久。お前が居たから前線部隊は全滅を免れたんだしな」

八雲「明久もだけどワン子やゲンさん、秀吉も頑張ってたみたいだな」

忠勝「俺よりも一子のほうが凄かったぞ」

秀吉「そうじゃの、一子の活躍は目を見張るほどじゃったぞ」

一子「えへへへ、照るなあ」

八雲「良く頑張ったなワン子」

俺はワン子の頭を撫でてやる

一子「そうでしょ！アタシだってやるんだからね」

八雲「だな。なら勉強をもっとやって点数も伸ばさないとな。

じゃあ早速ワン子のために勉強会でもするかな」

一子「えっ!？」

八雲「じゃあ頑張ろうな」

一子「で、でも八雲今日バイトでしょ?」

八雲「それは大丈夫。問題集を渡せばすむ事だし、

それに大和と京がいるから教師には困らないだろ」

一子「う!」

京「厳しくやってあげるよワン子」

明久「ワン子、僕も一緒にやるから一緒に頑張ろうよ」

その後ワン子は落ち込んでいた。

しばらくして落ち着き、雄二はDクラスの平賀が戦後対談している。

俺はバイトがあるので雄二に任せ先に帰らせてもらった。

ちなみにガクトはあまりに不憫だったので大和にお願いして助けてもらった。

そして、バイトへ向かっている途中

八雲「ん？何だあれは？」

そこにはウチの学園の制服を着た女子1人が複数の男に囲まれている。

良く見れば知った顔のように見えた。

「……………あれは秀吉か？いやでも女子の制服着てるしな。それに秀吉はまだ学校だろうしな。」

「………つてことは、前言った秀吉のお姉さんか？」

そんな事を考えていると向こうでの会話が聞こえた

不良1『よお嬢ちゃん。可愛いじゃねえか』

不良2『ちよつくらお兄さんたちと遊ばねえか?』

優子『や、やめてよ!』

不良3『ああ?何だよ。断わるって言うんなら仕方ねえな。

無理矢理連れていくしかねえか』

正直、ああいうのは見ていていい気がしないな。

.....めんどくさいけどしょうがないか

俺は、その男たちのグループに近づいていった。

八雲「木下、こんなところに居たのか?探したぞ」

そう言つて、周りのやつらを押し退る。

不良2「何だこいつら?」

八雲「木下、急にいなくなるなよ。心配しただろ?」

優子「えっ?」

八雲「(いいから話を合わせる)」

相手に聞こえない程度の声で話すと、秀吉の姉は理解したらしくす
ぐに黙った。

八雲「じゃあ行くぞ木下」

俺は秀吉姉の手を掴んで、その場を離れようとしたが

不良1「おい待てよ！この女は俺達が目をつけてんだ」

不良2「その嬢ちゃんには少しばかり俺たちの相手して貰わねえといけねえんだよ」

八雲「すみませんね。こいつは俺のツレでね。悪いが手を離しても
られないか？

こっちは急いでんだ！」

バイトの時間なんだ急がないと遅刻するだろうが！

不良3「それは無理な相談だな」

不良4「さつさとその嬢ちゃんをこちらに渡せやあ！」

不良の1人が殴りかかってくる。

バシッ

俺は殴ってくる男の手を掴み、そのまま背負い投げを決める。

八雲「正当防衛だ！まだやる気か。まだやるって言うなら相手になるぞ」

不良1「な、なめるなあ！！」

不良が一気に迫ってくる

八雲「木下。俺の後ろにいろよ」

俺は迎え撃つため秀吉の姉を俺の後ろに下がらせ迎え撃つ。

ドコツ バキツ バキツ

勝負は一瞬でついた

八雲「まだやるか？」

不良1「ひ、ひいいい！！」

不良たちはすぐさまここから離れていった。

あいつらよりまだ明久たちのほうが強いな

八雲「もう大丈夫なようだな」

優子「あ、あの、ありがとうございます」

八雲「気にするな。げっ！時間がヤバい！！ もう大丈夫だと思っ

けど

俺は犬笛を取り出すと

ピーーーーーーーーーーーー

一子「何のよう八雲？」

俺がワン子笛を使うと10秒も経たずにワン子がやってきた。
……随分早いな。まあ都合が良いが。

八雲「ワン子任務だ！これからそこにいる秀吉のお姉さんを無事に家に送り届ける！」

それができたら明日、褒美をやるから良いな！俺はこれからバイトだからよろしく」

一子「わかったわ」

八雲「じゃあ頼むな。木下も一子が護衛するからもう大丈夫だと思うから、じゃあな」

俺は秀吉のお姉さんにそう言っとバイト先に向けて急いで向かった。

昼ラジオ1

Dクラス戦を終えた次の日の昼休み

教室（Eクラス）で明久たちと食事をしていると

スピーカーから音楽が流れ始めた

この学園では1週間に2日、放送が流れている

準「ハアイエブリバデイ、春といえば恋だね。

でも浮かれていて妙な病気になるのだけは、勘弁な。

今週もラジオ番組LOVEふみつきがはじまるよー！

パーソナリティーは俺、ハゲこと2年の井上準と…」
いのうえじゅん

百代「人生、喧嘩上等諸行無常。2年の川神百代だ」

これには百代がいつも登場する。

学園で男女とはず人気があるかららしい……

準「今日も百代さんに相談のメールが沢山きてますよ。

準さん、百代さんこんにちは、はいこんにちわー」

百代「よ。というか、前置きはいいから本文読めハゲ」

準「好きな子ができました。どう接すれば良いですか」

百代「私が味見してやるからその娘を紹介してみる」

準「ちなみに本気で言ってますから注意してくださいね」

それは本当だぞ。注意するんだ手紙主！

準「はい、次。“百代さん好きです付き合ってください”！」

百代「おー。メールで言わず正面から来るんだ」

準「次、百代さんはどんな映画が好きなんですか」

百代「ひたすらにアクション映画だ」

準「俺はなんでこのラジオ人気あるのか分かりません」

百代「ハゲ、お前は好きな映画何なの？」

準「可愛い児童達が活躍する映画かな。なごむ」

百代「ちよつと危ない意見だなハゲ」

いや、ちよつとじゃない気が……

準「危なくない！そもそも可愛いものを見守るといふ行為は

父性のそれと同等であり決してやましいものなぞ

1ミクロンもないと命を賭けて言い切れる！

だいたいなあロリコンなんて言葉が流行したからいけないんだ。

俺はただ、小さい女の子とお風呂に入りたいだけなんだ、

それだけの純粋な粉雪の心なんだ」

百代「暴走すんなハゲ！（バキッ）」

…あ、気絶させてしまったな。まいい。曲流すぞ」

ぐだぐだなラジオだった。

百代のキャラが面白いということをお願いしているそうだ。

八雲「いつもながら凄いラジオだな」

秀吉「そうじゃの」

明久「話は変わるけど雄二」

雄二「なんだ明久？」

明久「今度はCクラスと戦うの？」

雄二「いや、次はBクラスとやる」

秀吉「Bクラスじゃと？」

雄二「ああ、大和たちが居るおかげでこちらの戦力は随分と上がったからな」

大和「で、Bクラスとはいつやるんだ？」

雄二「週明けだな。今日はさすがに連戦で皆疲れているだろうしな。

それに明日からは休みだしな。

その間にムツツリー二に情報を集めてもらおう」

八雲「でも勝てるのか？皆の点数じゃBクラス相手だときついだろう」

雄二「そこは俺と大和に任せろ！勝つ為の策を考えてやる」

明久「それなら安心だね」

雄二「だから明久たちはしっかり点数を確保しておけよ」

明久「そうだね。なら八雲、大和今日も勉強教えて」

八雲「今日はバイトが休みだからいいぞ！

最近は勉強よくやるな」

大和「俺もいいぞ」

京「大和が手伝うなら私も」

秀吉「のう八雲よ。ワシにも勉強を教えてもらえぬじゃろうか？」

康太「……………俺も」

雄二「俺も良いか？」

八雲「ああ、いいぜ。ならせつかくだし皆でやるか。

ワン子や百代、ガクトの成績も上げないといけないしな。

じゃあウチの寮に集合ってことでいいよな」

一・岳「「げえ！？」」

大和「3人は強制だな！」

そういうことで今日は強制で勉強会をすることになった。

その後、彼らは涙を流しながら勉強したという。

「子曰く」あ、あれはこ、拷問よ「らしい

何が起こったのかは知る人ぞ知るということ。

昼ラジオ1（後書き）

今回は井上^{ハゲ}準登場です！

この調子でどんどんキャラを出していけたらなと思います。

昼の地獄

週明けの昼休み

雄二「よしッ昼飯食いに行くか！」

島田「あッウチも一緒していい？」

八雲「俺も一緒に行くぞ」

明久「僕もいいかな？今日はお弁当持ってきていないんだよね」

俺達が食堂へと向かおうとすると

姫路「あ、あの皆さん」

姫路が恥ずかしそうに話し掛けてきた

姫路「え、えつと。おッお昼なんですけど、そのッ……………」

秀吉「おお、もしかや弁当かの？」

姫路「はッはい、迷惑じゃなかったらどうぞー！」

明久「迷惑なもんか！ねッ雄二！」

雄二「ああそうだな、ありがたい」

康太「……………楽しみ」

一子「楽しみだわ」

ガクト「まさか女子の手料理が食べられるなんて」

島田「むー・・・ッ瑞希って意外と積極的なのね・・・」

秀吉「せっかくのご馳走じゃしこんな教室ではなく屋上にでも行くかのう」

雄二「だったらお前ら先に行つててくれ」

明久「ん？雄二はどっか行くのか？」

雄二「飲み物でも買ってくる。全員お茶で良いよな？」

八雲「ああ、良いと思うぜ」

島田「あッウチも行く！1人じゃ持ちきれないでしょ？」

百代「私も行くぞ」

雄二「きちんと俺達の分とっておけよ」

八雲「多分、大丈夫・・・でも急いで帰ってこいよ」

明久「じゃあ僕らは行こうか」

秀「そうじゃな」

俺達は屋上に向かって行った

秀吉「天気良くてなによりじゃ」

一子「そうね」

八雲「人がいないから貸切状態だな」

すると、姫路さんが料理を入れた重箱を中央に置いた

姫路「あんまり自信はないんですけど・・・」
そう言いつつ姫路さんは蓋を開けた

明・秀・八・ガ「「「「「おおッ」「」「」

俺らは一声に歓声をあげた。

旨そうだ。姫路さんにはから揚げやエビフライにおにぎりなど定番のメニューが入っていた。

明久「こッこれは!!」

康太「・・・おいしそう」

ガクト「これは凄えな!」

姫路「よッ喜んでもらえて良かったです・・・」

明「じゃあ、雄二たちには悪いけどお先にっつと」

クリス「こんなおいしそうなのは待ってられないな」

そう言い明久は箸をのばしていくと、不意に横から先に

ムツリーニとガクトが姫路さんのエビフライを口の中に入れた

パクッ

明「あッずるいぞムツリーニ、ガクト！！」

バタン

ガタガタガタ

八・明・秀・大・京・一・ク「クククククク！？」「ククククク」
エビフライを食べた直後、ムツリーニとガクトが豪快に倒れ、小刻
みに震えだした。

八・明・秀「クククククククククククク」

秀吉と明久と顔を見合わせる。

姫路「わわっ土屋君、島津君！？」

姫路さんが慌てて、配ろうとした割り箸を取り落とす。

康太「・・・・・・・・・・・・・・・・（ムクリ）」

ムツリーニが起き上がった。

康太「・・・・・・・・・・・・・・・・（グッ）」

そして姫路さんに向けて親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と
伝えたいんだろう。

姫路「あっお口に合いましたか？良かったです」

でもなムツリーニ、それならなぜ足が未だにガクガク震えているん
だ？

俺にはK O寸前のボクサーにしか見えないだが

姫路「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路さんが嬉しそうに勧めてくれると断れない。

むしろ、どんなにまずくても残さず食べてやる、という気にさえなってくる。

・・・でも俺には目を虚ろにして体を震わすムツリーニが忘れられない。

八雲（・・・なああれ、どう思う？）

俺達は姫路さんに聞こえないくらい小さい声で話し掛ける。

秀吉（・・・どう考えても演技には見えん）

明久（・・・だよ。ヤバイよね）

大和（京並の腕前か）

一子（確かに京の料理わね）

大和（じゃあまず、ワン子と京、クリスは姫路が

こちらの会話に気づかれないようにしてほしい。

こちらは俺達でどうにかしてみるから）

一・京・ク（（わかった））

そう言うところ人は言われた通りに動いてくれた

秀吉（で、大和よ。どうするつもりじゃ？）

大和（・・・皆。お前、身体は頑丈なほうか？）

明久（・・・正直、あれが京レベルのものなら無理だね）

秀吉（・・・ならば、ここはワシに任せてもらおう

八雲

俺は姫路のほうへ向かうと

八雲「なあ姫路、弁当に何を入れたかを聞かせてくれないか？」

姫路「何と言われましても、普通に作りましたよ？隠し味に“硫酸”を入れた位で」

八雲「普通に……ん？ 硫酸？」

不吉な単語を聞きとった俺はは、その海老フライを畏怖の視線で見つめる。

そして大和たちと顔を合わせる

八雲「どうやって手に入れたかが気になるが、どうしてそんな物を？」

姫路「ちよつと、酸味が欲しいと思ひまして」

八雲「……なあ姫路、硫酸の特性を教えてくださいか？」

少々罪悪感に晒されつつ、俺は内容説明に。

生き残った皆は、俺をまるで英雄の様に尊敬の眼差しを浮かべている。

雄二「待たせたな。こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ？」

手に飲み物の缶を抱えた雄二が、弁当に手を伸ばす。

明久「あつ、雄二！？」

明久の制止を聞かずに口の中に入れると、逝った2人のように雄二も倒れた

大和「卵焼きは何を？」

姫路「えっと、クロロ酢酸を……」

明久「大和、京、皆にパンとお茶を買ってきてくれないかな。百代とワン子も手伝ってあげて」

大和「ああ、わかった」

とんだランチタイムとなってしまうた。

大和たちがパンなどを買いにいっている間に俺は姫路を説教した。そして今後弁当を作ってくる事を禁止した。

その数分後

雄二「……まさか、姫路にこんな欠点があったとは」

康太「……………意外」

被害者3名は、殺菌作用のあるお茶を大量に飲みながらの会話。顔色も悪く、小刻みに震え続けたまま。ただし、ガクトだけはまだ倒れていた

大和「それで試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」

雄二「ああ。Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝

つための要素がある。

俺たちじゃ真正面からぶつかった処で、勝ち目はないからな」

Aクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート達。

試召戦争は代表を倒す事が勝利であるが、

Aクラス代表はそれすなわち学年首席。

Fクラスの戦力では、困った処で返り討ちに遭う事は容易に想像がつく。

ちなみにDクラスとは雄二に考えがあり設備の交換はしなかった

八雲「それで、どうする気だ？」

雄二「Bクラスとこの戦争のシステムを使って、

Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

一子「システム？」

雄二「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか一子？」

一子「え！？ えーっと……」

八雲「負けたらランクを1つ落とされるんだ。コレ位覚えておけよ」

雄二「そうだ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

大和「成程な。設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させる。

そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、1騎打ちの条件を吞ませる……か？」

雄二が頷く。

いずれにせよ、Bクラスを倒さなければ意味がないが。

雄二「明久、今日の午後のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」

明久「断る！ 雄二が行けばいいだろ」

八雲「雄二、明久を行かせるのは止める！明日の戦いに響く」

大和「そうだな。明日は明久とモモ姉、八雲の3人がキーマンになるだろうしな」

雄二「それもそうだな。なら須川たちに行かせるか」

そうして明日の戦争へ向けて準備を進めていった

昼の地獄（後書き）

姫路の弁当により3人の犠牲者が……

次回は登場しているマジ恋キャラの紹介をしたいと思います

真剣で私に恋しなさい！ キャラ紹介 1

川神 かわかみ
百代 ももよ

- ・身長 173cm
- ・誕生日 8月31日
- ・3サイズ 91 58 88
- ・一人称 私
- ・あだ名 モモ姉 モモ 姉さん 百代
- ・武器 拳
- ・好きな食べ物 桃
- ・趣味 人をからかったり皆でワイワイ遊ぶ事
- ・特技 殲滅

明久や八雲とは小学校からの知り合い。

明久を舎弟としておりいつもからかっている

昔から武家の鍛錬場所として名高い関東三山の1つ川神院の娘。別次元の強さを誇っており武神扱いされているが戦闘を楽しみ戦う相手に飢えている等精神面にまだまだ難がある。

性格は陽気。美人さも学園最高レベルだがその強さから

周囲の男子は敬遠しており、逆に女子からはエラくもてる。

成績はやる気を出せばできるがほとんどやる気を出さないのでFクラス程度の成績

明久と同じ観察処分者である。

召喚獣

- ・武道着（黒帯）に籠手の装備
- ・腕輪の能力『瞬間回復』
- ・1回の試獣戦争中に10回発動可能
- ・使用すると戦争が始まる前の点数まで回復する事がで

きる。

川神 かわかみ
一子 かずこ

- ・身長 159cm
- ・誕生日 2月26日
- ・3サイズ 77 54 79
- ・一人称 アタシ
- ・あだ名 ワン子
- ・武器 薙刀
- ・好きな食べ物 骨付き肉
- ・趣味 鍛錬
- ・特技 笛を聞けば10分以内で駆けつける

元々は孤児だったが色々あり川神家の養女になる
元気っ娘で、常に前向き。一緒にいるだけで人に活力を与えてお
り友達が多い。

落ち着きがなく猪突猛進で切り込み隊長を自負。

(実際はマスコットのようなもので皆から可愛がられている)
明久や百代、八雲は一子笛を所持しており、

このホイッスルはどこでもふくと一子が10分で現れる。

義姉の百代が好きで(百合ではない)彼女のように強くなりたく
日夜修練している。

召喚獣

- ・武道着(赤帯)に薙刀の装備
- ・腕輪『身体能力向上』

島津 しまづ
岳人 がくと

- ・身長 188cm

- ・誕生日 8月1日
- ・一人称 オレ様
- ・あだ名 ガクト
- ・好きな食べ物 肉
- ・趣味 いかにモデルかを研究すること
- ・特技 力を使うもの全部

筋肉質で長身、チーム内での力仕事担当。熱血馬鹿で単純一途。バカゆえにユニークで情にもろく、優しいために男からは好かれる。

しかし、ゴツツイ系のため女子からは筋肉から敬遠されている。でもどうしても女子にはもてたいらしい。

頼りがいがあるため年下からはすかれる傾向があるが

本人が同世代、できれば年上が信条という空回りっぷり。

勉強は全然出来ない。名前が「ガクト」のため名前負けともバカにされる

召喚獣

- ・上はタンクトップで下は普通の長ズボン

武器は籠手

- ・腕輪『筋力向上』

みなもとただかつ
源 忠勝

- ・身長 178cm
- ・誕生日 1月30日
- ・一人称 俺
- ・あだ名 ゲンさん
- ・好きな食べ物 ご飯と納豆、味噌汁
- ・趣味 料理・裁縫
- ・特技 体を動かす事なら一通り

八雲と同じ寮に住んでいる。でも門下生ではないが時々体を鍛えている。

群れるのを嫌い、いつも1人で行動している。

孤児だったので代行業者の宇佐美（教師）に引き取られ跡継ぎになるべくイロハを

教え込まれたため色々知識&技術などを持っている。

目つきの悪さや、口の悪さなどで周囲からは不良扱いで友人は皆無。

気性は荒っぽいし、他人に対して攻撃的だが、家事スキルが高く、意外と優しいところもあるので八雲や明久に懐かれている。のちに大和にも。

明久の料理の腕は認めている。

召喚獣

・黒の鎧を装着しており武器は大槍「蜻蛉切」

・腕輪「？」

直江 なおえ 大和 やまと

・身長 170cm

・誕生日 2月20日

・一人称 俺

・あだ名 ヤマト

・好きな食べ物 京が作ったもの以外ならなんでも

・趣味 ヤドカリ飼育

・特技 作戦を練る事

幼馴染の仲間内での参謀役。陽気でおしゃべり。

人と人とのつながりを大事にしているため同じクラスだけじゃなく

他クラス・他学年にも知り合いが多く、色々なところに顔がきく。勝利を得るためには過程は問わないタイプで何かを成し遂げるために作戦を立てることを好む頭脳派。

京とは恋仲の関係である。とある事情で京と共に他県の高校に行ったが文月学園に転入してきた。

頭がいいというより、効率がいいので成績が良い（Aクラス並）現在は八雲と同じ寮で生活している（1F）仲間以外では雄二と特に気が合う仲

召喚獣

・ 戦国無双3の直江兼続のような装備。ただし兜には愛の文字はない。

武器は刀と護符

・ 腕輪『護符操作』

・ 護符を用いてチームを出したり、相手の動きを封じる事ができる

< 成績 >	平均
・ 現代国語	500点
・ 古典	400点
・ 日本史	400点
・ 世界史	400点
・ 現代社会	500点
・ 数学	400点
・ 物理	300点
・ 化学	300点
・ 英語	300点
・ 保健体育	200点
・ 総合科目	3700点

今後伸びる可能性あり

椎名 京しいな みやこ

川神 一子かわかみ かずこ

- ・身長 155cm
- ・誕生日 4月13日
- ・3サイズ 84 59 83
- ・一人称 私
- ・あだ名 京
- ・武器 弓
- ・好きな食べ物 麻婆豆腐（デスチリソース入り）
- ・趣味 読書
- ・特技 存在感を消して周囲に溶け込む事

見た目は可愛いのだが、無口。

大和と付き合い始めてからはそれなりの人付き合いを行うようになった。

大和に手を出そうとするものには容赦しない。

弓道部に所属しており、弓の腕前は天下五弓と言われるほど。集中した際の矢の威力、射程、貫通力ともに弓のソレでは想像できない程の性能を持つ。

かなりの辛党であり、彼女が口にするものはたいてい真っ赤。大和の世話を焼いているが、料理などは味覚が壊れているため絶対に任せられない。姫路の薬品料理並の威力をもつ。

以前罰ゲームで食べたガクトが2週間入院してしまっている。現在は八雲と同じ寮で生活している（2F）

召喚獣

・戦国無双3の稲姫のような装備。

武器は弓

・腕輪『氷』

・氷を操る事ができる。

< 成績 >		平均
・ 現代国語	600点	
・ 古典	500点	
・ 日本史	300点	
・ 世界史	300点	
・ 現代社会	300点	
・ 数学	300点	
・ 物理	300点	
・ 化学	300点	
・ 英語	400点	
・ 保健体育	300点	
・ 総合科目	3600点	
今後伸びる可能性あり		

クリステイアーネフリードヒ

『義』

- ・ 身長 163cm
- ・ 誕生日 10月26日
- ・ 3サイズ 80 58 81
- ・ 一人称 自分
- ・ あだ名 クリス クリ（一子のみ）
- ・ 武器 レイピア
- ・ 好きな食べ物 いなり寿司
- ・ 趣味 めいぐるみ収集、お風呂
- ・ 特技 説教

ドイツ軍人家系の娘。留学生ろしてドイツからやってきた。武士道精神ならぬ騎士道精神を大事にしている礼儀正しい娘。フェンシングをはじめ運動は得意。

真面目で人を疑う事を知らない真つ直ぐな人だがプライドも高く負けず嫌いなところもある。

作戦を好む大和や雄二とは、良く意見が対立するが、なんだかんだいって仲は良い。

時代劇が大好きで日本文化には理解が深いと豪語する。

が、いまだに日本を間違つて解釈している所も多い。

頭は実はあまりよくないが勉強はキツチリしているので成績は悪くない

凜とした風格を持ちながらも親に過保護に育てられており、行動言動の端々にお嬢様らしさを晒し出している。

召喚獣

・白のドレスを着ており、武器はレイピア

・腕輪『？』

< 成績 >	平均
・ 現代国語	200点
・ 古典	50点
・ 日本史	450点
・ 世界史	200点
・ 現代社会	200点
・ 数学	200点
・ 物理	200点
・ 化学	200点
・ 英語	300点
・ 保健体育	300点
・ 総合科目	2100点
今後伸びる可能性あり	

真剣で私に恋しなさい！ キャラ紹介 1 (後書き)

今回はマジ恋キャラを紹介してみました。

百代、一子、ガクトの点数を載せてないのは点数が低すぎるからです。

ゲンさんは内緒ということでは………

Bクラス戦　〜開戦〜

翌日の午前中、試験を受け終えFクラスは最後の打ち合わせをして
いた

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だった。

午後はBクラスとの試召戦争に突入するが殺る気は充分か？」

F「……………おおおおおおお」「……………」

Fクラス男子の雄たけびが教室内に轟いた。

雄二「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。

その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかな
い。

心して戦ってくれ」

F「……………了解」「……………」

雄二「開戦前に最終確認だ。まず姫路に前線に出てもらい渡り廊下を

俺達の手中に入れ、敵を教室に押し込む。姫路しっかり頼む
ぞ」

姫路「が、頑張ります」

雄二「野郎共、きつちり死んで来い！」

《キーンコーンカーンコーン》

そこで開戦のチャイムが鳴り響いた

雄二「よし、行ってこい!!! 目指すはシステムデスクだ」

F「ooooooooooooおおおおお」

Fクラスの雄たけびのもと、Bクラスとの戦争が開始された。

今回は敵を教室内に押し込むのが目的なのでとにかく勢いが重要となる。

今、前線ではゲンさん率いる前線部隊と明久率いる中堅部隊がほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出し戦闘中である。

今回のこちらの主武器は数学。

Bクラスは比較的文系が多いのと、数学の長谷川先生は召喚フィールドが広いというのが理由だ。

一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生なのだ。他にも物理や化学などの先生も連れてきている。

F「いたぞ、Bクラスだ!」

F「高橋先生をつれているぞ!!!」

明久（FクラスとBクラスじゃ総合点数に差があるから相手は一気にかたをつけるつもりかな）

B「生かして帰すなッ!!!」

物騒な台詞を皮切りにBクラス戦が始まった。

Bクラス相手にFクラスの仲間が戦いを挑んで行った。

Bクラス 野中長男 VS Fクラス 横溝浩二
総合 1943点 762点

Bクラス 金田一祐子 VS Fクラス 武藤啓太
数学 159点 69点

Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博
数学 142点 72点

なっ！？なんて強さだ。仲間がごみのようにやられていつている。

明久「ゲンさん、このままじゃばいよ」

忠勝「わかってる。皆、絶対1人で戦うな。3〜4人で挑むんだ」

一子「アタシが突破口を開くわ！皆は援護お願いね」

F「了解です！！」

前線で皆が奮闘していると

姫路「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

息を切らして姫路さんがやってきた。

B男1「来たぞ！姫路瑞樹だ！」

明久「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

姫路「は、はい。行って、きます」

言わした「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学で勝負を挑みます！」

姫路「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

早速勝負を仕掛けられてるな。向こうとしては早く潰しておきたい相手なんだろうな

B女1「律子、私も手伝う」

その後ろから、さらにもう一人Bクラスの女子が召喚を始めた。

『サモン試獣召喚！』

すると、お互いの召喚獣が召喚された

明久「あれ？姫路さんの召喚獣アクセサリーなんてしてるんだね？」

姫路「あっはい数学は結構解けたので・・・」

B女1「そッそれって!？」

岩下「私たちが勝てるわけないじゃないっ!!」

姫路「じゃいきますね」

姫路さんがそう言うと、姫路さんの召喚獣は左手を相手に向け熱線を照射し

相手を1人焼き殺し、熱線を運良くかわした相手は大きな剣で切り

捨てた。

そこで、Bクラスが慌てふためいた。

一瞬で2人も戦死してしまったのだから仕方がない。

姫路「皆さん頑張ってくださいね」

F「やってやるでえーッ!!」

F「姫路さんサイコーッ!!」

明久「姫路さん。ありがとう、とりあえず下がって」

姫路「あっはい」

姫路さんを一度下げさせる理由は簡単、

いくら姫路が強いといっても何度も戦いつづければ傷を負い点数も下がってしまう。

それに、召喚獣の腕輪（特殊能力）はその威力の分消耗も激しいからだ。

忠勝「姫路が敵を倒して今、流れはこちらにある。今のうちに3人1組で敵を倒すんだ」

F「「「「うおおおおお!!」「」「」」

そこへ続いて

八雲「遊撃部隊！これより敵の横っ腹を叩く。俺に続けえ!!」

そこへ俺達遊撃部隊が参戦する。
明久やゲンさん達が敵を階段まで戦線を下げさせてくれたので突撃に成功した。

八雲「明久！ゲンさん！無事か」

明久「うん、僕の部隊は今のところ大丈夫だよ」

忠勝「俺のところもだ。この調子で押し切る」

遊撃部隊の突撃により今はこちらに流れが傾いている。
今の勢いを持続させれば、このまま徐々にBクラス内に追い込めるだろうと考えていると

秀吉「八雲と明久よ。ワシらは一旦教室に戻るぞ」

明久「え？なんで？」

秀吉「それは、Bクラスの代表じゃが・・・『あの』根本らしい」

八雲「根本って『あの』ねもつぎょうじ根本恭二か？」

秀吉「うむ。そうじゃ」

根本恭二と根城敦というのとはとにかく評判が悪い。噂ではカンニングの常連だとか・・・。
目的のためなら手段を選ばないらしいが用心にこしたことはないな・・・。

八雲「なるほどな。それは戻ったほうがいいかもな」

秀吉「それでは、戻るとするかの」

明久「そうだね」

俺たちは部隊をゲンさんとクリスにまかせ一度教室へと引き返した。

Bクラス戦 ～開戦～（後書き）

Bクラス戦開戦です。

皆さんのご感想・ご意見お待ちしております

Bクラス戦　く人質く

八雲「・・・うわぁ、これは酷いな」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

明久「卑怯だね」

教室に引き返した俺たちを迎えたのは、
穴だらけになつた卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだつた。

明久「酷いな。これじゃ補給もままならない」

秀吉「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

明久「ここまでやる必要があるの」

雄二「まさか、ここまでされるとはな」

すると雄二が教室に入ってきた

明久「・・・雄二。どうして教室がこんなことになっていることに気づかなかつたの」

雄二「Bクラスから、4時までには決着がつかなくなつたら戦況をそのままにして続きは

明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止するっていう

協定の申し込みがあつてな。調印の為に教室を空にしてしま

った」

明久「それ、承諾したんだ」

雄二「そうだ」

明久「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利じゃないの？」

雄二「姫路以外は、な。あいつらも今日の戦闘は終了だろう。」

そうすると、作戦の本番は明日になる。

その時はクラス全体の戦闘力より、姫路の戦闘力のほうが重要となる」

八雲「明久、秀吉とりあえず俺たちは前線に戻るぞ。」

向こうでも何かされているかもしれないしな」

明久「わかったよ」

俺はそう言つと駆け足で戦場に戻って行った。

明久「なんか、まだまだ色々やってそうだね」

八雲「そうだな。この程度で終わると思えないしな。気を引き締めに行くぞ」

そついで戦場に戻ってみるとやはり問題が起きていた。

明久「待たせたね！戦況は！？」

忠勝「かなり不味い事になってやがる」

やはりこちらにも何かやっていたのか。

ひとまず現状を聞いてみると島田さんが人質にされているらしい。

八雲「・・・ひとまず状況をみたい」

須川「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

俺たちはゲンさんに着いていき、

部隊の人垣を抜けるとゲンさんが言った通りの状況だった

明久「島田さん！」

島田「よ、吉井！」

B男3「そこで止まれ！それ以上近寄るなら召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにするぞ」

島田を捕らえている敵の1人が俺たちを牽制してくる。

クリス「なんて卑劣な」

あいつら、わかっているいな島田に止めを刺した瞬間、お前らもすぐ補習室に送ってやるよ。

八雲「（明久少しヤツラの気を引いて時間を稼いでくれ）」

明久「うん、わかったよ」

俺は明久にそう伝えるとある人物の元に向かった。

八雲「百代、今から言う事を実行してくれないか？」

百代「ん？わかった」

俺は百代にあることを伝えると

明久「総員突撃用意いーっ！ー！」

F「隊長それでいいのか！？」

B男4「ま、待て、吉井！コイツがなんで捕まったと思っている？」

明久「馬鹿だから」

島田「殺すわよ」

B男3「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら1人で保健室に向かったよ」

明久「島田さん…」

島田「なっなによ」

明久「怪我した僕にトドメを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

島田「違つわよ！ウチがアンタの様子を見に行っっちゃ悪いっての！？」
これでも心配したんだからねッ！！」

明久「島田さん、それ本当？」

島田「そっそうよ。悪い」

B男4「やっとわかったか…それじゃおとなしく…」

クリス「どうするこのままじゃ」

一子「どうするつもりよ」

八雲「大丈夫、策はある」

明久「総員突撃用意いーっ！！」

島田「ど、どうしてよっ！！」

明久「あの島田さんは偽者だ！変装している敵だぞ！！」

B男3「お、おい、待てってー！！」

B男4「コイツ本当に本物の島田だってー！！」

今だ！

八雲「百代、頼む」

百代「ああ！」

人質をとった連中が慌てている瞬間に百代が相手のほうに駆け出し人質となっていた島田さんを救い出した。

まあ百代の力ならあいつらなんて目でもないが、
試召戦争中は故意に召喚者に攻撃してはいけないのでこんな作戦をとったのだ

明久「……よし、作戦通りだ！皆あの卑劣なヤツラを補習室じゅうしつに送ってやるんだ！！」

明久、最初の間はなんだ？

クリス「任せろ！！あんな卑怯なヤツらには遅れは取らない」

人質をとったヤツラは俺達によって袋叩きにされ鉄人によって連れて行かれた。

島田「吉井……」

明久「大丈夫、島田さん。今は敵の注意をそらす作戦だったんだ」

八雲「つてか島田、なに簡単に敵の罠に嵌っているんだ。

お前のおかげでこちらに被害が出る所だったぞ。

しかも、お前は今、部隊の指揮を執ってた筈だろうが、
それなのに勝手に部隊を抜けるな」

クリス「少し言い過ぎではないだろうか」

八雲「ゲンさん、百代どう思う？」

百代「八雲の言うとおりだ」

忠勝「俺も八雲の言うとおりだと思う。

今回はたまたま部隊にあまり影響が出なかったが、

次回、同じ事をされたらたまったもんじゃねえからな」

八雲「だそつだ。クリス、島田をつれて本陣へ下がってくれ」

クリス「ああ、わかった」

俺がそういうとクリスは島田を連れて下がっていった。

八雲「少し乱れはしたがこのままBクラス前へと突き進むぞ」

F「「「「「うおおおおお！！！」「」「」「」

Bクラス戦 ～人質～（後書き）

余談ですが、ついにマジ恋SのOPが公表されましたね。早くゲームしてみたいです。

アニメも秋からスタートするみたいですので楽しみです

Bクラス戦 ～V S 3勇士～

しばらくすると

F遊1「隊長！！前方で我々の部隊が」

八雲「どうした？何があつた？」

F遊1「かなりの強敵がいて我が部隊の半数がすでにやられました」

八雲「わかった。すぐに行く」

明久「どうするの八雲？」

八雲「ひとまず現場を見てみる明久、着いて来てくれ」

明久「うん、わかったよ」

俺が現場についてみると知った顔がそこにあつた

八雲「三郎に焰に晴か」

そこには俺の友人の3人の姿があつた。
彼らとは中学の時から知り合いで時々、ウチの武道場に体を鍛え
に来ている

三郎「八雲か？何故お前がFクラスに？・・・まあいい。

今齒ごたえがなくて暇だったんだ。

フフフフ、少しぐらい齒ごたえがないとな」

八雲「明久、部隊を下がらせる。あいつらは俺が相手する
ゲンさん、悪いけど部隊の指揮頼むね」

明久「わかった。僕も手伝うよ」

八雲「悪いな」

百代「私もやるぞ」

晴「Bクラス3勇士が1人、あまじ 尼子、はる 晴、参上！」

焰「大友はBクラス3勇士が1人、おおとも 大友、ほむひ 焰ぞ」

三郎「俺はBクラス3勇士が1人、いしだ 石田、さぶろう 三郎」

三・晴・焰「サモン 試獣召喚！！！！」

八雲「Fクラス遊撃部隊隊長、真田八雲！押してまいる！」

明久「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。いきます」

百代「Fクラスの川神百代だ、楽しませてくれよ」

八・明・百「サモン 試獣召喚！！！！」

化学

Bクラス

VS

Fクラス

石田三郎	251点	真田八雲	342点
尼子晴	211点	吉井明久	132点
大友焰	261点	川神百代	52点

八雲「百代は晴を頼む。ってかももう少し点数上げようぜ」

百代「う、うるさい！さてあの子が私の相手だな」

明久「じゃあ僕は誰相手したらいい？」

八雲「じゃあ三郎を頼む。近接相手のほうがやりやすいだろ」

明久「わかったよ」

八雲「じゃあ、散開！」

八雲 VS 焰

ドオン ドオン

F「なんだ！？あの威力は！？」

焰「うむ、大火力！コレが大友の実力ぞ！！」

焰の武器は大筒で、かなりの威力の砲術を撃つ事ができる

焰「さすがの八雲もこれで」

八雲「甘いっ！」

焰「なっ!？」

ガギーン

焰は何とか俺の攻撃を受け止めた

焰「何故じゃ!？あれほど砲術したのに生きておるじゃと!？」

八雲「さすがに全部はかわせなかったが、数発覚悟すれば怖くない!

さて、これで俺の武器の間合いだな」

今は鏝迫り合い?しているので

焰お得意の砲術は撃つ事ができない

八雲「その武器の弱点は接近されたらなす術がなくなることだな。

現に今、砲術を撃つ事ができないだろ」

焰「うっ、じゃが、それは八雲とて同じだろ。今の状態じゃ槍を振るう事はできぬ」

八雲「おい、焰、何か忘れてないか? 俺は槍だけじゃないぜ!」

俺は槍を手放すと焰の間合いに入り打撃による連打を浴びせた。

焰「ぶ、武器を手放すじゃと!？」

八雲「俺の家は武道の家だぜ、お前時々習いに来てるだろう。
なら近づいたらすべて俺の間合いだぜ」

焰「っ！」

八雲「いくぞ、真田流奥義 『烈火拳』！！」

俺は焰の召喚獣に突きによる連打を浴びせる。

真田八雲 261点 VS 大友焰 0点

八雲「俺の勝ちだな」

焰「うう、負けた……」

八雲「さて皆はどうなったかな？」

明久 VS 三郎

三郎「お前が相手か、俺を楽しませてみる」

三郎の武器は刀、僕の武器は木刀だ。
点数差もあるから長期戦は不利だね。……………なら

明久「行くよッ」

僕は一気に駆け出し距離をつめる。
そこで連続で攻撃をしかける

三郎「ほう、なかなかやるな」

三郎は僕の攻撃をかわしていく。
その後、お互いに攻撃し、かわしていくの繰り返しが続く

三郎「これでどうだ」

相手は3段突きの後に刀を振り下ろす。

僕は何とか攻撃をかわし、相手の腹に攻撃を入れる

三郎「グっ！」

明久「今だっ！！」

相手が先ほどの攻撃でひるんだので僕は畳み掛けるように攻撃する。

明久「トドメっ！！」

最後に僕の木刀が三郎の召喚獣の喉に突き刺さる

石田三郎 0点 VS 吉井明久 31点

三郎「ば、馬鹿な。この俺が？」

明久「ふう〜危なかったよ。石田君だっけ凄い強いね」

三郎「三郎でいい」

明久「え？」

三郎「名だ！俺はお前に負けた。次は必ず勝ってやる」

明久「うん、わかったよ。三郎、次、戦えるのを楽しみにしてるよ」

百代 VS 晴

百代「おいおい、どうした攻撃しないのか？」

晴「っ！」

百代の拳の連打によって晴は攻撃できないでいた。

それもそのはず、百代は観察処分者なので明久同様、操作がうまい。そのおかげでただの拳による連打だが、それが嵐のように威力があり手数が多い。反撃に移ることができないのだ。しかも晴の武器がかぎ爪なので百代と同じ間合いなのも原因の1つである。

百代「よく耐えられるな。なら褒美だ。受け取れ！」

川神流奥義 『無双正拳突き』！！」

晴「え？っ、うわぁ！！！」

百代の攻撃で何とか耐えていた晴の召喚獣は吹き飛ばされた。

尼子晴 0点 VS 川神百代 52点

八雲「皆、終わったみたいだな」

百代「あの子と一緒に遊びたいな」

八雲「……百代言っておくが晴は男だぞ」

百代「何！？あんなに可愛いのに」

晴「私は男だ！！」

秀吉「ワシの他にも同じ境遇のものが居るとわの」

晴「お前もか？」

秀吉「そうじゃ、ワシは木下秀吉じゃ。よろしく頼むぞい」

晴「私は尼子晴だ。よろしくな」

向こうでは同じ境遇の2人に親近感が沸いたようだ。

……もう少し2人には優しく接したほうが良いかな……

三郎「でも驚いたぞ！お前がFクラスにいるとはな」

八雲「まあな色々あってな。ってかお前ならAクラスに行けただろ」

三郎「もちろんいけるが、どうせAクラスには九鬼がいるだろ。

あいつと同じクラスなんて一緒にいられるか」

三郎は九鬼に対して毛嫌いしているからな。

八雲「そうか、で焰と晴は？」

焰「大友は大将についていっただけじゃ」

晴「私もだ」

焰と晴と三郎は小学校からの仲らしく、
焰と晴は三郎の事を大将と呼んでいる。

八雲「また、たまには武道場に顔出せよ」

三郎「ああ、己を鍛えるのも必要だからな」

晴「ああ、わかったよ」

焰「ああ、行く時は連絡する」

八雲「ああ、わかった」

三郎「では、俺達はこれで、今から補習室に行かないといけないからな」

三郎は真面目だな。自分から地獄に行くなんてすると、

忠勝「後は俺達がやっておくからお前らは休憩でもしてろ」

ゲンさんはそういうと一子たちを連れて戦いに戻っていった。

さすがゲンさん。口は少し悪いけど優しいな

そして、ゲンさん達がBクラス前まで攻め入り今日の戦争は終了した

Bクラス戦 〓VS3勇士 (後書き)

マジ恋Sから 石田三郎と大友焰と尼子晴の3人を出してみました

何かおかしい点や改善点がありましたら教えてください

Bクラス戦　〜根本の暗躍〜

協定通りBクラスとの試召戦争は16時で一度やめ、
戦況をそのままにして明日の午前9時に持ち越しとなった。

一応予定通りBクラス前まで進撃できたので明日はそこからとなる。

今は明日の事で話し合っている所だった。

すると、ムツリーニがやってきて話に加わった。

今日の戦争ではムツリーニは戦線に出ず情報収集を任務としていた。

雄二「Cクラスが試召戦争の用意を始めているだと？相手はAクラスか」

・・・いやそれはないだろうから漁夫の利を狙うつもりか・・・
「いやらしい連中め」

つまり、この戦争の勝者と戦うつもりなのか。
疲弊している相手ならやりやすいだろうしな

明久「雄二どうするの？」

雄二「そうだな・・・。Cクラスと協定を結ぶか」

Dクラスを攻め込ませるぞと脅せば俺たちに攻め込む気もなくなるだろう」

明久「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

雄二「よし、それじゃ今から行って来るか」

大和「念のためモモ姉と秀吉、姫路、クリスここに残ってくれ」

姫路「はい、わかりました」

秀吉「なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

大和「秀吉の顔を見られると万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるからな」

雄二「そうだな。秀吉は待機しておいてくれ」

秀吉「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。まあ雄二の事だ何か策があるのだろうな。

クリス「自分も行きたいのだが」

大和「クリスは俺達の秘密兵器だ。だから相手にあまり知られたくない」

クリス「そ、そういうことなら自分も待機しておく」

大和、今のは嘘だろ

明久「じゃ行こうか。ちょっと人数が少なくて不安だけど」

秀吉と姫路、クリス、百代を残して、

俺、明久、雄二、ムッリーニというメンバーでCクラスに向かう

島田「あれ？吉井に坂本？どこか行くの？」

廊下に出ると島田と須川、近藤に会った

八雲「島田と須川、近藤。ちょうど良い。Cクラスまで付き合っ
てくれないか」

まさかとは思いつけど、念のためにボディガードは多いほうがいいだ
ろう。

雄二「がやられたら意味がないからな

島田「んー、別にいいけど？」

須川「ああ、俺も大丈夫だ」

近藤「俺もいいぜ」

秀吉「急がんとCクラス代表が帰ってしまうぞい」

明久「うん、そうだね。急がないと」

こうして更に島田さんと須川、近藤を加えた7人でCクラスへと向
かう事になった

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。

Cクラスにはまだかなりの人数が残っていた。ムッリーニの情報通

り漁夫の利を狙って
試召戦争の用意を始めているのだろう。

小山「私だけど、何かようかしら？」

俺たちの前に出てきたのはCクラスの代表の小山さんだった

雄二「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

小山「クラス間交渉？ふうん……」

小山さんは雄二の言葉を聞いてなんだかいやらしい笑みを浮かべている

八雲（何か嫌な予感がするな）

雄二「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本君？」

小山さんは振り返り、教室の奥にいる人たちに声をかけた
するとそこには、Bクラスの根本いた

根本「当然却下。だつて必要ないだろ？」

それに酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。
試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？

先に協定を破ったのはソッチだからな？これはお互い様、だよな」

根本が告げると同時にその取り巻きが動き出す。

その後ろには先ほどまで戦場にいた長谷川先生の姿があった

B男5「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

須・近「させるか！Fクラス須川（近藤）が受けて立つ！試獣召喚！」

Bクラスが雄二に攻撃を仕掛ける前に、間一髪で須川と近藤が身代わりとなる

ファインプレイを見せてくれた。

明久「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスのス」

雄二「無駄だ明久！あいつらは条文の『試召戦争に関する行為』を盾に

しらを切るに決まっている。だから、ここは逃げるぞ」

戦闘を行っている須川と近藤に背を向け、

俺たちはCクラスから離脱しようと駆け出す

根本「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後から根本の指示と複数の足音が聞こえる

はっきり言ってマズイな。

今の状態で戦うのはまずい。

雄二とムツツリー二以外は今日の戦争で点数を消費している

俺は明久と視線を合わせると明久も俺と同じ考えらしい。

明久「雄二！」

雄二「なんだ明久！」

明久「ここは、僕と八雲が引き受ける！雄二は逃げてくれ」

俺たちはその場に立ち止まり振り向いて雄二に向かって親指を立てた

雄二「・・・わかった。ここは2人に任せる」

雄二が俺たちの要望に応じる。さすが雄二だな。

感情に流されず、今必要な処置を正しく把握している。

康太「・・・（ピタッ）」

明久「いや、ムツリーニも逃げてほしい。明日はムツリーニが戦争の鍵を握るから」

一瞬立ち止まったムツリーニ。気持ちはありがたいが明日は重要な役割があるはずだ。

ここで失うわけにはいかない。

康太「・・・（グッ）」

ムツリーニは俺たちに親指を立てて走り去って行った。

八雲「・・・さて、時間を稼ぐぞ明久」

明久「うん。僕に考えがあるんだ。僕だって補習室に行きたくないしね」

八雲「ほお〜ならお前の策を信じてやるよ」

B男6『いたぞっ！Fクラスの吉井と織村だ』

B男7『ぶち殺せ！』

正面から追っ手がやってきた。長谷川先生も一緒だ。

明久「Bクラス！そこで止まるんだ」

相手の氣勢を削ぐように、明久は強い口調で呼び止める

B男8「いい度胸だ。たった2人で食い止めようってか？」

Bクラスからの追っ手は5人ほどいる。

さて、明久の策とやらを信じてみますかね

明久「その前に長谷川先生に話がある」

八雲（長谷川先生に？）

長谷川「なんですか、吉井君？」

明久「Bクラスが協定違反していることはご存知ですか？」

長谷川「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはFクラスのようにですが」

八雲（まあ、あの根本のことだからうまく言っているだろうしな。

さて明久の考えってヤツに期待するかな)

明久「……………万策、尽きたか……………」

八・B『こいつ馬鹿だあーっ!』

なんだよあんなの全然策じゃないだろうが、

コイツに期待した俺が馬鹿だった……Orz

なら仕方ない。まだ勝負は申し込まれていないしな。

俺は懐からあるものを取り出すとそれを地面にたたきつけた。

B男6「ゲホツゲホツ。な、何だコレは!？」

B女4「前が見えないわ」

俺は今さっき煙球を投げたのだ。これでにげられるな

八雲「明久逃げるぞ!」

明久「う、うん」

俺達はそこで戦闘をせずに教室へと戻っていった。

さすがに敵も教室までは攻めてこず撤退していった

明久と教室に戻ると

明久「ただいま！」

姫路「あ、吉井君！無事だったんですね！」

戸を開けると姫路が明久に駆け寄ってきた。

明久「うん。なんとかね」

雄二「お。戻ったか。お疲れさん」

秀吉「無事じゃったようじゃな」

一子「大丈夫みたいね」

八雲「ただいま。ああ大丈夫だよ」

雄二「さて、お前ら」

明久「ん？」

その場にいる全員を見渡して雄二が告げる

雄二「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、

正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

まあ向こうもそれが狙いだろうからな。俺たちが勝つたらまず間違
いなく攻めて来るだろうな
そこで皆がどうするか悩んでいると

大和「心配するな。向こうがその気ならこっちにだって考えがある」

明久「考え？」

雄二「ああ。明日の朝に実行する。目には目をだ」

この日はそれで解散となった

Bクラス戦　く根本の暗躍く（後書き）

本日2話目の更新です。

Bクラス戦　〜明久奮起する〜

翌日

雄二「今から昨日言っていた作戦を実行する！」

一子「作戦？」

明久「でも開戦時間はまだだよ？」

大和「BクラスじゃないCクラスの方だ」

明久「あつなるほど。それで何するの？」

雄二「秀吉にコレを来てもらおう」

そう言いだすと雄二はそばにあった紙袋から女子の制服を取り出した
・・・ところで雄二。それをどうやって手に入れたんだ？

秀吉「別にかまわんがそれでどうするんじゃない？」

雄「秀吉には『木下優子』としてAクラスの使者を装ってもらおう」

木下優子って言うところの前の女の子か。確かに秀吉によく似てたな。

雄二「というわけで秀吉用意してくれ」

雄二が秀吉に女子の制服を秀吉はその場で着替えを始める
着替えはとても早くなれているみたいだな。秀吉は一瞬で着替えを

終わらせた

八雲「秀吉、着替えるの早いな」

康太「……………着替えるなら言っただけだった」

ガクト「なに！？写真を撮れなかったのか！」

明「すっかり目に焼きつければ良かった」

ムツリーニやF男子（俺と雄二、ゲンさん以外）は泣きながら床を叩いていた

写真を撮れなかったことがよほど悲しかったのであろう

島田「秀吉はずるいわ」

姫路「秀吉君は大胆すぎます」

なんか姫路さんと島田さんが言っていたが無視するでしょう

秀吉「早く着替えるのは役者の基本じゃからの」

八雲「それでもここで着替えるなよ。一応女子も居るんだから」

秀吉「む、それもそうじゃな。以後気をつけるとしよう」

雄「おい、さっさと行くぞ。時間がなくなる」

明「僕も行くよ」

「アタシも行くわ！」

クリス「自分もだ」

雄「じゃあ来たい奴は行くぞ」

そして、雄二達はCクラスへと向かった。俺は昨日の件があるので一応残っている。

そして午前9時よりBクラス戦が開始された

俺たちは昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

秀吉「ドアと壁をつまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ」

秀吉の指示が飛ぶ

雄二曰く『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

そういうわけで指示どおり今は敵を閉じ込めている

八雲「皆、絶対1人で戦うな！周りと協力して敵を叩くんだ」

秀吉「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行うんじゃ！」

八雲「無理をしすぎるなよ。危ないと感じたら下がるんだ」

現在は俺と明久、秀吉、姫路、ガクト、京の6人で指揮を執っている。

百代とゲンさん、一子、クリス、島田は昨日点数をかなり消費したので回復試験中である。

大和は、雄二の護衛&作戦を考えている。

そして部隊を2つにわけしており、

左翼を明久と秀吉、姫路、右翼を俺と京、ガクトで分けて指揮していたのだが、

先ほどより姫路の様子がおかしいので京に左翼に行ってもらい、右翼は俺が指揮している。

え？ガクトはって？あいつが指揮できるわけないだろ（笑）
しばらくして

F「左側出入り口押し戻されています！」

F「古典の戦力が足りない！援軍を頼む」

そう聞こえ左側を見てみると少しずつ押し戻されている。

Bクラスは文系が多いので強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破されてしまう

明久「姫路さん、左側に援護を！」

姫路「あ、そ、そのっ・・・！」

先ほどから姫路の様子がおかしく動いてくれない

秀吉「今のままではやばいの」

京「私が行く。明久と秀吉は私の援護を」

明・秀「了解」

京「椎名京、古典で勝負を仕掛けます『試獣召喚！』」

2 - F	椎名京	V S	Bクラス	モブ×3
古典	430点			平均190点

B「なんだ！？あの点数は！？」

B「俺達が敵う訳ねえじゃねえか」

京「行くよ！」

ヒュン ヒュン ヒュン

京が相手に向かって弓を撃つ。その矢が見事に相手の頭を貫く

B「相手は弓矢だ。近づいたらこっちのものだ！」

Bクラスの1人が京に斬り込んで来る

明久「そうはさせない！」

キーン

すかさず明久が間に入って攻撃を食い止める。

秀吉「仕舞いじゃ!!」

明久が敵の攻撃を食い止めてるスキに秀吉が相手の首をはねる。
秀吉は明久やゲンさんといつも前線で戦っているので操作技術が上がっているの、皆よりは上手く操作できるようになったのだ。

明久「大丈夫京？」

京「大丈夫」

秀吉「明久よ。例のアレを頼むのじゃ」

明久「了解」

明久は返事すると共に古典の竹中先生に近づいていき耳元で

明久「……………ツラ、ずれてますよ(ボソッ)」

竹中「ッ!？」

頭を押さえて周囲を見渡す竹中先生。

いざと言う時の為の脅迫ネタの1つだ。

竹中「少々席をはずします!」

狙いどおり竹中先生がその場を離れ古典のフィールドが解除される

秀吉「先生、物理のフィールドお願いするのじゃ」

そこで古典から物理へとフィールドが変わった

明久「これで少し安心だね」

ひとまず左翼は大丈夫そうだな。と俺が安心していると

F「隊長！」

八雲「なんだ？どうした？」

F「右側の出入り口が数学から現国に変更されました！」

八雲「数学教師の木内先生はどうした？」

F「Bクラス内に拉致された模様です」

やばいな。理系から文系の科目に切り替えられたか

八雲「誰か教室まで戻って援軍を呼んできてくれ！ 点数がヤバイやつは下がれ！！」

F「了解」

八雲「第2部隊行くぞ！！」

F「おおお！！！」

八雲「出撃する前にあえて言わせてもらっぞ！皆、死ぬなよ」

F「はっ！！！！！」

八雲「突撃!!」

F『おおお!!』

・・・でもこのままじゃやばいな。自力の差で破られるな。
左翼の方もきついだろうしな

八雲「・・・姫路こちらの援護頼めるか？」

姫路「は、はい。行きま・・・あっ・・・」

姫路さんが返事の途中でうつむいてしまった。

先ほどからずっとこの調子だ。何かがおかしいな。

そう思いBクラスの教室内を覗いてみると、

窓際に腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者である根本の姿があった。

そこでようやく気が付いた。

おそらく姫路さんはいつらに何か弱みを握られているんだろう。

だがどうする。今の状況ではこちらは何もできない。

すると明久から声をかけられた

明久「八雲、秀吉、京！ちよつとここを任せるよ!!」

八雲「え？」

秀吉「どうしたんじや明久？」

明久「ちよつとね。姫路さん調子が悪いんだったら下がって良いよ」

姫路「・・・はい」

おそらく明久も気づいたのだろう。なら明久に任せるとするか

八雲「わかった。こっちは任せろ」

京「こっちは任せて」

ガクト「行って来い明久！」

明久「じゃあ頼むよ」

明久はそう言つとFクラスの教室へ向かつて行った。

秀吉「どうしたというのじゃろうか？」

八雲「何か策があるんだろうよ。秀吉、今は戦場に集中しよう」

今の明久の顔は久しぶりだな。頼れる時の顔だ。

こつという時の明久は頼れる。さて、明久が戻ってくるまで粘りますか

秀吉「ここが踏ん張りどころじゃ。皆頑張るんじゃ」

秀吉が皆に指示する

俺も明久に答えるため隊を指揮する。

〈SIDE IN 明久〉

明久「雄二、大和！」

雄二「ん？明久か。脱走ならチヨキでしばくぞ」

大和「どうした？」

明久「話がある」

雄二「……とりあえず聞こうか」

Fクラス教室にて。皆が回復試験を受けている中で、作戦について話し合う雄二と大和。

明久「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

雄二「……お前に何があつたんだ？」

大和「まあ事情はわからないが何かあるんだろ」

雄二「まあいいだろ」

明久「ありがとう……それともう一つ、理由は言えないけど

姫路さんを前線から外してもらえないか？」

大和「……理由を言えない事は置いておくとしても、どうしてもか？」

明久「うん」

雄二「……条件がある」

明久「何？」

雄二「明久、お前が姫路の担う予定だった役割を果たせ。

どうやっても良いから、必ず成功させろ」

明久「それは誰か人を使つても大丈夫？」

雄二「まあ良いだろう。だから必ず成功させる」

明久「わかった。大和、力を貸して欲しいんだけど」

大和「……………わかった」

雄二「ちなみに誰が必要だ？」

明久「真田ファミリーの皆」

ちなみに真田ファミリーとは、八雲をキャップとしていて、そこに明久、百代、一子、

大和、京、ガクトの7人である。一応勝手にゲンさんを加えている。本人は承認してはいない。

雄二「わかった。よし、皆そこで一度試験を終えて敵に攻撃を仕掛ける!!!」

川神姉と一子、あと源は明久と大和についていけ、残りはBクラス前へ」

大和「じゃあ作戦を伝える。しっかり聞けよ」

明久「うん」

Bクラス戦　　↓決着↓

しばらく教室前で攻防戦を続けていると明久が戻ってきた。そこには大将である雄二も一緒のようだ。

明久「ごめん。待たせたね」

秀「遅いのじゃ」

八雲「待ちわびたぞ明久。でどうするんだ」

明「それは……………(ゴニョゴニョ)……………と言っ
訳なんだ」

俺達は明久の策を聞く。

八雲「わかった。なら俺達に任せてくれ」

秀吉「そうじゃな。ならばここはワシらに任せるのじゃ」

クリス「ここは自分たちに任せてくれ」

明久「じゃあ、八雲と京、ガクトは大和の指示通りをお願い。

姉さんは僕と大和と一緒に来てくれる」

八雲「わかった。行くぞガクト」

ガクト「了解！俺様の力見せてやるぜ！！」

京「大和のために頑張る」

百代「よし、やってやる」

明久SIDE（Dクラス）

現在、僕はBクラスの隣にあるDクラスに來ている。

今、Dクラスの人たちは雄二の作戦のよりBクラスの室外機を壊しに行っているので

不在なので、この場には、僕と姉さん、大和そして英語の遠藤先生だけである。

大和は窓側にいて外を見ている。姉さんは精神統一をしている。作戦開始の15時まであと数分

八雲SIDE
グラウンド

今、俺とワン子、ゲンさん、ガクトはグラウンドに出ている。

京は弓を持ち集中している。京は弓道部なので弓矢を所持しているだ。

そして俺達はストレッチをしている最中だ。作戦開始まであと少し

Bクラス教室前

根本「お前らいい加減あきらめろよな。」

教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないっての」

雄二「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギブアップか？」

根本「はあ？ギブアップするのはそつちだろ？」

雄二「無用な心配だな」

根本「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

雄二「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

根本「けっ！口だけは達者だな負け組み代表様よお」

雄二「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな」

根本「それにこの暑さはなんだ。エアコンきいてんのか？おいッ窓全部開けとけよ！」

雄二は時計を見て時間を確認する

雄二「……………態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

根本「なんだよ！散々ふかしておきながら逃げるのか！

全員で一気に畳み掛ける！！誰一人生きて帰すな！！」

雄二「頼むぞ真田ファミリー！！」

ガクト「おう！任せろ！！」

忠勝「こつちも大丈夫だ」

八雲「2人とも頼むな、京も援護よろしく」

京「任せて」

そういうと俺と一子はゲンさんとガクトに向かって走り出す。

ゲンさんとガクトはバレーボールのレシーブの体勢をとる。

そこへ俺達が走って行き……

一子「そりゃっ！！！！」

俺はゲンさんのワン子はガクトの腕を踏みきり台として跳躍した。

忠・ガ「飛べ！！！！！！！！」

2人は俺達の跳躍にあわせて腕を跳ね上げた。

その方向はBクラスの窓めがけて……

途中、下のクラスの生徒や先生が俺達を見ていたが気にしない

そこへ京がBクラスの窓を矢でぶち抜く！

パリーーーン

そこへ俺とワン子がBクラスへと乗り込む。

Bクラス

ドゴォー………ン！！！！！！

物凄い音と共にBクラスとDクラスとの間の壁から明久たちが出てくる

根本「んなッ!？」

明久「くたばれ!!根本!!」

根本「壁をぶつ壊すとかどついう神経してんだ!？」

百代「遠藤先生!私が」

B「Bクラス近衛部隊が受けますッ!!」

明久「こ、近衛部隊……」

根本「はッははッ!残念だったな。驚かせやがって!!」

大和「まだ、安心するのは早いぜ」

パリィーーン

そこへ窓が何かに突き破られた。そこには天井に刺さった弓矢があった。

するとその後、

スタツ スタツ

八雲「真田八雲！推参！！」

一子「川神一子！参上！！」

俺とワン子が窓から乗り込む

根本「今度は窓から乗り込んでくるだとお！？」

B「Bクラス近衛部隊が受けますッ！！」

根本「はっはは！2度目の奇襲も無駄に終わったな」

根本までの距離は約20m・・・。

俺たちの周りには近衛部隊。全員に取り囲まれた以上

今、根本に近づく事はできない・・・だが目的は達した。

ここで少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によってテストの結果に特徴が現れるんだが・・・

例えば、数学の木内先生は採点が早い。

世界史の田中先生は点数のつけ方が甘く、

数学の長谷川先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生は多少の事は寛容で見逃してくれる。

じゃあ保健体育の先生は、採点が早いわけでも甘いわけでもなく
召喚可能範囲が広いというわけでもない。
保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れ
た行動力』である
すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前
に降り立った。

スタッ

ム「………Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムツリーニと保健体育の大島先生だ

根本「き、キサマは………！」

ム「………Bクラス根本恭二に保健体育で勝負を申し込む」

根本「ムツリーニイーツ！」

ム「サモン試獣召喚」

Fクラス	土屋康太	VS	Bクラス	根本恭二
保健体育	441点			203点

ムツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一闪し、一撃で敵を切り捨
てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

Bクラス戦　　↓決着↓（後書き）

連続での3回の奇襲攻撃でした。

Bクラス戦　〜戦後対談〜

秀吉「お主らは随分と思いついた行動にじゃったのう」

雄二「本当だな、素手で壁をぶち破るとか、3階にある教室まで窓をぶち破って

乗り込んでくるとは誰にも発想できないしやねえぞ」

八雲「それが俺達真田ファミリーだぜ！」

百代「そうだ、力入れ具合で壁なんて簡単に壊せるぞ」

一子「さすがお姉様！！」

明久「一子も八雲も凄いよね。まさかグラウンドから3階の窓まで飛んでくるなんて」

一子「えへへへ、照れるなあ／＼／＼」

八雲「ゲンさんとガクトがいたからだぜ」

ガクト「俺様の力ならコレ位余裕だぜ！」

忠勝「普通こんなこと考え付いても実践しねえよ」

八雲「普通はつまらないだろ！これくらいじゃないとな」

大和「八雲らしいな」

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかしの戦後対談といくか。な、負け組代表？」

そして雄二は根本の前に立って言った。

雄二「本来なら設備を明け渡してもらいお前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが

特別に免除してやらんでもない」

雄二がそう言いだすとBクラスのメンバーはざわつき始めた。Fクラスのメンバーにはあらかじめ伝えてあるので動揺は無い。

根本「・・・条件はなんだ」

雄二「条件？それはお前さん次第だ」

根本「お、俺たちだと？」

雄「ああ、お前らには散々好き勝手やってもらったし正直去年から目障りだったんだよな。そこでお前らBクラスに特別チャンスだ。

Aクラスに試召戦争の準備ができていると宣言して来い。

そうすれば今回は設備は見逃してやる。

ただし宣戦布告ではなく戦争の意志と準備があるだけ伝えるん

だ
」

根本「・・・それだけでいいのか」

雄二「あ
」

八雲「それと」

雄二が何か言う前に俺が遮った

八雲「今回の戦争で随分やってくれたからな。その分も入れて・・・
そうだなあ・・・

根本がコスプレして今さっき雄二が言った通りにしてくれた
ら良いよ
」

雄二「お、おい」

八雲「明久、それでどうだ？」

明久「それだけじゃぬるいよ、その後は写真撮影会ぐらいしないと
ね
」

百代「おっそれは面白そうだな」

ガクト「それはいいな。おいムツツリー二綺麗に撮ってやれよ」

康太「・・・・・・任せろ」

雄二「まあ、いいか」

根本「ばっ馬鹿なことを言うな!!!この俺がそんなふざけた事を・・・

・ッ！」

B「……」Bクラス全員で必ず実行しよう！」「……」

B「任せて必ずやらせるから！」

B「それだけで教室を守るならやらないでは無いな……！」

「どんだけコイツは人望が無いんだ。まあいいけど

雄二「んじゃ。決定だな」

その後、根本は女装させられた状態でAクラスに行き、ムツリーニによる撮影会が行われた。

おそらく根本は一生忘れられない素敵な思い出を背負う事になるだろう。

そして、俺達ファミリーは職員室で先生方の親身な指導を受けたのは言っまでも無いだろう。

ちなみに根本も信用は地に落ちたので

今、Bクラスは三郎がほぼ代表として動いているようだ。

真田寮での生活(1) (前書き)

さて今回はウチにある寮での生活を紹介しますよ

真田寮での生活(1)

〕 SIDE IN 大和 〕

大和「ん、んん……?」

俺は何か違和感を感じ目を覚ます。

京「おはよう大和。そして愛している」

俺の目の前に京の姿があつた。

そして京はいきなりキスをしようと迫ってきた。

ガッ

大和「おはよう京。好意はとても嬉しいが今は自粛してくれ。

隣の部屋には八雲たちがいるからな」

俺は京の頭を掴みそれを阻止する。

京「………ちっ惜しい」

大和「惜しくない。朝から襲わないでくれる?」

京「朝といえば朝ごはんできてる」

大和「ん、了解」

京「私自身が朝ごはんという説もある」

大和「着替えるから出て行ってくれ」

大和がそう言うと京は1度大和の部屋を出た。

京「……………」

チラッ

大和「出てけっ!!」

〈 SIDE OUT 大和 〉

大和「おはようございまーす」

大和が眠そうな顔で食堂に入ってきた。

クリス「おはよう」

黛「お…おはようございま…す！」

黛さんは今年から文月学園に入学した1年生だ。
うちの寮で生活をしている。

忠勝「チッ！起きるのが遅えんだよテメエは」

ゲンさんが皆にご飯をつぎながらそういう

大和「ゲンさん、おはよう今日も元気そうだね」

八雲「おはよう大和」

大和「おはよう八雲。今日も朝からランニングに行ったのか？」

八雲「ああ、今日は1年生の黛さんと一緒に走ったんだ」

大和「へえ〜」

八雲「じゃあ、食べようぜ。おっ今日は麗子さんのおしんこ付だ。

これおいしいんだよな」

大和「俺もコレすっげえ好き」

京「じゃあ私の分をあげるのさ。これで好感度がよりアップ？」

大和「京カスタム（超激辛）の食品なんかくえません」

京の料理は唐辛子やタバスコなどによって真っ赤に染まっていた。

八雲「ねえねえゲンさんの1個ちょうだいな」

忠勝「あ！？ふざけてんじゃねえぞ！

何だつて俺がテメエなんかに物やんなきゃいけねんだ？」

クリス「おい、なんだ朝から喧嘩か？感心しないぞ」

黛「ハラハラ」

今のをみてクリスと黛さんがハラハラしている。

忠勝「ちっ、ほらやるよ！勘違いするんじゃないぞ。

ガタガタうるせえから恵んでやるだけだ」

八雲「わーい。ありがとうゲンさん！」

俺はゲンさんからおしんこを一個もらった

八雲「で、皆。どうよ真田寮は？何か不憫な事があるか？」

大和「ああ、快適に暮らしているよ。ただ京が突然入って来るんだが
どうにかならないか？」

八雲「それは彼氏であるお前の役目だな。

ゲンさんにクリスに黛さんは？」

忠勝「不備はねえな。ただもう少し静かにしてくれ」

八雲「それは無理だね。ゲンさんも一緒に遊ぼうぜ」

忠勝「なんで俺がテメエラなんかと」

八雲「まあ今はそれでいいや。

クリスと黛さんは？」

黛「わ、私は、だ、大丈夫、です」

クリス「和風の庭もあるし温泉もある日本好きの自分にとってはとてもいい寮だ」

ちなみに寮は全部で10部屋あり、

1Fは男子、2Fは女子となっている。2Fには男子禁制である。

女子からの許可があれば2Fに上がっても良い事になっている

そして寮の責任者は俺ということになっている。……ただしこの寮だけが。

部屋は 101はゲンさん、102は大和、103は俺、104は明久

105は真田ファミリー専用部屋、

201は京、202はクリス、203は黛さん、204は

川神姉妹

205はあきという風になっている。

104と204は時々明久や百代と一子が泊まっていくので今は部屋に空きがあるので使っているのだ。

105は他の部屋の比べると少し広いのでファミリーの集まり場になっている。

寮には温泉つきで1Fと2Fにそなえついている。

また庭は和風の庭にしている。

基本的寮では、自由だが風呂は交代で掃除をしている。

食事は月々金の平日はガクトの母親の麗子さんが作ってくれるが土日は自分で作らないといけない。

また、門限はない。

ただし生活費（電気代など）は毎月俺に払ってもらっている。

するとそこへ

ガクト「よお俺様が来てやったぜー！」

大和「おっす！ガクト」

八雲「もうそんな時間か」

明久「皆、おはよう」

大和「じゃあそろそろ行くか」

俺達が席を立つと

黛「あっあの！」

八雲「ん？」

黛「……あ……あのっ、そのっですな……わた……も……っ……いっし……よ」

黛さんが凄い形相で俺達に話しかけてきた

ガクト「……………」

大和「な、なに？」

黛「あ…う…うぐ…な…なんでもありませんっ！
すみませんでしたーっ！」

黛さんはそういうと食堂から出て行った

大和「俺、あの子にいつも睨まれてるんだけど」

クリス「何か気に障ることでもしたのではないか？」

ガクト「俺らだけで騒いでいるのが気に入らなかつたんじゃないかね？」

明久「そうかな？」

八雲「……………まっとりあえず学校いこうぜ」

そこで俺達は学校へと向かった

真田寮での生活（1）（後書き）

いきなりまゆっち登場です。

これから登場回数を増やしていければと思っています。

で全然話かわるのですが、

今までは毎日更新するよう頑張ってきたのですが

先週からある場所で正式に働く事になって頑張ってきたのですが毎日更新するのがきつくなってきたので

誠に勝手ながら更新速度を少し落としていきたいと思っています。

更新は『バカと俺たちの召喚獣』と『バカとマジ恋と召喚獣』を

一日毎交代で更新したいと思っています。

今日までは一応両方更新しますが明日からは更新速度を変えていきます。

明日は『バカとマジ恋と召喚獣』を

明後日は『バカと俺たちの召喚獣』を更新したいと思っています。

本当に作者の都合で変更した事はすみませんでした。

これからも応援よろしくお願いします

百代の欠点

教室につくと

百代「おー明久！我が愛しの弟よ！」

そこには両手を広げて目を輝かせ満面の笑みの百代の姿があった。

それを見た俺たちは

ガラッ ダッ！！

扉を閉めてその場から逃げ出した。

百代「あっ！おい！」

だが一瞬で皆つかまった。

百代「なんで逃げるんだよ！」

八雲「百代がそういう顔の時は金だろ！」

明久「お金はありません」

百代「失礼だなお前らは！」

大和「ならどついう用なんだ？」

百代「それはな．．．．．金貸してくれ！！」

八・明「「やっぱ金じゃねえかよ！！」

大和「意味がわからん」

百代「実はな今日中に金を返せといわれててな」

明久「本当に困った人間だね」

百代「なー」

明久「姉さんがね！！」

八雲「ちなみにいくら足りないんだ？」

百代「3万！」

明久「かなりの額だね。どれだけ借りてたの！？」

百代「いやー照れるな」

八雲「ちなみに何人に？」

百代「10人ほどだな」

明久「いろんな人から借りすぎだよ!!」

大和「はあく(ため息)。ちなみに皆いくら持ってる？俺は5千円だ」

ガクト「俺様は3千円」

明久「僕は1万円だよ」

京「4千円だね」

一子「アタシは3千円ね」

八雲「1万3千円だな。でもさすがに全額は無理だぞ」

そこへ雄二と秀吉たちが教室にやって来た

秀吉「皆、おはようなのじゃ。どうしたのじゃ皆で集まって」

雄二「どうしたんだ？」

康太「……………困りごとなら手伝う」

八雲「そうか。なら今いくらお金持ってる？」

雄二「ん？金か……………4千円だな」

秀吉「ワシは4千円じゃな」

康太「・・・・・・・・6千円」

八雲「ならその半分の金貸してくれないか？」

金は月末に百代が必ず払うからさ」

秀吉「どういうことじゃ」

明久「それはね・・・・・・・・（事情説明中）・・・・・・・・ということなんだよ」

秀吉「そういうことなら仕方ないの」

雄二「仕方ないな」

康太「・・・・・・・・月末に必ず返してくれ」

雄二「まさかこんな欠点があつたとはな」

秀吉「そうじゃの・・・・・・・・」

八雲「これは直して欲しいものだぜ」

結局3人から7千円借りることになった。

残りの2万3千円はガクトとワン子が千円ずつ、大和と京が2千円ずつ、

明久が7千円で俺が1万円貸す事になった。

百代「皆、悪いな」

明久「そう思うなら今度から気をつけてよ」

こんな事がよくあるので俺と明久は常に多めにお金をサイフに入れている。

まあ、このおかげで明久の生活が改善されている原因の1つだが・

百代「あらためて助かったぞ」

明久「ほどほどにしてくれると助かるよ」

百代「特に『金がらみ』では頼むぞ。『金がらみ』では！」

皆『・・・・・・・・・・』

明久「生々しいよ姉さん」

今回も反省しない百代であった

番外編 黛編〜友達100人できるかな〜

黛「新天地でお友達を作ると心に決めてはや1週間。

まだお友達が出来ませんでした。

なにが悪かったのでしょうか？松風」

松風「うーん、ちょっと堅かったんじゃないね」

黛「堅い…ですか」

松風「だなー」

黛「そうですね。ちょっと丁寧すぎたかもしれません。

ですが…次こそ！次こそは！」

松風「そうだー！その意気だぜまゆっちー！

踏み出せ！そしてつかめ！友達をおおっ！」

と黛さんの携帯ストラップが喋っている。

CV：黛

黛「はい！まずはじめの一步です」

松風「さしあたって真田グループに入りたいんだろ？まゆっち」

1人反省会之図

黛「は…はい！みなさん凄く楽しそうなんです。」

お友達になれたらどんなに……」

松風「もうあれだよなー。入ーれーてー
ってYOU言っちゃいなYO!」

黛「そそそんな！私なんか入ったらご迷惑に」

松風「余計な事を考えたらだめだ！友達が欲しいんだろー？」

黛「はっ！…はい…ひとはさびしいです」

松風「だったら行動だぜー！行けまゆっち!」

黛「わかりました！まずは1階を偵察に!」

文月学園1年 黛 まゆみ 由紀江 ゆきえ

友達100人計画 現在の達成数 0人

階段を降りてみると

????「あああああ」

何か食堂のほうから声が聞こえてきたので行ってみると

八雲「あああ…腹減ったぜー。なージャンケンで負けたほうがメシ
作らねえ？」

大和と明久はグーしか出せないルールで」

大和「キャップがチヨキしか出せないなら良いよ」

明久「本当に土日はきついよね…」

八雲「土日自炊システムのうちの寮の欠点だぜ」

黛（真田さんに直江さんに吉井さん？お腹空いてるなんて気の毒に私の料理でよければ作ってあげたい）

はっ！

黛「これはチャンスなのでは！？

ここで私がお料理すればその流れでお友達に…！」

松風「名案だまゆっちー！」

黛「でもでもいきなり変なヤツーとか思われたら」

松風「おいこらー！決意決意ー！」

黛「そうでした！友達！友達100人！いきます！」

決意して食堂へ向かう

黛「こんにちは…」

忠勝「ぎゃーぎゃーうるせえぞおまえら！」

黛「！！？（ビクーツ）」

そこに源さんがバイトから帰ってきたみたいです

大和「あーゲンさんが帰ってきた！」

八雲「ぼくらのゲンさん！腹減った！」

明久「なにか作って！」

忠勝「ああ！？なんで俺がテメエらのためにメシを…アホか！」

3人は源さんに頼んでいます

大和「ゲンさんが作ってくれないと前途ある若者3人が

栄養失調で電車の駅名しか言えない体になっちゃう！」

明久「なっちゃうー！」

忠勝「知った事か！ってか吉井は料理できるだろうが！」

明久「お腹が減ってできないよー。だからゲンさんお願いー！」

忠勝「俺は夜もバイトがあるんだ。安眠の邪魔をすんな」

明・大「ゲンさん！」

明久「あーあ、ゲンさん行っちゃった」

八雲「練馬…桜台…江古田…東長崎…」

大和「って駅名しか言えない体につ！？」

黛「あ、あのー……」

明久「ん？2階の……黛さん？」

八雲「椎名町？（なんか用？）」

黛「あ……のっですねっ、わ、私でよければ……その……
これからタツ食を……ッ！」

大和（よくわからんが超にらんでるー！ツ！？）

忠勝「ちつメシの話されたら腹減ってきやがった。

おいバカ3人、テメエらの分も軽いもん作ってやる」

八雲「さすがゲンさん」

大和「やさしい」

忠勝「勘違いすんじゃねえ、ただのついで……

おう、お前も食うか？」

黛「えっ？」

大和「ああ、そうだ。黛さんなに？」

黛「あ……いえ、何でもありませんでした！ では！」

私は頭を下げてすぐ食堂から出て行きました。

八雲「？」

大和「何だったんだ？」

明久「……ごめん、ちょっとトイレ行ってくるね」

黛「……だ、ダメでした。あそこで一緒と言っべきでした……」

そこへ

明久「黛さん」

そこへ吉井さんが私を呼ぶ声が聞こえました

黛「は、はい！な、なにか私してしまったのでしょうか？」

明久「ん？何もしてないと思うけど……」

そうだ。今日はなにかあったのかも知れなかったけど

今度は一緒に食べようね。ゲンさんの料理はおいしいからね。
それを伝えに来たんだ。じゃあね」

吉井さんは私にそういうと食堂へと戻っていきました。

自室に戻ると

黛「ひとり反省会」

松風「頑張れまゆっちー！」

黛「昨日、母上が送ってくださった大福が役に立つ時がきました」

松風「物で釣るのはセコい気もするけどとっかかりとしてはありかもなー！」

黛「どうせひとりでは食べきれませんし

もしかしたら母上が見越してくださったのかも」

松風「愛が痛てー！」

黛「では、今度こそ」

コンコン

明久「！ はい、どうぞー開いてるよー」

ガラッ

黛「……あ！あのっ！」

明久「あれ？黛さん」

黛「こ…こ…こ…これ、実家から送られてきたつまらないものなんですけどっ！」

明久「え！？良いの？」

黛「つて違う！つまらないものなんて失礼ですよね！
そうではなくえーと……」

松風「落ち着けまゆっちー！まゆっちならいける！」

黛「でも松風、吉井さんポカーンとしてます！

戦力的撤退を提案します！」

松風「そこで引いてしまっただいのかまゆっちー！」

明久「あの……」

黛「はいっ!？」

明久「大丈夫？ひとまず落ち着こうよ」

黛「あ……ごめんなさい！迷惑ですよ？駄目ですよ？引きま
したよね？」

明久「え？」

黛「本当にすみませんでした。お見苦しいものを……ッ！
し、失礼します!!」

明久「え、えっ!？ちよつと黛さん？どうしたんだろ?ん？」

明久が足元を見ると黛さんが持つてきていた大福がおいてあった。

明久「これは……」

黛「またやってしまいました。失礼がないかと必死なあまりまた動転して…」

あれだけ物を送る鍛錬を重ねたのに!!」

松風「ねー100回練習したよねえ人形相手に、人形相手に」

黛「2回言わなくていいです。」

それに…松風のこときつと変な目で見られましたよね」

松風「間違いないなー」

黛「でもここであきらめたら今までと同じ…」

友達100人なんて夢のまた夢です…頑張らないと」

そこに

明久「あついたいた。黛さーん」

黛「えっ?」

私が振り返るとそこには吉井さんがいました

明久「や! お茶入れたんだけど一緒に飲まない?」

黛「え？ ええええええええっ!?」

私は吉井さんに連れられ食堂に向かうと

黛「あっ…私の…」

食堂に行くと机の上には私の実家から送られてきた大福が並べられていた

明久「もらったもんで悪いけどせっかくだから一緒に…って思ったんだけど」

八雲「おーい、黛さん。これうめーな！ありがとうございます！」

黛「え…」

八雲「ほら！君も遠慮せず食べたまえ！」

大和「なんでキャップが偉そうなんだよ！」

黛「……はい、いただきます」

明久（あっ笑った）

黛「まままま松風！お礼！お礼！言われました！お呼ばれして！」

松風「一歩前進だなまゆっちー！」

明久（それにしても凄いなアレ？確か腹話術だっけ？）

八雲（ふうん、黛かあ…こいつも面白えな）

文月学園1年 黛^{まゆずみ} 由紀江^{ゆきえ}

友達100人計画 現在の達成数 0人

ただし前途有望？

番外編 黛編〜友達100人できるかな〜（後書き）

今回はまゆっち視点での話でした

Aクラス戦　〜序章〜

Bクラスとの戦争から数日後の朝

いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺たちは、もうじきお別れになる予定のEクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

雄二「まず皆に礼を言いたい。

不可能だと言われていたのにも拘らずここまで来れたのは他でもない皆の協力があったることだ感謝している」

明久「ゆっ雄二どうしたの？らしくないよ？」

明久の言う通りだ。気味が悪いぜ。

雄二「ああ自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ」

やっぱり気味が悪いな

雄二「ここまで来た以上絶対Aクラスにも勝ちたい・・・

勝って生き残るには勉強が全てじゃない現実を教師どもに突きつけるんだ!!」

F『おおーッ!!』

F「そっだあーッ!!」

F「勉強だけじゃねえんだーッ!!」

最後に勝負に皆の気持ちが1つになっている。そんな気がした。

雄二「皆ありがとう。」

そして残るAクラスだがこれは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

F「どういうことだ？」

F「誰と誰が一騎討ちするんだ？」

F「それで本当に勝てんのか？」

雄二が教卓を叩いて黙らせる

雄二「落ち着いてくれ。それを今から説明する。一騎討ちをやるのは俺と翔子だ」

明久「馬鹿の雄二が学年主席の霧島さんに勝てるわけがな」

シュツ　　パシ　　シュツ

明久の顔のすぐ横をカッターが通り過ぎようとしたが百代がそれをキャッチ、

それを雄二の顔のすぐ横目掛けて投げつける。

雄「っ！……」

百代「次、弟を狙ったら拳を叩き込む」

雄二「……まあ明久の言うとおり確かに翔子は強い。

まともにもやりあえば勝ち目は無いかもしれない。

だがそれはD・Bクラス戦も同じだったろ？

まともにもやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

確かにそうだな。最初は勝てないと思っていた戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉だ。

それを否定する人間はこのクラスにはいない

雄二「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

F『おおおーっ！』

今Fクラス全員が雄二を信じている

雄二「具体的なやり方だが、一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

一子「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

雄二「日本史だ、ただし内容を限定する。

レベルは小学生程度方式の百点満点の上限あり。

召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負となる」

小学生程度の満点ありだと？

それだと満点前提の勝負だから集中力が先に切れた方が負けになるな

明久「でも同点だったら延長戦だよ？」

そうなるとブランクのある雄二には厳しくない？」

雄二「おいおいあまり俺を舐めるなよ。

いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦と言うものか」

一子「どういうこと？」

雄二「アイツなら集中なんかしなくてもこの程度のレベルのテストなら何の問題も無いだろう。」

俺がこのやり方をとった理由は1つ。

『ある問題』ができればアイツは確実に間違えるからだ」

なんだ？ある問題って？

雄二「その問題は『大化の改心』だ」

大和「小学生レベルとなると何年に起きたとかか？」

雄二「そうだ。その年号を問う問題が出たら俺たちの勝ちだ。

大化の改心が起きたのは645年。

こんな簡単な問題だって明久ですら間違えない」

明久「そうだよ。雄二そんな問題なら僕だって間違えないよ」

今の明久は間違えないだろうが………百代と一子、ガクトは目を逸らしていた。

やっぱりこいつらは………

雄「だが翔子は間違えるこれは確実だ。

そうすれば俺達は勝って晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

姫路「あの坂本君」

雄二「ん？なんだ姫路」

姫路「霧島さんとはその・・・仲が良いんですか？」

そういえばさつきから名前で呼んでたりしたな

雄二「ああアイツとは幼馴染だ」

明久「総員狙えっ！！」

雄二「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？

それに八雲までどうした！？」

明久「黙れ男の敵！！」

ガクト「そうだ！霧島と幼馴染だと！なんて羨ましい！！」

八雲「面白そうだったから」

明久「Aクラスの前にキサマを殺す！」

雄二「俺が一体何をしたと！？」

ガクト「遺言はそれだけか？」

明久「待つんだ須川君靴下はまだ早い、それは押さえつけた後に口に押し込むものだ」

須川「了解です。隊長」

男子の全員（俺、秀吉、大和以外）が雄二に向けて殺気を向けている。

姫路「あの、吉井君」

明久「ん？なに、姫路さん」

姫路「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

明久「そりゃ、まあ。美人だし」

そうだな。霧島さんは学園内でも上位の美しさだろうしな。俺達の周りにはあんな清楚な女子はいないしな

明久「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの？」

それと美波も僕に向かって教卓なんて物を投げようとしているの！？」

おお凄えな姫路がFクラスの空気に毒されてきたな。

秀吉「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉

明久「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

秀吉「冷静になって考えてみるが良い。相手は霧島翔子じゃぞ？」

男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

え？そうか？

秀吉「むしろ、興味があるとすれば……」

明久「……そうだね」

明久達の目線が姫路に集まる

姫路「な、なんですか？」

まさか、霧島さんが同姓愛かなにかと思ってるのか？

雄二「とにかくくつ俺と翔子は幼馴染で小さい頃間違えて嘘を教えたんだ。

アイツは一度教えた事は忘れない。だから今学年トップの座にいる」

それって凄くないか。一度教えた事は忘れないって……

雄二「俺はそれを利用してアイツに勝つ。

そしたら俺達の机は『システムデスクだ！』」

Aクラス戦　～交渉～

Aクラス

優子「一騎討ち？」

雄二「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄二を筆頭に俺や明久、秀吉、ムツリーニ、大和、姫路、島田という首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

え？百代やワン子達はって教室で問題集を解かせてるよ（笑）今の点数じゃやばいな。京が監督だな。

まあもし何かあったら犬笛を吹けば良い事だしな

272

優子「何が狙いなの？」

現在、俺たちと交渉の席についているのは秀吉の姉の木下優子だ。

雄二「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

まあ訝しいのも無理は無い。

底辺に位置する俺たちが一騎討ちで学年トップの霧島さんに挑む事自体が

不自然なのだから当然何か裏があると考えるだろう

優子「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事ができるのはありがたいけどね、

だからと言ってわざわざリスクを犯す必要もないわね」

雄二「賢明だな」

予想通りの返事だ

大和「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

優子「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗り昨日Aクラスに乗り込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がつき、CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている

雄二「Bクラスとはやりあう気があるか？」

優子「Bクラスって・・・昨日来ていた『あの』……………」

雄二「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。

幸い宣戦布告はまだされていないようだが、

さてさて。どうなることやら」

優子「でも、BクラスはFクラスと戦争して負けたのだから

試召戦争はできないはずよね」

試召戦争の決まりごとの1つ、準備期間。

戦争に負けたクラスは準備期間を経ない限り戦争を申し込む事がで

きないのである。

雄二「知っているだろ？事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は

『和平交渉にて終結』って事になっていることを。規約には
なんの問題も無い」

これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法だ。

優子「……………それって脅迫？」

雄二「人間が悪い。ただのお願いだよ」

優子「うーん……………わかったよ。何を企んでいるか知らないけど、

代表が負けるなんてありえないからね。
ただ少し待ってアタシだけではそれは決められないから」

そこで優子は人を呼ぶ

冬馬「どうかしましたか木下さん？」

優子「葵君、相談なんだけどFクラスの人たちが

一騎討ちを所望しているんだけど」

そこで優子は葵に今までの話を説明する

葵「良いでしょう。お受けしますよ」

明久「え？本当に？」

葵「はい、いくら私がバイでも

あんな格好した人達がいるクラスと戦争なんて嫌ですから」

・・・今、凄い事を聞いて様な気が

葵「えつと吉井君でしたっけ？明久君とこれから呼んでもよろしいですか？」

おい、コイツ明久に目をつけたのか

明久「え？別に良いよ。よろしくね葵君」

明久、お前気づいてないのか、・・・いや気づかないほうがまだ良いのか

優子「でも、こちらからも提案代表同士じゃなくて・・・

お互い5人ずつ選んで一騎討ちを

5回で3回勝った方が勝ちって言うのならいいわ」

雄二「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

優子「多分大丈夫だと思うけど代表の調子が悪かったら

問題次第では万が一があるかもしれないし」

八雲「わかったぜ。それで良いぜ」

雄「お、おい八雲。勝手に・・・」

優子「あ、あなた・・・」

八雲「ぶつちやけ俺もAクラス相手に戦ってみたいしな。
それと……えっとこの前は大丈夫だったか？」

優子「ええ、お陰様で」

八雲「それなら良かった」

雄「おい、八雲。知り合いだったのか？」

八雲「ん〜、この前少しな」

雄「そうか。なら、わかった。そちらの条件を呑んでもいい。

ただし、勝負の内容はこちらで決めさせてもらう。
それくらいのハンデがあってもいいはずだ」

優子「え？うーん……」

霧島「……受けてもいい」

そこで優子と葵の後ろからAクラス代表の霧島翔子があらわれた

霧島「……雄二の提案を受けてもいい」

優子「あれ？代表いいの？」

優子「……その代わりに条件がある」

大和「条件？」

霧島「……うん」

霧島さんが軽く頷く

霧島「・・・負けたら相手は何でも1つ言う事を聞く」

ってことは試合に出たメンバーは負けたら相手の言う事を聞かないといけないのか

向こうで明久とムツリーニが何か騒いでいたが無視する事にした。良い予感がしなくなてな・・・

優「じゃこうしましょう。勝負内容は5つの内3つ決めさせてあげる。

2つはうちで決めさせて」

大和「雄二それでいいんじゃないのか」

雄二「ああ、そうだな。交渉成立だ」

明久「ゆッ雄二！！まだ姫路さんが了承してないのにそんな勝手な！」

明久はさっきから何を言ってるんだ・・・

雄二「心配すんな。絶対姫路に迷惑はかけない」

霧島「・・・勝負はいつ？」

雄二「そうだな。10時からでいいか？」

霧島「・・・わかった」

霧島さんって独特の雰囲気を持つ人だな。話し方だけならムツリー
こと似ているし。

雄二「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

大和「そうだな。皆にも報告しておかないとな」

交渉が終了し、Aクラスを後にする。

Aクラス戦 ～1試合目～

Fクラス

雄「　　ということだ。」

Aクラスとは5対5の勝負で3勝した方が勝ちとなる。

そこで今から相手の情報についてムツリーニから報告がある」

雄二がAクラスで起きたこと伝えるとムツリーニが教卓の前に立ち
1枚の紙を見せてくれた

雄「この紙に書いてあるのはAクラスの成績上位のヤツについてだ」

そこに書かれているのは

Aクラス上位成績者（新学期当初）

総合科目

1)	霧島 翔子	5	2	9	1	点
2)	葵 冬馬	5	2	9	0	点
3)	九鬼 英雄	4	9	2	6	点
4)	久保 利光	3	9	9	7	点
5)	木下 優子	3	7	8	1	点
6)	工藤 愛子	3	6	9	1	点
7)	不死川 心	3	5	7	2	点
8)	忍足 あずみ	3	5	6	9	点
9)	井上 準	3	4	3	1	点
10)	佐藤 美穂	3	1	9	7	点

雄二「おそらくAクラス戦ではこの10人の中から選ばれて出て来

るだろう」

雄二「俺達は行ってからメンバーを言うが、候補としては

代表である俺と姫路、秀吉、明久、康太、八雲、京、大和を候補としている」

クリス「なぜ自分が選ばれていないんだ」

一子「アタシも」

ガクト「俺様もだ」

百代「私もだ」

雄二の言葉に納得しないよう意見を上げる

雄二「理由は簡単だ。一子とガクト、川神姉は点数が低すぎるからな。

クリスは点数がAクラスに及ばないし召喚獣の操作技術がまだ低いからな」

クリス「ではなぜ木下と吉井、土屋は選ばれたのだ」

雄二「秀吉はAクラスにはコイツの姉である木下優子がいるから

考えや行動がわかると思ったし、召喚獣の操作も上手くなっているからな。

次に明久だが確かに点数はクリスよりは低い、操作技術なら学年で1・2を

争うまでの実力があるからな。

そしてムツツリー二は保健体育だけはAクラス並の点数があ

るからだ」

クリス「そうなのか」

雄二「ただ、これは候補なだけで、もしかしたら向こうで変更する可能性が

あるかもしれないからな。他の皆も心構えはしておいてくれ。
さあAクラスに乗り込むぞ！」

F「「「「うおおおおお！！！！」「」「」」

そしてFクラスとAクラスとの戦争がついに始まる。

Aクラス

高橋「では、両名共準備は良いですか？」

今日はここ数日、戦争で何度もお世話になっている
Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

雄二「ああ」

霧島「・・・・・・・・問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。

高橋「それでは1人目どうぞ」

雄二「姫路頼むぞ！先に1勝が欲しい」

姫路「はい、頑張ります！」

冬馬「では、頼みますよ英雄」

英雄「我が友の望みならば仕方あるまい。我が出る」

あずみ「頑張ってください英雄様」

英雄「うむ」

高橋「では、両者前へ」

姫路と九鬼が前に出る

九鬼「科目は総合科目でたのむぞ！」

科目の選択権は1・4試合目はAクラス、2・3・5試合目はFクラスとなっている。

英雄と姫路は自分のワッペンを机に重ねておくと

九鬼・姫路 「サモン試獣召喚！」

総合科目

Aクラス	九鬼英雄	VS	Fクラス	姫路瑞希
4926点				4409点

英雄の召喚獣はまるでf a t eの英雄王と同じ金ピカの装備で、武器もエヌマ・エリツシュだ。

雄二「しまったな。相手は九鬼か」

大和「まずいな。先に1勝するはずだったが」

姫路「行きます!!!」

姫路は先に攻撃を仕掛ける。
だが英雄は軽く避ける。

あずみ「英雄様あ!!!、頑張ってください!!!」

英雄「ああ、愛しの一子殿が見ておられるのだ。 負けるわけにはいかぬな」

一子「八雲」

八雲「はいはい、お前、本当に英雄の事苦手だよな」

ワン子は俺の後ろに隠れる

一子「だつて」

英雄「なら一子殿の前だ。すぐ終わられてやろう」

英雄がそういうと召喚獣の腕輪が光る。
すると、英雄の周りから数十本の剣が現れた。

アレはギルのゲートオブ ビロンか！？

英雄「私の腕輪が見れたのだ！ 光栄に思うがいい」

英雄が合図すると周りにあった剣が姫路の召喚獣に突き刺さっていく。

そこで勝負が決した。

高橋「勝者、Aクラス！！」

まずはAクラスが1勝をあげた。

Aクラス戦 〓1試合目〓 (後書き)

ついにAクラス戦が始まりました。

次は誰が出てくるのかお楽しみに

Aクラス戦 2試合目

雄二「すまない姫路、当てが外れた」

姫路「すみません、力が及ばずに」

大和「いや、気にするな姫路。相手が悪すぎた」

高橋「では次の方はお願いします」

霧島「……愛子お願い」

工藤「了解！、勝ってくるからね」

不死川「Fクラスなどけちよんけちよんにしてくるのじゃ」

工藤「わかったよ心さん」

雄二「工藤か。なら康太、いつてくれ」

康太「……任せておけ」

工藤「君の噂は聞いてるよ？ムツツリーニ君だね？」

康太「……土屋康太」

工藤「それじゃあよろしくねムツツリーニ君」

康太「……………だから土屋康太」

愛子「じゃあ行くよムッツリーニ君」

康太「……………最近誰も名前を呼んでくれない」

高橋「それでは対戦教科を指定してください」

康太「……………保健体育」

工藤「君、保健体育が得意なんだってね？でもボクも保健体育は得意なんだよ

君と違って……………実技でね」

大和「問題発言だな」

京「私も大和のためなら」

大和「はいはい、その話はまたいつかな」

康太「……………実技……………っ！（ブシャアアー！）」

ムッツリーニが工藤の発言で何を妄想したのかわからないが盛大に鼻血を噴き出した。

八雲「ムッツリーニ！！大丈夫か？しっかりするんだ！」

明久「ムッツリーニ！！」

俺と明久はムッツリーニの元に駆け寄り安否を確認する

工藤「あはは！ムッツリーニ君は面白いね！」

明久「ムッツリーニになんて酷いことを……っ！」

八雲「これは酷いぞ！」

工藤「君、吉井君と真田君だっけ？ボクでよかつたら教えてあげようか？」

もちろん、実技でね」

明久「（ブシャアアー！！）」

八雲「あ、明久！？」

明久も工藤の発言にやられ鼻血を噴き出す。

康太「……これしきのことなんともない」

秀吉「かなり鼻血をだしておるがの……」

いや、ムッツリーニ本当に大丈夫か？足元が震えているんだが……

高橋「そろそろ勝負に入ってください」

いや、先生これはオタクの生徒の仕業ですけど

工藤「は〜い、サモン試獣召喚つと」

康太「……………試獣召喚」

明久「なに！？あの巨大な斧はっ！？」

明久が驚きの声を上げる。オマケに腕輪も装備している。

工藤「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

心「工藤！やってやるのじゃ」

愛子が笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く。

武器を構え大斧に雷光をまとい康太の召喚獣に襲い掛かる。

工藤「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニ君」

康太「……………加速」

土屋がそう呟いた時、土屋の腕輪が輝き、召喚獣がブレた。

工藤「……………え？」

戸惑う愛子。康太の召喚獣は敵に射程外にいた。

康太「……………加速、終了」

そして遅れて二人の点数が表示されていた。

保健体育

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス土屋康太
543点 681点

康太「……俺の勝ちだ」

工藤「……まだだよ」

勝負はついたと思ったが工藤の召喚獣が最後の力を振り縛り雷光を帯びている斧をムツツリー二の召喚獣に投げつけていた。油断していたムツツリー二の召喚獣は避けることが出来ず真っ二つになった。

しかし、工藤の召喚獣もすでに切り裂かれていたので倒れてしまう。

保健体育

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス土屋康太
0点 0点

高橋「両者、戦死なのでこの試合は引き分けとなります」

工藤「皆ごめんね。勝てなかったよ」

霧島「……愛子はよくやった」

心「まあ負けなかっただけよしとするかの」

葵「良く引き分けましたね。それだけでも上出来ですよ」

小雪「マシユマロ食べる？」

工藤「うん、もらっよ」

康太「……………すまない、最後油断した」

大和「いや、あれは仕方ない。まだ動けるとは思わなかった」

雄二「だが、まずいな。この2人が勝つことが条件だったんだが」

大和「そうだな。俺もまだ召喚獣の操作は不慣れだし、

京の召喚獣は1対1の戦いでは不利だ」

雄二「ということは明久、秀吉、八雲の3人で勝ってもらっしかないのか」

大和「そういうことになるな」

Aクラス戦 〓2試合目〓 (後書き)

まさかのムツツリー二も勝てませんでした。

これでFクラスは1敗1分けとなりました。

さて次は誰でしょうか？

次回をお楽しみに

Aクラス戦 3試合目

高橋「それでは三試合目に参ります。対戦者は前へ」

霧島「……優子よろしく頼む」

優子「任せて」

雄二「……秀吉の姉か。秀吉頼むぞ」

秀吉「了解じゃ」

優子「秀吉、試合の前にちょっといいかしら？」

秀吉「なんじゃ？」

優子「Cクラスの小山さんって知ってる」

秀吉「はて誰じゃ？」

あれ？Cクラスの小山ってこの前秀吉が……

優子「じゃあいいや。その代わりに、ちょっとこっちに来てくれる？」

秀吉「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

秀吉が廊下につれていかれる

秀吉「姉上、勝負は……どうしてワシの腕を掴む？」

優子「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？」

どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっっているのかなあ？」

秀吉「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して……」

あ、姉上っ！ちがつ……その関節はそっちには曲がらなっ……！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

優子「秀吉は急用ができたから帰るって」

雄二「そ、そうか……」

高橋「では代わりの方を出してください」

雄二と大和が悩んでいると

優子「まったく秀吉も演劇なんて遊びばかりしないで勉強していれば

成績だってもう少し上がったでしょうに。

演劇なんてくだらないことばかりしているから」

プチ

雄二「こちらからは」

八雲「俺が出る」

雄二「なっ!？」

八雲「良いよな雄二」

雄二「だが!」

大和「雄二もうダメだ」

明久「そうだね。八雲が怒るの久しぶりだね」

百代「ああなつた八雲は大変だぞ」

一子「そうね」

京「でもこれで勝つたも同然だね」

雄二「………仕方ない。八雲任せる。だが絶対に勝てよ」

八雲「もちろんだ」

俺が前に出ると

優子「貴方が相手ね」

八雲「木下優子。今さっき秀吉の夢の事をくだらないと言わなかつたか？」

優子「ええ、言ったけど。それが何か？」

八雲「秀吉に謝れ！確かにCクラスのことです秀吉君やりすぎたかも知れないが

夢を侮辱するのは間違っている！俺は夢に向かって頑張っているヤツを

応援している」

優子「え？」

八雲「お前は何か夢があつて今、頑張っているのか！？」

もし夢を持っていないのなら人の夢を馬鹿にするな！！

たとえ持っていたとしても夢に向かって頑張ってるヤツを

馬鹿にするのはたとえ誰であろうと許さない！

だから俺が勝つたら秀吉に謝ってもらうぞ」

優子「わ、わかったわ。あなたが勝つたら謝るわよ」

高橋「教科は何にしますか？」

八雲「物理でお願いします」

高橋「わかりました」

優子・八雲『サモン試獣召喚！』

物理

Aクラス 木下優子

VS

Fクラス 真田八雲

386点

538点

A「なんだ！？あの点数は」

F「凄え！！」

八雲「いくぞ、木下優子」

俺は優子の召喚獣に向かって槍を構え突撃する。

優子も無事を構え、対応する。

俺の武器は槍、優子の武器はランス、お互いの間合いはほぼ同じだ

俺は突いたり斬ったりとじわじわと優子の点数を削っていく。

対する優子の攻撃はすべてかわしている。

これも観察処分者になったおかげだ。操作技術が格段に向上している。

百代「さすが八雲だな」

明久「完全に秀吉のお姉さんの攻撃をかわしているよね」

クリス「凄いな真田は」

一子「八雲の召喚獣、腕輪しているわね。どんなのかしら？」

明久「そうだね。気になるね」

八雲「なら明久、ワン子。見せてやるよ。

こっちも九鬼の腕輪を見せてもらったしな」

明久「あれ？聞こえてた」

優子「なに、余所見しているのよ」

優子がランスを突き出してくるが軽く横に避けて攻撃をかわす

八雲「ならいくぞ、『侵略すること火の如し』ってね」

俺は炎を武器に纏わせ攻撃する

優子「きゃっ！」

優子は俺のいきなりの攻撃と炎に驚き、攻撃に当たってしまった

八雲「じゃあこれで終わりにするぞ！

真田流奥義 『烈火槍』！！」

俺は炎を纏った槍で優子の召喚獣に向かって連続で突きを放ちトドメをさした

高橋「勝者Fクラス」

F「「「「「うおおおお」「」「」「」

F「Aクラス相手に本当に1勝あげたよ」

八雲「じゃあ約束どおり秀吉に謝ってくれよ」

優子「わかっているわ。

「……………秀吉、ごめんなさいねあなたの夢を馬鹿にして

しまつて」

優子はいつの間にかに戻ってきていた秀吉の元まで向かって頭を下げた

秀吉「い、いいのじゃよ姉上。今回の事はワシにも非があるからの。今回の事はお互い水を流そうではないか」

優子「ありがとうね。えつと真田君もごめんなさいね。

まだ夢を持っていないあたしが夢に向かって頑張っている人を馬鹿にするなんていけなかったわね」

八雲「いや、気にするな。勝手なことを言つてすまなかつたな優子。つてか俺名前で呼んでたが良かったか？」

優子「いいのよ。こつちこそありがとう。優子でいいわよ。

秀吉がいるからね」

優子はそついうとAクラスの皆がいるところに戻つた。

優子「……皆ごめん！負けてしまつたわ」

霧島「……気にしない。相手が悪かつただけ」

葵「そうですよ。気にしないでください」

心「なにFクラスに負けておるのか！仕方がない次は此方が出よう」

九鬼「不死川の言う事は気にするでない。

ただ真田八雲に大事な事を習つたであろう。その事は忘れぬ

ようにな
「

優子「九鬼君ありがとう」

あずみ「さすが英雄様！！敗者にも優しいです」

Aクラス戦 4試合目

高橋「では、4戦目を行います」

不死川「では此方が出よう。無様な猿共を懲らしめてやるのじゃ」

ガクト「俺達のことを猿呼ばわりだと!!」

京「ガクトは猿じゃなくてゴリラだよな」

大和「まあ、そうだな」

ガクト「おいしい!!」

八雲「いきなり、俺達の事を猿呼ばわりかよ」

雄二「かなりムカツクな」

明久「じゃあ、僕が行くね」

雄二「……俺達が勝つにはお前が勝たないといけないが」

明久「頑張るよ!友達を侮辱されたからね」

八雲「明久頑張れよ!!」

明久「ああ」

明久と不死川が前に出る

不死川「確かお主は観察処分者だったのう」

明久「うん、そうだけど」

不死川「なら、召喚獣にどれだけ攻撃を与えてもいじめにはならぬという事じゃな」

明久「え？」

不死川「教科は日本史でお願いするのじゃ」

高橋「では始めてください」

僕達はお互いにワッペンえお置くと

明久・不死川 『サモン試獣召喚！』

日本史

Aクラス	不死川 心	VS	Fクラス	吉井明久
	456点			338点

大和「さすがAクラスだな点数が高い」

ガクト「なんだと！？明久の点数が高いだ！？」

一子「アキに負けてるなんて」

八雲「元から負けてるだろ」

不死川「Fクラスの猿にしては凄いの。此方には勝てぬであろうが」
明久「やってみないとわからないよ」

明久は一気に不死川の召喚獣に突撃する。
不死川も武器である鉄扇を構えて対峙する。

明久「そこっ！！」

明久は不死川のスキについて鉄扇を蹴り上げて胴に一撃入れる。
さすが明久だな。召喚獣の操作が上手い。

不死川「ぐぬぬ」

そこからは明久は互角に戦っている。

すると、不死川が鉄扇を明久の召喚獣に投げつける。
そこで突然の事で明久は一瞬体勢を崩してしまった。
そこへ不死川が明久の召喚獣の左腕を掴み関節をはずした

明久「うっ！！」

不死川「痛いであろう。まだこれからのじゃ」

不死川はそういうと腕輪を発動させた

不死川「舞うのじゃ！この腕輪は此方にふさわしい腕輪なのじゃ」

不死川の召喚獣のまわりには花びらが何枚も舞っており、

その花びらが刃のように鋭く明久の召喚獣に傷をつけていきなぶり続ける。

明久もフィードバックで苦しんでおり、すでに片膝が地面についていて
もう倒れそうだ。

姫路「ひ、ひどいです。あそこまでやる必要はありません」

島田「そ、そうよ。やりすぎだわ」

お前らがそれを言うか？

秀吉「じゃがアレでもただのリンチではないか！」

康太「……………酷い」

不死川「どうするギブアップするかの？」

明久は不死川の攻撃に耐えている。

百代「明久！！川神魂を思い出せ！！！」

明久「そうだ…光灯る町に背を向け、輪が歩むは果て無き荒野、

奇跡も無く標もなく、ただ夜が広がるのみ、

揺ぎ無い意志を糧として、闇の旅を進んでいく、勇往邁進！

！」

明久は立ち上がり、関節が外れたまま不死川の召喚獣に突撃していく

明久「僕は負ける訳にはいかないんだ！！！」

百代「明久いけっ!!」

明久の召喚獣は数少ない動きで花びらのかわして行き懐へ忍び込む

明久「はあああ!!」

明久は関節が外されていない左腕で木刀を構え、不死川の召喚獣に攻撃する。

不死川は腕輪に集中していたのでなす術が無く、明久の攻撃を横払い、突き、足払い、と続き最後に頭に懇親の力で叩きつけられた。

そして勝負がつく

日本史

Aクラス	不死川 心	VS	Fクラス	吉井明久
0点				21点

高橋「勝者Fクラス」

明久「よっしゃあああああああ!!!!!!!!」

明久の勝利の雄たけびが教室に響いた。

Aクラス戦 5試合目

不死川「そ、そんなバカな。此方が負けたじゃと」

九鬼「情けないな不死川」

あずみ「完全敗北ですね。まだ木下さんの試合のほうが良かったですよ」

不死川「うう……」

雄二「良くやった明久」

八雲「お疲れ明久」

明久「姉さんのおかげだよ。あそこで川神魂を思い出さなかったら負けてたよ」

雄二「それにしても本当に良くやったぞ明久」

八雲「明久は勝ったんだ！あとはお前だぞ」

雄二「おう！」

高橋「最後の1人どうぞ」

霧島「……はい」

Aクラスからはやはり代表の霧島さんが出てくる

そして、俺たちのクラスからは当然

雄二「俺の出番だな」

坂本雄二。コイツしかいない

高橋「教科はどうしますか」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ」

ざわ……

雄二の宣言で先ほどまで静かだったAクラスにざわめきが起きる

A「上限ありだって？」

A「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

A「注意力と集中力の勝負になるぞ」

高橋「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。

少し待っていてください」

高橋先生はノートパソコンを閉じ、教室を出て行った

そんな先生を見送りつつ俺たちは雄二に近づく

明久「雄二、あとは任せたよ」
明久と雄二が手を握る。

雄二「ああ。任された」

康太「……………後は任せる」

ムツリーニが歩み寄り、親指を立てる

秀吉「ここが正念場じゃ。頑張るのじゃよ」

島田「頑張りなさいよ」

姫路「頑張ってくださいね坂本君」

百代「頑張りよ」

一子「頑張りなさいよね」

大和「頑張りよ」

雄二「お前らには随分助けられた。感謝している」

雄二は皆から応援されそれに答える

八雲「しくじるなよ雄二」

雄二「ああ、わかっている。もう少ししたらシステムデスクだ」

高橋「では、最後の勝負、日本史を行います」

高橋先生がそう言うと雄二と霧島さんは教室を出て試験会場である視聴覚室に行った。

あと俺たちにできることは『あの問題』が出てくれることを祈るだけだ。

試験の様子はモニターで見ることができない。

いよいよ試験が始まりそうだ。

一子「いよいよね」

八雲「そうだな」

クリス「これで、あの問題が出なかったら坂本は……」

明久「負けるだろうね」

秀吉「もし出たならば」

百代「ああ」

もし出たなら勝てるはずだ。

試験が開始された。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が表示される。

さて問題が出ているか……

……問題を見ていくがあの問題は出ていなかった。

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

Aクラス 霧島翔子 100点

VS

Fクラス 坂本雄二 100点

なんとか引き分けたみたいだ。

そのあと何度か同じ展開が続いていき

5回目の試験中……

《次の()に正しい年号を記入しなさい》

()年 平城京に遷都

()年 平安京に遷都

()年 鎌倉幕府設立

()年 大化の改新

F『あ……あ……!』

出ていた

姫路「あ、明久君っ」

明久「うん」

秀吉「これで、ワシらは……」

八雲「ああ。これで俺たちの卓袱台が」

F『システムデスクに!』

揃ったFクラス皆の言葉

明久「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ!」

F『うおおおおお!』

教室を揺るがすようなFクラスの歓喜の声上がる。

Aクラスの皆はそれが何かわからず戸惑っているみたいだ。

試験の結果は雄二と霧島さんが教室に帰ってきた時に開示されるらしい。

俺たちFクラスの皆は雄二の帰りを待ちわびた。

しばらくして雄二と霧島さんが戻ってくる。

2人が戻ってきた事で得点が表示された

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 96点

雄二が1点差で負けてしまった。
俺たちFクラスとAクラスの戦争は「2勝2敗1分」という形
になった

Aクラス戦　く結末は？く

そして雄二の元に流れ込む俺たち

雄二「・・・・・・・・殺せ」

明久「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ」

姫「吉井君、落ち着いてください！」

姫路が明久を食い止める

百代「覚悟はできているんだろうな」

百代も拳をならせて雄二の前に立つ

ガクト「だいたい、96点ってなんだよ！あと2点じゃねえか！！」

雄二「すまない、途中で集中力が切れた」

明久「この阿呆があーっ！」

秀吉「明久もガクトも皆、落ち着くのじゃ！」

明久「くっ！なぜ止めるんだ秀吉！

この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！！」

姫路「それって体罰じゃなくて処刑だと思えますが・・・」

八雲「お前ら落ちつけ！」

ガクト「何だ八雲！お前は悔しくないのか？」

八雲「悔しいが、終わったことをどうこう言うつもりは無い。

それにお前らが言うなよ。お前らは半分も解けないだろうが」

百・一・ガ「「「っ！」「」」

大和「八雲の言うとおりだ。これからAクラスとこの後どうするか話し合うから

雄二と俺、八雲の3人で行って来るから、京この場を任せるな」

京「わかった」

大和「雄二、八雲いくぞ！」

俺たち3人は中央へ向かった。

雄二「待たせたか？」

優子「大して待ってないわよ。で？どうする？」

Aクラスからは霧島さんに優子、葵の3人が来ていた

大和「Fクラスは、Aクラスに和平交渉を申し込む」

葵「私も直江君と同じ考えですね」

優子「葵君も？」

葵「ええ、私達は学年最高の成績を所有しているクラスです。

それが言い方は悪いですが最下層のFクラス相手に引き分けという形で

終わりました。正直言ってこれではAクラスの面目が丸つぶれです。

もし、この後戦争を続行したといつても、あちらにはまだ武神と謳われる

川神さんがいますし、FクラスはこれまでE・D・Bクラスと戦ってきたという

経験があります。いくら私達が成績が高かろうと操作技術では少し

Fクラスに劣っていますからね。ですので戦っても危ないんですよ」

雄二「では、和平交渉という事でいいのか？」

葵「私はそれで良いと思いますが……こちらでも戦争を仕掛けられたので

そう簡単には納得しない方もいるかもしれませんが」

大和「なら、最初に霧島が言っていた勝った相手が負けた相手に

1つ言う事を聞いてもらうってのを受け入れよう」

葵「それなら良いと思います。どうでしょうか代表？」

霧島「……………いい。優子は？」

優子「代表が受け入れるならアタシもそれでいいわ」

葵「だそうです」

大和「わかった。雄二そういうことだ」

雄二「……仕方ないか、わかった。それを受け入れよう」

葵「ならこれでAクラスとFクラスとの間に和平交渉が成り立ちましたね」

八雲「なら約束だけど、霧島さんが雄二に、明久が不死川さんに、
工藤さんとムツツリー二は引け訳だからなしで、九鬼が姫路
にってことだな」

葵「あなたも木下さんに勝ったのですから権利はありますよ」

八雲「もう俺は秀吉に謝れっていう願いをしたからな。」

だから俺のはもう無いんだ」

優子「え？あれで良かったの？」

八雲「いいよ」

大和「なら、九鬼と不死川を呼んでくれないか？

こちらからは明久と姫路を呼ぶから」

その後九鬼と不死川、姫路と明久を呼んだ。

結果から言うと、

九鬼は姫路に何も命令しなかった。

九鬼曰く「こんな試合勝って当たり前だ」そうだ。

明久も不死川に何も命令はしなかった。

明久曰く「命令する事がない」だそうだ。明久らしい発言だ。

そして最後に霧島さんは

霧島「……………それじゃあ……雄二、私と付き合ってた
皆がいる場で霧島さんは雄二に告白した。」

雄二「やっぱりな。お前、まだあきらめてなかったのか」

霧島「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

やはりか……

雄二「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合っ気は無いのか？」

霧島「……………私には雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

雄二「……………拒否権は？」

霧島「……………ない。約束だから」

葵「代表よかったですね」

優子「おめでとう代表」

九鬼「良かったな霧島」

不死川「何故Fクラスの猿なんか」

九鬼「無粋な事を言うのではない。あずみやれ！」

あずみ「はい、英雄様！ 延髄チョップ!!」

不死川「ぴぎゃあ!!」

八雲「良かったな霧島さんに雄二」

大和「雄二おめでとう」

明久「良かったね雄二」

雄二「チツ」

霧島「……ありがとう／＼」

霧島さんは少し照れくさそうだった。

霧島「雄二、今からデートに行く」

雄二「なっ!?!」

八雲「行ってらっしゃい雄二」

大和「こっちは俺達に任せろ」

雄二は霧島さんに連れられ教室から出て行った

ガラッ

すると教室の扉が開く音がする

西村「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

そこには生活指導の西村先生（鉄人）と小島先生が立っていた

明久「あれ？西村先生、小島先生どうしたんですか？」

西村「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようか
と思っただけ」

八雲「西村先生。今、我がFクラスと言いましたが・・・」

西村「ああ、今度から福原先生に変わって担任が小島先生、副担任
が俺に変わるそうだ。」

これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

F「「「「「何iiiiiiiiiiii!?!」「「「「「」

クラスの男子生徒全員から悲鳴があがる。

小島先生も厳しいと評判の先生である。

小島「いいか。確かにお前等はよくやったと思う。

Fクラスがここまでくるとは正直思わなかったらう」

西村「でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を
渡っていく上では

強力な武器の1つなんだ。だからないがしろにしてもいいも
のじゃない」

全て正論だから何も言い返せないな。これは・・・

西村「特に吉井、坂本、真田、川神姉は念入りに監視してやる。

なにせ、開校依頼は初の『観察処分者』が3人とA級戦犯、
それに校舎を破壊するヤツらだからな」

明・百「」だけど、そうはいきませんよ（いかない）！！

なんとしても監視の目をかいくぐって今まで通り
楽しい学園生活を過ぎしてみせる！」「」

小島「」・・・お前らには悔い改めるといふ発想はないのか

小島先生のため息混じりの台詞。

西村「」とりあえず明日からは授業とは別に補習の時間を設けてやる
」

西村先生がそう言うと、明久達は嫌そうな顔をする。

ある人物との突然の出会い

西村先生と小島先生が俺達の担任になり補習の時間が増えるというそんな重苦しい空気の中、島田が明久にススツと歩み寄りよってこう言った。

島田「さあ〜て、アキ。補習は明日みたいだし、

今からクレープでも食べに行きましょうか？」

明久「え？島田さん？僕は遠慮す」

明久が少し戸惑った声を上げる。

姫路「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

明久「ええっ！？姫路さん、てか2人ともそれは話題にすら上がってないよ！？」

そう思っていると、今度は瑞希が明久を映画にさそいだした。

明久「鉄人！小島先生！やっぱり補習今からやりましょう！思い立ったが仏滅ですよ！」

西村「吉日だバカ。まあお前がやる気なのはうれしいが

……まあ無理をする事はないだろう」

地獄へ突き落される様なことこの上ない一言をつける。

明久「おのれ鉄人！僕が苦境にあると知った上での狼藉だな！？」

こうなつたら卒業式の日、伝説の木の下で釘バットをもつて貴様を待つ!!」

斬新な告白だな、おい

鉄人に詰め寄ろうとしたところを、明久は島田にネクタイをつかまれ引つ張られる。

島田「逃げようつたつてそうはいかないわよ、吉井」

姫路「では吉井君、この際3人で良いのでいいですから行きましょう」

明久の方はそれに島田も加わり、左腕を抱きかかえるように引つ張り始める。

明久「ちよつと待って姫路さん!なんで雄二の事をほつといて、僕と映画を観たがるの!??」

姫路「坂本君? 何のことですか?」

明久「え!?? だって……もしかして、違つもの!?? じゃあ誰が」

島田「無駄口叩いてないできなさい!」

明久「ぐぶつ! ちよつ、ぐるじ……」

島田が引つ張る力を強め、ネクタイが首を締め付ける。

姫路もそれに構わず、ただ引つ張る事に必死になっていた

明久「た、助けて!」

八雲「百代、弟がピンチだぞ」

百代「うーん、何か助けたい気がしないな」

ガクト「右に同じだ」

明久「そ、そんな。や、八雲、大和…」

八雲「はあ、貸し一だぞ」

俺はそういうと明久を島田と姫路から助け出した。

明久「あ、ありがとう八雲！助かったよ」

ガクト「なんで助けてんだよ！」

八雲「なら明久今度の休日、寮で飯作つてな。朝昼晩な！」

大和「それいいな、もちろん全員分な！！」

明久「え！？全員分？」

ガクト「本当に八雲と大和は明久に甘いよな」

百代「そうだぞ」

一子「そうよ！もう少しアタシにも優しくしなさいよね」

大和「なら、ガクト。お前らには京の手料理を食べさせてあげよう」

八雲「あつ！2人もいるか？」

百・一・岳「「いいえ！いりません！！」「」

京「そんなにはつきり断らなくても・・・」

八雲「こっちは休日自炊なんだぞ！

まともに料理できるのはゲンさんだけなんだぞ！」

大和「そうだぞゲンさんが頼りなんだ」

八雲「そういうことだからよろしくな明久！もちろん金は出すから」

明久「わかったよ。なら1度、買い物してからだね」

八雲「なら帰るか！明久手伝うぞ！」

明久「じゃあお願いするね」

そうして俺と明久は帰って行った。

明久が1度荷物を置きに家に帰ってから買い物に出かけてその帰り道

明久「いっぱい買ったね」

八雲「そうだな。明日は雄二たちも呼んで盛り上がるか」

明久「それはいいかもね！」

明久と雑談しながら歩いていると、俺達の前方にあたりをキョロキョロ見回している女の子の姿があった。

明久「どうしたの八雲？」

俺が前方の女の子の事を指差す

明久「あ！女の子だね。あたりを見回してるけど迷子かな？」

八雲「そうかもしれないな」

明久「八雲。ちょっとこの荷物お願い！」

明久はそういうと俺に荷物を任せ、女の子の元へ駆け寄る。おい、明久。凄い重たいんだが……

明久「ねえ君、どうかしたの？もしかして迷子なの？」

????「うむ、連れとはぐれてしまったのだ」

明久「そうなんだね。人とはぐれてしまったんだね。」

じゃあ、一緒に探してあげるよ。僕の名前は吉井明久って言うんだよ。

で、向こうで荷物を抱えているのが僕の友達の八雲だよ」

八雲「悪いなこんな状態で。俺の名前は真田八雲っていうんだ。よろしくな」

????「吉井に真田だな。ふむ、覚えた。」

ワレの名前は九鬼紋白。紋様と呼ぶがいい！」

明久「よろしくね紋様。ん？九鬼？」

八雲「ってことは揚羽さんと英雄の妹か？」

紋白「そうなのだ姉妹なのだ、真田は姉上と兄上を知っているのか」

八雲「まあ知ってるな。揚羽さんにはお世話になったし、

英雄とは一応同級生だからな」

紋白「そうであったか」

八雲「そういえば、英雄に電話したら良かったんじゃないのか？」

紋白「それが……ワレは携帯を持っていないのだ」

明久「そうなんだ。それで……でも僕も九鬼君の連絡先は知らないな」

八雲「それなら俺が知ってるからちよつと待ってて紋ちゃん」

紋白「紋ちゃんだと？」

八雲「紋白だから紋ちゃんな」

紋白「まあよいか」

俺は荷物をひとまず降ろしてある人物に電話する

プルルルル

あずみ「何だよこのボケ」

いきなり罵倒された。

あずみ「今、忙しいんだ後にしろ」

明久「あれ？この声って」

紋白「あずみの声だな」

あずみ「なっ！？そこに紋白様がいらっしやるのか？」

八雲「ああ、なんかはぐれたらしくてな。

そこを俺達が見つけたんだが、どうすればいい？

学園まで連れて行くのか？それともここで待ってたほうがいいか？」

あずみ「すぐに迎えに行くからからそこで待ってる」

プーーーーー

きりやがった。……まあいいか

八雲「紋ちゃん迎えに来るってさ」

明久「良かったね紋様」

紋白「うむ、ありがとう」

すると、

あずみ「紋白様ああ！！！」

紋白「あずみか」

するとあずみが走ってこちらにやって来た

あずみ「申し訳ありません紋白様。部下の不手際でこんな事になってしまいました」

紋白「よい、気にするでない。それに吉井と真田がワレを助けてくれた」

あずみ「お2人には感謝いたします。この礼は後ほど」

明久「い、良いよ。そんなの。それより良かったね紋様。すぐに見つかって」

紋白「うむ。この礼は九鬼の名にかけて必ず果たすのじゃ」

八雲「まあ気長に待ってるよ」

紋白「ではな、吉井に真田よ」

明久「じゃあね紋様」

八雲「じゃあな紋ちゃん。学校で会えたらまたな」

そうして紋ちゃんはずみと一緒に帰っていった。

明久「何か凄い人を助けたみたいだな」

八雲「だな。じゃあ、帰るとするか」

俺達も寮へと向けて帰っていった。

ある人物との突然の出会い（後書き）

マジ恋S体験版、DWしてやってみました。

マジで面白かったです。発売日の1月27日が楽しみです。

さっそくアニイトで予約してきました。

皆さんもぜひ体験版をプレイしてみてください。

でも前作をしてない方は前作をやってみてからのほうが面白いですよ。

皆で食事

土曜日

雄二「悪いな。俺達まで呼んでもらって」

秀吉「本当に良いのか？晩御飯に呼ばれて」

八雲「いいさ。作るのは明久だしな」

真田寮には俺達真田ファミリーのほか雄二と秀吉、ムッツリーニの3人もいる。

寮生であるクリスと黛、ゲンさんの3人はというと

クリスは久しぶりに父親と食事らしく

ゲンさんはバイト、黛さんは誘ったけど……………

ということですが今回はこのメンバーで食事ということになった

雄二「八雲本当にありがとう誘ってくれて……………もし呼ばれてなかったら翔子に……………」

明久「……………大変なんだね雄二」

雄二「……………ああ」

八雲「まっ！今日は楽しもうぜ」

一子「で、何を食べさせてくれるの？」

明久「人数もいるから鍋にしようと思ってるんだけど……」

ガクト「俺様は肉があればなんでもいいぜ」

百代「私は食べられたらいい」

一子「アタシも」

京「私は鍋より大和が……」

大和「お気持ちだけで」

雄二「ご馳走になるわけだから明久手伝うぞ」

康太「……手伝う」

明久「え？雄二たちって料理できるの？」

雄二「まあな」

康太「……コレ位当たり前の技術」

秀吉「ワシは料理は出来ぬから他のことで手伝うのじゃ」

八雲「じゃあ俺も手伝うぜえ！味見は任せろ！」

明久「味見じゃなくて手伝ってよ」

その後は明久と雄二、康太の3人で料理の下準備をすませた。

俺と秀吉は人数分の皿とコップや飲み物などを準備した。

百代「おお！おいしそうだな」

明久「今日は鳥団子鍋にしてみたんだ」

一子「おいしそうね。早く食べたいわ」

八雲「まあ待てよワン子。じゃあまずは食べる前に皆に伝えておきたい事がある」

雄二「ん？どうしたんだ？」

八雲「まあファミリーの皆には言っておいたが、

雄二、秀吉、康太。お前ら俺達のファミリーに入らないか？」

秀吉「ファミリーとは真田たちのグループの事かのか？」

八雲「ああ、そうだけ」

雄二「いいのか？俺達が入っても？お前らは幼馴染のグループなんだろう？」

明久「それは大丈夫だよ雄二。皆賛成しているからね」

百代「お前らといたら飽きないしな。それに金にも困らないだろうしな」

大和「百姉は借りない事を前提にしようぜ」

一子「アタシもあなたたちなら歓迎よ。お菓子分けてくれるし」

八雲「お前ら姉妹は動機が不純だな」

ガクト「俺様も賛成だぜ」

京「……私も短い間だけど少しだけだけどわかったから良いよ」

俺と明久は去年から雄二たちとは仲が良かったこともあり
京も俺と明久が言いというなら良いみたいだ。

八雲「つてことで皆賛成してるんだ。だから雄二たちが良かったら
入らないか？」

雄二「……じゃあ入れさせてもらおうか。お前らといたら面白そう
だしな」

秀吉「これからよろしく頼むのじゃ」

康太「……………よろしく」

八雲「じゃあ、新しい仲間も加わった事だし乾杯と行くか！」

百代「そうだな」

八雲「じゃあ皆。じゃあ新しい仲間を加え『乾杯ッ』!!」

皆『乾杯!!!』

今日ここに新しいファミリーが加入した。

皆で食事（後書き）

雄二・秀吉・康太をファミリーに入れてみました。

あつもちろんクリスマスとまゆっちも入れますよ。

それはあとですが・・・

皆さんの感想お待ちしております

金曜集会

雄二たちが俺達ファミリーに加入してから1週間が過ぎた金曜日。

俺達は雄二たちを秘密基地？もとい真田寮にある俺達の集会場へと連れてきた。

雄二「なあ明久、ここで何をするんだ？」

明久「ここはね僕達の集会場なんだ。金曜日に集まって」

明久が雄二と秀吉、康太に金曜集会について説明する。

雄二「そういうことか」

秀吉「それは面白そうじゃの」

康太「……………コクコク」

3人は理由を聞き納得しているようだ。

明久「で、大和はどうしたの？」

明久は大和が少し不機嫌そうにしているのを見て質問すると

大和「……って事がさっきあったわけなんだぜ!？」

大和曰く今日クリスに川神の町を案内したらしいのだが
その時に大和の戦法についての議論となり衝突したみたいらしい。

ガクト「はははっ、大和がせこい手を使ってるからだ」

雄二「いや、大和は頭を使っただけだぜ！それにあれは戦略だな」

京「失礼な女だね。案内した大和に対して（怒）」

ガクト「む？ 策を用いる大和に怒りを覚エルナラ

正統派肉弾タイプの俺様ならクリス落ちル力？」

秀吉「無理じゃろつな」

京「無理無理。ああいうタイプは口ウルサイヨ」

ガクト「まあ父親も怖いしな…俺様の肉体も銃は弾けない」

百代「そういう生真面目そうなのを落とすのが面白い。

私の美少女パワーでクリスをメロメロにしたいな」

明久「美少女？ 漢パワーの間違…：…いでっ」

百代「ふふん、生意気な明久をこねくり回して遊ぶかな」

抱き寄せられたので撃退の呪文を唱える。

明久「姉さんそろそろ貸したお金返してよ」

百代「zzzz」

京「寝たフリをする気持ちは分かるけど、私の分もね」

雄二「俺の分もな」

百代「さてポップコーンでも食べるか」

京「無視した」

百代「なーんてな。しっかり金は持ってきてるさー!!」

京がお姫様抱っこされた。

百代「む、この強い気と薄い気はワン子とムツツリーニか」

京「2人きたんだ。相変わらず便利なセキュリティ」

明久「八雲もできるからセキュリティに問題はないよね」

百代「でも八雲は気は読めるがあまり強くないんだよな」

京「でも私達よりは強いよ」

明久「（まあ隠してるからなんだけどね）」

そこへ

一子「到着ー！ 飲み物買ってきたよー」

秀吉「では預かるのじゃ」

康太「……キャップ以外は揃っている」

キャップとは八雲のことだ。一応ファミリーのリーダーだからね。

ガクト「もう来るだろ。ムッツリーニは何してたんだよ？やっぱりエロイことか？」

康太「……俺はそんなことしない。そもそもエロとは……………」

雄二「出た。ムッツリーニのエロ講義」

百代「おい、誰かあれ聞いてやれ。火種のガクトいけ」

ガクト「ヤドカリオタクもいるし迷惑な存在だぜ」

明久「でもガクトも……ねえ？」

雄二「だな」

ガクト「おい！どういうことだそれは！？」

大和「ヤドカリの良さがわからないか。なら教えてやる……………」

大和もヤドカリについて語りだした。

百代「2人に増えてしまったらだろが。早く止める」

京「大和は引き受ける。例え貞操を失っても止める」

秀吉「大和の貞操が心配じゃのう」

百代「既に無かったりしてな」

ガクト「そしたら殺す」

一子「てーそう？ なんのこと？ 和菓子的一种かな？」

京「なんという無垢な存在。まぶしくて見えない」

一子「お姉様、なんの話なのー？」

京「子供はどうやって出来るか・・・そんな感じだ（ずいっ）」

京が百代の前にでて教える。

一子「おおっ！（赤面）エロチ力な会話だったんだ。
アタシそーいうの全然分からなくて・・・」

明久「ワン子はそのままでいいんだよ。京みたいに汚れちゃダメだよ」

京「それどういう意味？」

大和「それは言えるな」

京「や、大和!？」

百代「最後の1人が来たぞ」

八雲「ウィース!!」

だだだだだっ！！！！

八雲「お、駆け寄ってくるとは俺に懐いているなワン子」

一子「待っていたわよ『晩御飯』！」

八雲「あーそつちね。全員揃っているようだし始めるか。

ほれ！今日のあまり分だ。量多いぜ フフン」

俺がドンつと置いた荷物の中には

バイトでの収穫物“寿司”がごっそり入っていた。

一子「大量ね。ざるパック（下の容器が蕎麦、上が寿司）もある」

八雲「今日はかなり余ったからな。ガンガン食べ」

百代「ムツツリーニ寿司来てるぞ」

まだ康太はエロ講義をしていた

八雲「食う準備しないと欲しいのなくなっちまうぞ」

ガクト「これだけの量の寿司があれば、結構もつぜ」

雄二「だな」

明久「甘いよ雄二、ガクト。こっちには姉さんとワン子がいるんだから」

一子「アタシらガッツリ食べる心構えよ」

京「大和、はいシヨーク」

大和「ああ」

京「大和、はいタバスコ」

大和「いらんだろ」

京「いるでしょう」

秀吉「タバスコをかける意味がわからないのじゃ」

大和「醤油にタバスコ混ぜやがった……赤い、赤いよ」

八雲「それじゃ、頂きまーす」

俺の号令で皆が箸（一部、手）をのばす。

一子「あはは、美味しい美味しい タダ寿司だわ」

百代「フライドチキンも良かったが寿司もいいな」

川神姉妹は手でひょいひょい食べていた。

雄二「これは本当に良いな」

秀吉「そうじゃの。まさか寿司がタダで食べられるとはの」

康太「……かなり得した気分」

八雲「宅配寿司はそろそろ終わりだな、短期だったし」

明久「何か面白い経験できた？」

八雲「宅配先がご老人宅が多いんだ。そこで福引券もいっぱいもらっちゃったな」

明久「可愛がられてるね八雲は」

ガクト「しかしこの部屋も荷物が増えてきたな」

京「皆で色々持ち込んだから…」

明久「前は原っぱだったしね」

一子「何もあそこまで土地開発しなくても良かったのにね」

前の秘密基地は土地開発により無くなったので俺の家に上がり込みだりしてたけど、

この真田寮ができてからはここが集会場となっている。

京「懐かしい。大和は人気者の私に一目ぼれだった」

秀吉「そうなのか？」

大和「凄まじい自虐かつ、捏造だな」

ガクト「京は小さい頃病原菌扱いだったろ」

京「そうだね。ガクトには随分言われたね」

雄二「そうだったのか？」

3人に明久が説明する。

俺達は子供の頃からずっと一緒だったが中学の時京が両親の離婚により、

静岡のほうの学校へと転校してしまう事になった。

その時から大和は京と付き合っており京が心配で一緒に静岡までついて行ったのだ。

京と大和は時間を作り毎週金曜日〜週末にかけて静岡から遊びに来るようになった。

これが俺達が大切にしている“金曜集会”だ。

雄二たちも話を聞いて納得しているようだった。

やはり3人をファミリーに入れたのは間違いじゃなかったな。

百代「さつきも言ったが今日はバイト代がはいったぞお前達。

そらさつきと私に貸した分持って行け金の亡者共」

八雲「遠慮なく」

京「じゃあ私も。7千円だったね」

明久「僕も回収。はい、雄二たちも。姉さんお金をきっちり返すのはいいけど…」

ガクト「まずは借りんようにしないとな」

一子「アタシは3千円だから……誰か千円札持ってる？」

京「はい両替任せて。準備してたから」

大和「回収した。ハイこれお釣り」

百代「……おい、残り140円しかないじゃないか」

明久「そうだね」

百代「これじゃ学食でソバだって食べられないぞ。」

明久、姉が困ってるぞ。金銭面で助けてくれ」

明久「からんでこないんでよ」

雄二「あの武神からは想像できない姿だな」

百代「だいたいあのジジイがおかしいんだよ。」

花の学生に小遣いなしとか質素節約ってレベルじゃないぞ」

明久「バイトするしかないよ」

食事も終わり一段落すると

八雲「じゃあ今日の議題だが転入生のクリスの事だよ」

一子「んー？クリがどうしたの？」

八雲「俺達のグループに入れようかって議題出てたろ」

明久「今、聞いたよ！」

八雲「俺は良いと思うが皆はどうだ？」

大和「理由は？」

八雲「クリスはこの女子連中に負けず気が強いし面白いしな！」

俺、気に入ったもん。一緒に遊びてえって思った」

明久「それ、もしかして恋？」

八雲「いや、それとは全然違うな（キツパリ）！で皆はどうなんだ？」

結果から言うと

賛成が俺、百代、ガクト、明久

反対が京、大和

様子見がワン子

雄二と秀吉、康太はまだ参入して期間が短いので自分から意見を言うのを止めた。

八雲「じゃ、クリスには声を掛けるってことで。

でも空気が悪くなりそうだったら遠慮なく切るってことで」

明久「（京のために切るとか厳しい言葉言ってるね）」

その後は雑談をしながら解散となった。

川原にて

土曜日 川原

ガクト「4番ファースト、島津ーっと（打者）」

俺達ファミリーは野球をして遊んでいた。

京「ガクトか。空振りとりやすい相手かな（投手）」

ガクト「来い京。ヒョロ球を太平洋まで飛ばす」

百代「京は結構いい球投げるぞ（捕手）」

京「ライター、レフトー、よろしくねー」

大和「任せとけー（ライト）」

一子「どんな球来ても捕るよー（レフト）」

明久「ゴロでも大丈夫だよ京」
ファースト

秀吉「任せるのじゃ（セカンド）」

雄二「こっちでもいいぜ（サード）」

康太「・・・任せる。上手く処理する（ショート）」

ガクト「ゴロなんて論外！俺様はHRのみ目指す！」

八雲「3振かな（ネクストバッター）」

クリス「野球か」

八雲「まあテキトーな投手 対 打者勝負なんだけどな。

順番に打者は交代するんだ。俺達いつもこんな風に遊ぶんだ」

京「それっ、ハンサムには打てないボール！」

ガクト「マジで！？（スカッ）」

京「1ストライイク」

ガクト「マジメにやれ京」

京「断る」

大和「京——！勝負してあげて——！！」

京「了解！」

ガクト「絶対打ってやるよ フン！」

カキイーン

京「あれ、打たれた？」

ガクト「行った！これはHRだろ」

百代「甘いなガクト。快速の外野手を忘れてはいけない」

一子「はっはー！！！！ジャンピング、キャッチ！」

京「センターも兼任とはワン子さすがだね」

クリス「楽しそうだな」

八雲「そう思うならクリスも仲間に入れよ」

クリス「いいのか？」

八雲「ああ」

クリス「こんなに友達が増えるとは嬉しいな」

明久「クリス仲間に入るって」

ガクト「これからよろしくな」

百代「それじゃあ今夜は真田寮でプチ宴会だな。

川神院「肉を持ってそっち行くぞ。」

その後、新密度を深めるため一緒に風呂だ！」

その後はクリスも含め野球を楽しんだ。

ファミリー歓迎会！！

真田寮1階

大和「とうわけで、新メンバーの加入を祝して不詳わたくし直江大和が乾杯の音頭を」

明久「それは僕が育てた肉だよ！！」

一子「鍋は戦場よ！」

八雲「すき焼きかおいしそうだな」

京「ここでタバスコを・・・フフツ」

百代「京を止めるー！！」

大和「って聞けよ！！」

川原で野球を楽しんだ後、真田寮で歓迎パーティーを開いている。ガクトは何か用事があった急遽来れなくなった。可愛そうに・・・

・
ゲンさんはバイトにいつている。

あと黛さんも誘っておいた。彼女も面白そうだな。

一子「ちよつとクリ！離しなさいよこれはアタシの肉よ！」

クリス「鍋は戦場だと言ったのはお前だぞ犬」

八雲「2人が食べないなら俺が食べるぜ（ヒョイ）」

俺はワン子とクリスが肉を奪い合っているなか横からその肉を奪い取る。

一・クリ「あっ!?!」

八雲「うめえ〜!やっぱり川神院の肉はうめえな」

やはり川神院の肉はうまい!いい油がのっているな

一子「卑怯よ八雲!」

クリス「そうだぞ犬の言うとおりだ!」

明久「黛さんも食べてる?」

黛「はいつ、これ、まいうーですよね」

大和「おい京!タバスコ入れようとするな!」

京「ちっ」

雄二「あつ川神!それは俺が育てた肉だ」

百代「早いもの勝ちだ!」

康太「……………おいしい」

秀吉「しらたきがおいしいのじゃ」

黛「あれ、まいうーがスルーされ気味でしたよ松風」

松風「状況は悪くない」

大和「（またこの1年1人で何か言ってるよ）」

黛「はっ！？なんだか生暖かい視線。

やはり携帯ストラップと喋る怖いヤツと思われたのでしょうか

松風「

松風「大丈夫なんじゃねーか」

百代「ドーン！！ ははっ、なんだこの面白い生き物は」

百代が黛さんに抱きついた。

黛「わあ！？」

八雲「寮生じゃない人は初対面だっけか。1年の黛由紀江さん」

俺は皆に黛さんを紹介する。

百代「黛？じゃあまゆまゆだな！」

黛「はは、はじめまして川神先輩」

百代「おおー、よろしくなーまゆまゆー なかなか良い体しているな」

百代は後ろから黛を抱いて今は胸を揉んでいる。

黛「どどどつも」

百代「それに身体だけじゃなくて強いな」

黛「え？」

百代「ちよつと避けてみてくれ」

そついうと百代は黛の前にたち殴りかかる。

黛「っ！」

ガシイッ

黛は百代のパンチをかわして受け止めていた。

百代「うん、やっぱり強いな気に入ったぞ」

黛「いえ…私などまだまだです……」

クリス「ほう、所見で百代さんの拳を防いだのか」

一子「な…なかなかやるじゃない？」

八雲「それはそうだろうぜ、だって黛は加賀の剣聖・黛十一段の娘だからな」

黛「父上をご存知なのですか？」

八雲「それはな国に帯刀を許可されてる人物だからな」

百代「やはりか」

大和「幻の黛十一段の娘だったのか・・・また大型新人だな」

明久「どうして女子は武闘派ばかり集まるのかな」

雄二「本当に凄いな」

八雲「そっちの方が面白いじゃんか！で俺から提案が」

黛「あ、あの！失礼を承知で言いたい事があるというか」

松風「ガンバレーまゆっちー！チャンスは今しかねー」

黛「あっはい！お願いします。私も皆さんの仲間に入れてください」

黛が頭を下げてくださいました。

黛「あの、私ずっと友達がいなくて・・・できなくて・・・」

私食事作れます。掃除も自信あります。な、なんでもしますから、わ、わたしを」

八雲「ストップ！！」

黛「え？」

八雲「黛はなんか勘違いしているようだが仲間ってもんは対等なも

んだ。

土下座みたいな真似して何でもするから入れて！とかで入れるもんじゃないぜ」

黛「そう…ですよね」

八雲「だからさ普通に面白そうだから私も入れてでいいぜ」

黛「……真田先輩……お、面白そうだから私も入れてください！」

八雲「断る」

黛「はあああうっっ！？」

明久「アンタは鬼か！！」

八雲「冗談だよ冗談。仲間入れてやろうぜ」

大和「そういえばキャップは何を言おうとしたんだ？」

八雲「ああ、黛を仲間に入れようとしたんだ。でもあっちから言われてしまったがな」

明久「これからよろしくねまゆっち」

百代「まゆまゆよろしくな」

黛「あっはい！よろしくお願いします」

その後まゆっちは皆と仲良くなり女子一同でウチの温泉に入った。

その時百代がハイテンションになりすぎて女子風呂を壊してしまつた事件があつたので

女子風呂が直るまで女子は男子と交代で男子風呂に入る事になった。

翌日、鉄心さんが謝りに来たのは言うまでもない。

ファミリィ 一騒動

その次の金曜日、

俺達はクリスとまゆっちを連れて金曜集會が行われている部屋へ向かった。

同じ寮の中なのですけど………

ここには八雲以外のファミリィが揃っている。

八雲はバイト後来るそうだ。

明久「クリスにまゆっちここが僕達ファミリィの集會場所なんだ」

一子「八雲がわざわざ部屋を1つ空けてくれたのよ」

黛「ここで皆さんが集まっているんですね」

ガクト「皆が色々持ってきてるからあきねえぜ」

この部屋には皆が持ってきたゲームや漫画などが多く揃っていた。

明久「これは僕こだわりのゲームだから面白いと思うよ」

雄二「ああ、これが。明久が言うゲームに関しては面白いのが多いからな」

康太「（コクコク）」

一子「アタシも狩ゲーならできるわよ」

クリス「うーん……で？」

明久「え？」

クリス「この部屋にはどういう意味があるんだ？」

一子「ん？」

クリス「遊ぶなら自分達の部屋があるだろう。」

わざわざ寮の部屋を1つ潰してまでここに集まる意味が分からないぞ」

大和「やめておけクリス」

クリス「率直は意見だ、直江大和。これは八雲の判断が間違っている。」

八雲には少し失望したよ。

このような部屋はさつさと荷物を払って

新しい人を入れたほうがいい」

京「お前死ねよ」

クリス「っ!？」

京「よくも……よくも好き放題言ってくれたなああ!?!?!」

大和「京!やめろ!」

俺の言葉と同時に百代が飛び出そうとしていた京を押さえていた。そうしないと京は危うくクリスに飛びかかる所だった。

京「分からないだろ、お目には！！この場所が！！この部屋が！！
この空間が！どれだけっ…どれだけ大切なのか！！」

クリス「え……え？」

クリスは普段冷静な京の豹変に驚いていた。

これはクリスだけではなくまゆっちや雄二、秀吉、康太たちも驚いていた。

京「だからこんな新参者を入れるの嫌だったんだ！！」

壊すべき？よくもそんな事この部屋で言ってくれたな！

何様だと思っでやがる！」

クリス「み、京。待て、話を……」

京「さっさと出て行け！！お前なんか仲間でもな」

明久「京！！」

明久が京の言葉をさえぎったのと同時に大和が京を抱きしめる。

大和「落ち着け」

京「大和、明久……だってコイツ！この場所を、キャップを侮辱したんだ！

否定したんだ！！ゆ、許せないよ……！！」

百代「もっと強く抱いてやれ」

大和「ああ、京もついいから」

京「う……うう……ううううううう」

場が静まりかえった。

今この場には京のうめく声だけが響いている。

クリス「な……何だ。何が気に障った。自分は正しい事を言ったはずだが……」

大和「クリスはそれが正しいとまだ思うんだな」

クリス「あ、ああ」

大和「じゃあ、さよならだな。仲間にはなれなかったが学校では普通に話そうぜ」

明久「（ま、まずい。大和まで切れる）」

まゆつちや秀吉は今の状態に対応できていなかった。

康太も表情には出ていないものの動揺しているみたいだ。

雄二は今の状態を考えているみたいだ。

クリス「理由を言ってくれ！納得できない！」

クリスが周囲を見回す。

ガクト「…あー…なんつーかな、んー」

百代「私が言ってやるうか、クリ。お前うざいぞ」

クリス「え……」

百代「意味がないって言うのも全部お前の物差しだろうが、私達は理屈じゃなく、好きでここに集まっているんだ。誰に指図されようがやめる気はないぞ。八雲はそれを皆のために部屋を提供してくれたんだ」

クリス「自分は、ただ……」

明久「もうやめようよクリス。ここではクリスが悪いよ」

クリス「ワル……自分が悪だと!? 何故そうなる!?
確かに自分の物差しであるが自分以外にもこの意見のはずだ！」

明久「確かにそう考える人もいるかも知れないけどね。
なんていうかクリスって頑固すぎるよね」

クリス「何……?」

明久「この部屋のことだって理由があるからわざわざ八雲が寮の1室を僕達、仲間のために提供してくれたんだ」

クリス「仲間のために?……今ひとつ理解できない」

黛「あのっ……自分ごときが口を挟んで恐縮ですが！」

そ、その、あまり怒らないで、落ち着いて、その「

百代「おいまゆまゆ。お前もそろそろ怒るぞ」

黛「え？」

百代「1人後輩だから丁寧にしやべるのはわかるがな…いちいち私ごときが、とか言うな」

ガクト「だなお前キャップが言った事理解してねーだろ」

明久「うん、その通りだね。まゆっちは人の顔うかがい過ぎだよ」

ガクト「度が過ぎると俺様といえど不快だぜ」

黛「す、すみません、すみませんっ！！」

クリス「さつきから意味不明だ」

明久「さつきから何が意味不明なの、おバカお嬢様」

クリス「ば、馬鹿！？」

明久「クリスにとって何か大切なもの言ってみて」

クリス「親からもらった、ぬいぐるみなどが」

明久「僕はぬいぐるみの良さが分からないから

部屋にかさばってしまうから捨ててしまえば」

クリス「貴様！！！！」

クリスが凄い迫力で明久に詰め寄るが明久も負けずに睨み返す。

明久「クリスのさっきの行動のモノマネだよ。

クリスのぬいぐるみが僕達にとつてはこの部屋なんだよ。

誰が何を大事にしているかなんて人それぞれなんだよ。

それを侮辱して言い訳ないでしょ」

クリス「……！……そうか、それだけ大事な場所だったんだな……

自分の怒りと同じ気持ちだとすればさぞ先ほどの発言は腹がたつたであろう。

椎名京。皆。謝罪する。すまなかつた」

クリスはふかぶかと頭を下げた。

黛「そ、その……私もすみませんでしたっ！

そ、それでも！私は皆さんと一緒にいたいですっつ……！！」

まゆつちがきつぱりと主張した。

クリス「自分も……今のような発言はしないことを誓う。

だから、ここにいさせて欲しい」

そこへ

八雲「おっ……！……す……！……いやいやいやいや聞け聞けお前達！

俺の運たるや、まさに豪運といつてもいい領域だぜ？

ガラガラ回しまくって豪華商品GETだぜ！

ささ、寿司の残りでもつまみつつ皆で俺の偉大さを祝つてくれ！

まあ今日はネタ卵だらけだがな！

………つてあれ、なんだこの空気？ずるいぞ皆！

俺のいない間に何青春っぽい気まずい雰囲気になっているんだよー!!」

明久「お、落ち着いてよ八雲！実は……」

明久が八雲に今起きたことを話す

八雲「ふーん。なるほどねーってか、話もう全部解決してんじゃん。クリスもまゆっちも謝ったから終わりじゃね？」

大和「まあな」

八雲「ま、1回ぐらいこういうの仕方ねえわな」

百代「寛大な処置じゃないかキャップ。同意見だ」

京はまだ拗ねていたが大和に任せる事にした

八雲「とりあえず皆。今ちよつと気まずい思いをした関係を修復する意味で」

今度の連休旅行に行かねーか？」

一子「旅行!？」

ガクト「いきなり発言したなお前」

一子「いやーアタシもさつきクリに言おうと思ったケド

アタシこついう時は自重しとけてキャップに言われてるんだよね」

雄二「しっかり躰られてるな」

秀吉「それより旅行とはどういうことじゃ？」

八雲「ふふ。商店街の抽選で見事引き当てて来たのだ。

じゃーん！2泊3日箱根旅行団体招待券！！」

ガクト「な、何い！？んなもんだてたのか！」

康太「…それ何位？」

八雲「2位。ちなみに他は全部ティッシュでしょんぼり」

大和「いやいや十分な成果だろ」

八雲「だから今度の連休で皆で旅行だ。

雄二や秀吉、康太、クリスもまゆっちもいいな。つか来い」

黛「はい、是非！」

クリス「箱根温泉と言えば有名だからな。楽しみだ」

雄二「旅行が楽しみだな」

秀吉「皆で旅行とは楽しみなのじゃ」

康太「……必ず行く」

八雲「うーし、決定だな！さあもうパツと行こうぜ」

そして八雲が寿司の残り物を取り出した。

八雲「今日は量が多いから軽い寿司パーティーだな！」

ガクト「うお、ネタがタマゴだらけじゃねーか！」

大和「今日はまたなんでこんなタマゴばかり」

八雲「ネタが偏るのはよくあることだ。さー食べ」

皆は文句を言いながらも食べていく。

一子は愚痴も言わずドンドン口に放り込んで行く。

雄二「つて明久には驚いたな」

明久「え？何が？」

雄二「お前がああも発言ができるとはな」

秀吉「ワシも驚いたのじゃ」

八雲「まあ明久は大和と京がない間、俺達ファミリーのブレーキ役だったしな」

明久「大和と京がいなかったら暴走しちゃうからね。最初は本当に苦労したよ」

康太「…………それは大変そう」

雄二「それなら納得だな」

その後は皆今までより少し仲がよくなったように見えた。

番外編 川原での出会い

クリスと黛との一騒動後のある日のこと

明久「よし、パーティーグッズもしっかり買ったね」

八雲「これで今度の旅行も盛り上がるな」

俺と明久は旅行の準備もかねて買い物をしていた。

明久「じゃあ、僕はこれから雄二たちと遊ぶ予定があるからここで」

八雲「ああ、そうだな。荷物は俺が寮に運んでいるから」

明久「そう？ならお願いするね」

明久は雄二たちと遊ぶと言う事で帰っていった。

俺は今日はブラブラしていたので今回は1人で行動と言う事だ。

明久SIDE

僕は八雲と別れ家に帰っている途中、

明久「雄二たちが来るまで時間があるな」

僕は八雲と別れ家に向かって歩いていった。

明久「なら少し川原でゆつくりしようかな」

ちょうど川原近くを歩いていたので川辺近くまで降りて行き、いつも僕がくつろぐスペースに腰を下ろそうとするとそこには1人先客がいた。

明久「お隣いいですか？」

???「んー? いいーよ」

明久「じゃあお邪魔して」

明久は先客の女性の近くいき寝転がった。

明久「風が気持ちいい」

丁度寝転がった時風がまった

???「きみー。よくここにくるのー?」

明久「そうだね。ここにはよく来るかな。ここ涼しいし風が気持ちいいからね」

???「そうだねー」

隣にいたお姉さんも僕と同じように横に寝転がっていた。

明久「あつ僕は吉井明久っていうんだ?お姉さんは?」

辰子「わたしはねー辰子っていうんだよー」

明久「辰子さんか、辰子さんもよくここに来るの?」

辰子「うんーよく来るよー」

明久「そうなんだ」

僕は辰子さんと他愛もない会話をして時間を潰した。

明久「そろそろ僕は行こうかな。」

「じゃあね辰子さん。また会えるかもね」

辰子「そうだねーバイバイ明久君」

明久「バイバイ辰子さん」

僕は辰子さんにお別れを言うと家に戻っていった。

その後は雄二たちとゲームをして遊んだ。

番外編 川原での出会い（後書き）

今回辰子が無理やり登場させてみました。

少し文章が短くなってしまいました

番外編 町での出会い

俺は明久と別れたのは良いものの明久から荷物を預かっている状態なので、

いい感じに荷物が邪魔だな。

・・・・・・なら

ピイイイイイイイイイイ！！！！！！

俺は犬笛を吹いた。

一子「何？キャップ？」

八雲「悪いんだけど今から昼飯おごるからこの荷物俺の部屋まで運んでくれないか？」

一子「飯！？・・・しょうがないわね。やってあげるわ」

八雲「さすがワン子」

俺とワン子は近くのレストランに入り食事をおごってから近くをぶらつく事にした。

ワン子はステーキを食った後言われたとおり荷物を持って寮まで走っていった。

俺はワン子と別れた後商店街をふらついていると

????「うーん？困ったね」

なにやら困ってそんな女性の姿が目に入った。

何か困ってそうだし助けるとするかな。

俺はその女性に近づき声をかけた。

八雲「どうしたんですか？何かお困りのようですけど？」

???「え？あーちよつと道に迷っちゃってねー」

八雲「そうなんですか？俺でよければ道案内しますよ」

???「え？そう。……ならお願いしようかな」

女性はおそらく俺より年上な気がする。

しかもかなりの美少女だな。

八雲「ドコに行きたいんですか？」

???「えつとね2つあるんだけどいいかな？」

八雲「いいですよ。お姉さんはここには観光できたんですか？」

???「ちよつと違うなー。私はね今度この町に引越してくる予定なんだよ。

それでね下見もかねて来たはいいんだけど道に迷ってね」

八雲「そうなんすか？じゃあこれから同じ町民になるわけっすね」

???「そういうことだね。で、まずはこの場所なんだけど」

女性が指差した地図の場所は

「???」「確か文月学園って言ったかな？まずはここに行きたいんだけどわかる？」

八雲「わかりますよ。だって俺ここの生徒ですし」

俺は女性を連れて学園へと向かう。

「???」「そうなんだ！なら同じ学園の生徒になるって訳だね！」

八雲「そうですね。ちなみに俺は2年っす」

「???」「残念ー私は3年なんだ」

八雲「そうなんすか。それは残念ですね。でもこの時期に転校って珍しいですね」

「???」「おとんの仕事の都合でね」

八雲「それは大変ですね」

「???」「そうなんだよ」

俺と女性は他愛もない会話をしながら学園へと向かっていった。学園には鉄人がいたので自分は女性の用が終わるまで学園内をふらついて時間を潰した。

「???」「ごめんね。待たせたね」

八雲「いいですよ全然。次はドコを案内したらいいですか？」

????「えつとね次は商店街に連れて行って欲しいかな」

八雲「商店街ですか。分かりました」

今度は女性を商店街へと連れて行き、商店街の中を案内した。

????「今日はありがとうね。親切にしてくれて」

八雲「別にいいですよ。これから同じ学園のしかも先輩になるわけですし。」

あつそつだまだ自己紹介していなかったですね。

俺は2・Fの真田八雲って言います！これからよろしくお願
いしますね先輩」

松永「そつだね。私は今度、文月学園3年に転入する松永燕だよ。

これからよろしくねー八雲君！

あつそつだ！これお近づきの印だよ！」

松永先輩がそついうと何かをポシヨットから取り出し俺に渡してき
た。

松永「自家製の納豆だよ！味は保障するよ」

俺は先輩から納豆を3パックもらった。（1パック3個いり）

八雲「ありがとうございませす松永先輩」

松永「気に入ったら私に言ってねあげるから。

「じゃあ今日はありがとうね。またね」

そついうと松永先輩は駅のほうに向かって走っていった。

会った時から思っていたが先輩かなり強いな………

俺は納豆を待ちながら寮へと帰っていった。

くまさかの友情く（前書き）

今話でついに50話突破です。
皆様の応援のおかげです。

これからも応援よろしくお願いします。

くまさかの友情

ゴールデンウィーク真っ盛りな朝。

今日は昼からファミリー総出で箱根だ。

大和「・・・にしても、皆もう起きてる。早いなあ」

クリス「今日は旅行なんだぞ直江大和。たるんでいるな」

秀吉「そうじゃぞ大和よ。皆との旅行なんじゃから楽しみなのじゃ」

康太「(コクン)」

明久と雄二と秀吉と康太の4人は前日からこの真田寮に泊り込んでいる。

秀吉を除く3人は明久用に貸した部屋でとまり秀吉は俺の部屋に泊まった。

最初は4人まとめて明久の部屋にしようとしたが、康太が秀吉と一緒に部屋だと言っただけで興奮して部屋を血で染めそうにしていたので俺の部屋に泊めた。

もちろん川神姉妹も貸している部屋で泊まっていた。

え？ガクトはって？あいつは家がすぐ近くだから自分の部屋だろ。

一子「まだ時間があるからアタシは少しランニングしてくるね」

八雲「ならワン子、俺も一緒に付き合っぞ」

一子「ならキャップ、川原まで競争よ！」

ワン子はそういつと玄関を飛び出して走っていった。

八雲「面白い、乗った！」

俺は風だ！風は誰にも止められねえ！」

そのあとを八雲が追いかけていった。

クリス「自分も1日のノルマであるトレーニングを行うか」

クリスも庭に出て日課のトレーニングを始めた。

明久「皆、おはよう。あれ？八雲やワン子やクリスは？」

雄二「八雲と一子はランニング、クリスはトレーニングだ」

秀吉「そういえば八雲は道場の師範代じゃったのう」

大和「まあな。いつも自由気ままに行動しているからな」

明久「でも1日1回は必ず道場には顔を出しているよ」

そのあとは各自時間まで自由に過ごしていた。

明久とまゆっち、京、康太、雄二の5人が昼の弁当の支度を、

大和は京の監視をしている（劇物阻止のため）

八雲とワン子、百代、クリス、ガクトの5人は各自でトレーニング中、

秀吉は八雲に頼まれパーティグッズの確認作業をしていた。

ここ川神の町から箱根湯本までは電車で約2時間弱。

川神駅から“特急踊り子”に乗れば1本だ。

俺達全員会わせて12人なので

特急電車は4人座席がデフォなのでちょうど収まる形になった。

ちなみに席は

明久 百代一 一秀吉 雄二

一子 八雲一 一康太 岳人

クリス 黛 一

大和 京 一

と言う感じになっている。

ガクト「まゆつち。そろそろ腹が減った。弁当持ってきてるんだろ？」

黛「！ はい！おにぎりです！！」

ガクト「いや顔こえーから！緊張すんなって」

まゆつちは多少は俺達と一緒にいることがなれたけど表情がまだ硬かった。

黛「あう……す、すみません意識しちゃって」

雄二「ガクトなんて意識するだけ無駄だぞ」

明久「そくだよまゆっち。ゴリラ相手に緊張するなんて無駄な事だよ」

ガクト「おいどういことだお前ら」

雄二「事実を口にしただけだ」

一子「うーん、ウズウズしてきたわねえ。列車内を走り回ったらやっぱりダメ？」

京「うんダメ。やったらこれからあだ名はスパッツマン」

一子「うわあああ、そんな変態みたいなのいやあああ」

ガクト「ほれへやまほ、はこねにいったは……」

秀吉「食べ物飲み込んでからしゃべるのじゃ」

クリス「そくだぞ木下秀吉の言うとおりだぞ」

大和「こういう食べ方も江戸では許されるんだぜ」

クリス「さすが日本だなー」

秀吉「いや、嘘じゃからの……」

ガクト「で、大和。箱根に行ってどーすんのかっつー話」

大和「打ち合わせどおりだろ。1日目チケット」。

2日目は大自然で釣りとか。3日目は名所観光」

明久「細かく決めてもその通りに動く皆じゃないし」

京「集団行動の和を乱すのはいけないよね」

大和「お前が言うな」

箱根湯本。旅館は山の上なので本来バスだが。

一子「アタシは走って旅館までいきまーす」

康太「山道、車で30分。旅館まで結構距離がある」

百代「今日のノルマは昼までに十分こなしたる私達は」

一子「まだまだ。駆けて駆けて駆けまくるのよ！

勝負よクリ！どっちが旅館まで先に着けるか」

クリス「面白い。自分もノルマはこなしたがそこまで鍛錬に精を出すなら付き合おう」

百代「頑張れ。荷物は任せろ。バスのやつは乗り込めー！」

八雲「明久荷物頼む。俺はあいつらと行くよ。色々心配だし」

明久「うん、お願いね。僕じゃあの2人にはついていけないから」

八雲「了解」

結局、八雲とワン子とクリスだけが駆ける事に。

明久たちがバスで先に旅館に向かうと、
綺麗な宿だと思っただら……霧島財閥傘下の旅館だった。

雄二「げえ翔子！？なんでここに!？」

しかもなぜか霧島さんもいた。

翔子「…雄二。待ってた」

大和「待ってた？ってことは俺達が来るのを知っていたのか？」

雄二「何故だ!?俺は話していないぞ」

京「あつ私が話した」

大和「京がか!？」

京「うん。話してみたら気があつて」

なぜか京と翔子は気が合う仲になっていた。

きっかけは翔子が京に雄二をどうしたら捕まえておいていられるか聞いたのが始まりらしい。

翔子「…椎名にはいつもお世話になってる」

京「ギブアンドテイクだよ」

明久「何か京がからむと恐ろしく聞こえるよ。…雄二ご愁傷様」

愛子「あれ？ムツツリーニ君たちだ。君達も遊びに来たの？」

すると奥からAクラスの工藤愛子と木下優子の2人が姿を現した。

康太「…工藤愛子」

秀吉「姉上！？なぜ姉上がここに？」

優子「代表に誘われたのよ」

ガクト「本当に似ているな」

黛「そっくりです」

松風「ぱねえ程似ているよ」

優子「なにあれ？」

秀吉「…色々あるのじゃ」

優子「そっいえば真田君は？」

明久「八雲なら駅からワン子たちと走ってきてるよ」

秀吉「もうそろそろついてもよさそうな時間じゃな」

大和「…あつ来た！ 走ってきやがった」

八雲「俺は負けねえ！！」

八雲がワン子やクリスたちより先に旅館の前にたどり着いた。

一子「さすがキャップね。アタシもまだまだわ」

クリス「八雲がここまでやるとは、次は負けん！！！！」

大和「思ってたより早かったな。ワン子のことだから公道じゃなく山道に行くかと思ったが」

一子「アタシはそうしようかと思ったけどキャップが…」

八雲「皆を待たせるのは悪いからな。」

つてアレ？どうして霧島たちがここにいるんだ？」

明久「実は…」

明久が八雲たちに事情説明中。

八雲「へえ〜京にそんな友達ができるなんてな。良かったな大和」

大和「まあ友達が出来る事はいいんだが…」

雄二「考えている事が恐ろしいんだ…」

八雲「ならせつかくだし一緒に行動するか」

雄二「おい、俺達の話聞いてたか!？」

八雲「まあいいじゃないか?で皆どうだ?」

百代「かわいいから問題なし」

ガクト「同じく」

一子「アタシもいいわよ」

黛「私もかまいません」

クリス「いいんじゃないか」

秀吉「ワシも良いぞ」

康太「いい写真が撮れそう」

京「翔子なら全然かまわない」

明久「僕も全然いいよ」

八雲「そつちは?」

翔子「私は大丈夫」

愛子「僕もOKだよ」

優子「アタシも代表たちがいいならいいわよ」

八雲「じゃ、そういうことだ。皆楽しもうぜ」

とういことで急遽ファミリーだけでなく

霧島たちを含めたメンバーで旅行を楽しむことになった

く覗き！??）（前書き）

今回はシモネタがあるので苦手な方はバックしてください。

それでも良い方は楽しんでいってください。

く覗き!??

夕食後。至福の温泉タイム。

まさに、覗きが決行されようとしていた。

京「では、男湯を覗きます」

ただし、女湯で。

優子「なんでこんな事になってるのよ！」

翔子「……………夫の状態を観察」

京「そういうこと」

一子「やめときなさいよ。ってか大和以外の男が見えたらどうするの京的に」

京「しまった。その可能性を考慮していなかった」

翔子「・・・失敗」

京「では聞き耳をたてるぐらいで…京イヤーは地獄耳」

翔子「それなら私も…」

優子「代表まで」

愛子「面白そうだから僕も」

優子「愛子まで!？」

一子「アタシは知らないわよ。どうなっても」

優子「どういふこと川神さん？」

一子「一子でいいわよ。だってあっちには」

一方、男湯では

明久「ふう…いい湯だね。温泉はいいね」

雄二「ああ。たまにはこういうのもいいな」

秀吉「真田寮は温泉じゃから羨ましいのじゃ」

八雲「でも露天風呂がいいんだよな」

大和「そうだな」

八雲「ん？お前ら少し耳を塞げ」

明久「え？分かったよ」

皆は俺が言ったように耳を塞いだ。

八雲「真田流『円鳴衝』」

俺は素早く拳を大地にを何度かたたきつけた。

八雲「もういいぞ」

雄二「なにをしたんだ？」

八雲「ちよつと聞き耳立ててるヤツにオシオキをしたただけだ」

皆「？」

円鳴衝は大地や水面に拳を高速で叩きつけて

その時に出る衝撃波で相手の聴覚を狂わす技だ。

まあ加減したから耳が少し痛いだけですむけどな。

それに耳を塞げば防げる。

再び女子風呂

翔子「・・・耳が痛い」

愛子「今の何？」

京「あつちには八雲がいるのを忘れてた」

一子「だから言ったのに」

優子「そういうことね」

聞き耳を立てていた3人に罰が下った。

またまた男子風呂

ガクト「見る貴様ら！俺様の肉体美！！」

明久「少しは隠そうよ！グロいんだよガクトのは！」

大和「まだ未発射みたいだがな」

ガクト「うるせえよ！！」

康太「写すカチがない」

明久「ムツツリー二のは女性専門だもんね」

康太「（フルフル）」

八雲「つて秀吉と康太はタオルで体隠すなよ。男同士なんだから隠す必要ないだろ」

大和「キャップとガクトは堂々としすぎだろ」

秀吉と康太はタオルで体を隠しての入浴。

八雲とガクトはマッパで、タオルは肩にかけている。

今、康太が秀吉に反応しないのは

周りの女子のスペックがいいので秀吉のことにあまり気が言っていない為だ。

雄二「ガクトはバズーカで八雲のはマシンガンか」

明久「連射には定評がありそうだね」

大和「ガクトのは暴発しそうだな」

ガクト「そういうテメエラのはどうなんだよ」

大和「俺のはマグナムだな。重い1撃をズドンと」

雄二「俺も同じだな」

明久「僕のはノーマルかな」

康太「…下品」

八雲「なあ康太。お前もタオル外せよ。ムッツリの名が泣くぞ」

康太「そんな名はない」

八雲「秀吉もだぞ」

ガクト「案外2人共皮のホルスターに入ってたりにしてな」

秀吉「……………ワシだって好きでそうなってるわけじゃ……………」

康太「そんな事実は認められない!!!（フルフルフル）」

明久「ん？つまりそれって……………」

大和「遠まわしに考えてあげろよ。それが優しさだ」

明久「そうだね」

八雲「むけていないのか」

秀吉「うわああああ!!!」

康太「（フルフルフルフルフル）!!!!!!」

2人は恥ずかしくてお湯にもぐった。

雄二「それ遠まわしじゃなく最短距離だろ」

八雲「頭を撫でるように優しく言ったのに」

ガクト「言葉のチョイスが殺しにいつてるとしか思えねー」

八雲「そういえば2人のまだ見てないなー。俺に見せてみ？」

秀吉「何故そういう展開になるのじゃー!!」

結局2人はタオルを外す事はなかった。

別に男同士なんだからいいだろ。

ガクト「そういえばあっちは女子風呂か」

八雲「そうだな」

ガクト「大和。俺様は明日覗きをしたいぞ!」

康太「(クワツ)!!」

大和「やめるよ。そんなではしゃぐのはお子様だぜ。

…なんていうのは素人だ!覗きたいなら覗け!」

ガクト「お前のその柔軟な考え方、俺様好きだぜ」

康太も大和に向かって親指を立てていた。

雄二「おい、いいのか」

大和「それに覗くっていつても百姉たちじゃないんだろ?」

ガクト「無理無理。百姉に察知されて終わる。」

山の下のほうにも旅館があつて、頑張ればその女湯見れるかもしれない」

康太「…調べたら明日女子大学生がくるらしい」

ガクト「さすがムツツリー」

最後は邪念たつぷりの1日目だった。

〜2日目、皆で釣りだ！〜

旅行2日目

爽やかな天気だった。

女性陣が着替えている間、男性陣はロビーで遊ぶ。

そこへ

一子「男衆ー！お待たせー！さあ行きまっしょい！」

そこへファミリーの女性陣と昨日着ていた霧島たちがやってきた。

大和「釣りの手続きはしておいた。竿も借りたぞ」

京「本当だ、立派な竿だね。触ってもいい？」

大和「この俺が手に持っている釣竿なら触っていい」

京「チッ」

翔子「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雄二「翔子、同じ事考えるなよ」

翔子「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

雄二「なんか間があつたが・・・・・・・・まあいいか」

黛「皆で釣りなんて…………素敵です」

百代「一応確認しておくけど釣るのって魚？女？」

明久「一応つつこんでおくけど魚だよ」

皆、ウキウキしているようだ。

話しながら山の中へ。

百代「こちらへんでいいだろう。ナイス景色だなあ」

優子「本当ね。たまにはこういうのもいいわね」

愛子「代表と一緒に来てよかったよ」

八雲「よし盛大に釣ってやろうぜ！ひゃっほう！」

クリス「おい、エサをつけないと」

八雲「現地調達でいいんだよ。岩の下には虫がいる！

で、この虫を針につけて釣り開始。

そしてヒット！！いきなりヤマメだぜ！」

明久「全力で満喫してるねー、まるで野生児だよ」

京「次回“アキ覚醒僕だって釣ってやる”にご期待ください」

明久「そこで期待されても視聴率とれる自信ないよ」

優子「ねえ真田君。隣いいかしら？」

アタシ釣りって初めてだから教えて欲しいのだけど」

八雲「ん？いいぜ。まずは針に虫を」

俺は優子に釣りを教えながら魚をつる。

ガクト「見てろ、俺様がカツコイイ見本示してやる」

明久「あ、まだオチには早いよ」

ガクト「オチねえよ！」

京「ガクトが落とさないよと次のシーンに移れないよ？」

雄二「そつだぞ京の言う通りだぞ」

ガクト「言ってる。いつもワイルドな俺様に惚れんな」

ガクトは釣り中の百代の隣に陣取った。

ガクト「俺様の釣りテクが素晴らしかったら結婚を前提に付き合ってくれモモ姉！」

百代「ほー。動物的面白い求婚だ。見せてもらおうか」

ガクト「うっしや。今から釣りゲーになるぜ」

ガクトは意気揚々と釣り糸を投げ込んだ。

それは百代の糸と絡まってしまった。

百代「邪魔だ！！もっと遠くで釣れ！！」

ガクト「はぐううううう！！！！」

百代が邪魔なガクトを殴り飛ばす。

ただ殴り飛ばした方向が

優子「え？きゃっ」

俺と優子がいる方向だった。

八雲「よっと」

俺はすぐさま優子の前に立ち、ガクトを百代のほうに蹴り飛ばす。

ガクト「いってえええええ！！！！」

八雲「おい、百代危ないだろうが！！」

百代「すまない！！」

八雲「こつちじゃなくあつちに飛ばせよ」

百代「そうする」

俺がそういつと百代のほうに飛んでいったガクトを今度は誰もいない方へ殴り飛ばした。

百代「わるかったな」

優子「い、いえ」

秀吉「見事に吹っ飛ばされたのじゃ」

明久「見事にオチつけたね」

康太「…それがガクト」

一子「アタシは釣りの前に修行しよつと！」

百代「ま、時間もたんまりあるしそれでいいだろ。

弟、私の分も釣れ。3匹以上釣っていないと私刑な」

明久「厳しい法律だね」

百代「京格闘修行だ。妹と一緒に稽古つけてやる」

京「謝々」

大和「最近素手も鍛えるね京」

京「大和を荒波から超守るためです」

大和「荒波なぞ自分で乗り越えてみせる」

京「ならば大和の盾になる」

大和「お前が盾になる状況に持って行かせない」

京「かつこいいいな大和は」

大和「一応、京の彼氏だからな」

百代「いちゃつく前に鍛錬するぞ。来い京」

一子「今日も地道に鍛えて着実に強くなるのよ！」

川神姉妹により京が連れて行かれた。

クリス「秀吉悪いな」

秀吉「これくらいお安い御用なのじゃ」

秀吉がクリスの分のエサを針につけていた。

向こうでは明久がまゆっちの代わりにエサをつけてあげていた。

雄二は翔子と釣りを楽しんでいるようだ。

康太は愛子と何か雑談をしながら釣りをやっていた。

八雲は優子と大和と一緒に釣りをしてのんびりすごしていた。

ちなみに八雲だけは魚を10匹以上釣っていたが……

く不穏な気配!??)

しばらくして、百代が帰ってきた。

明久「アレ？ワン子と京は？」

百代「組み手に入った。あれは好きにやらせるさ」

大和「京がどんどん強くなっていくなあ…」

八雲「大和そのうち京に襲われるんじゃないか？」

大和「それはないと信じたい」

百代「じゃあ私は弟でも襲おうかな」

明久「返り討ちにして逆に姉さんを泣かせてあげるよ」

明久は言った瞬間、思いつきりその場から駆け出した。

百代「んーそういう負けず嫌いのところ好きだぞ。

30秒待ってやるー！逃げる逃げるー！」

黛「な、なにやら狩りが始まりそうな雰囲気ですが？」

大和「いいんだよ、姉弟のコミュニケーションだから」

優子「随分とまた過激なコミュニケーションね」

クリス「本当だな」

雄二「頑張れよー明久!!!」

愛子「一緒にいて飽きないね」

康太「命がけ」

秀吉「アレを見るとワシら姉弟のコミュニケーションなど軽いほう
じゃな（ボソツ）」

八雲「ん？何か言ったか秀吉？」

秀吉「何も言っていないのじゃ」

百代が30秒数え明久を追いかけに行つた。

.....

明久&百代SIDE

百代「お、なんだ弟。もう逃げるのあきらめたのか。つーかまーえ
ーた」

姉さんにガシッと抱きしめられた。
甘い芳香と、しなやかな体に包まれる。

百代「さてさてどう可愛がってくれようか。んー？」

普段ならこの後、いじめコンボにつながるが…

百代「姿は見えないが私達以外にも人が多くいるな」

姉さんが抱きつきながら、耳元でささやく。

明久「やっぱり？今、森の奥に人影が見えたんだよ。

それになにかやばそうな気がしたからこれ以上奥に行くのはやめたんだ」

百代「賢明だな（頭などで）相手は一般人じゃないな。

人数もたくさん潜んでるな。30人はいる」

明久「なんだかいきなり不気味な展開だね？

八雲もこの状況に気づいたようだしね」

向こうを見ると八雲が動きを見せていた。

百代「あっちは八雲たちがいるから大丈夫だろ。

面白くなってきたじゃないか」

何やら不穏な事態なのに、緊張感がなかった。

それは姉さんがあまりに圧倒的で強すぎるからだろう。

百代「お前はそこで待っているよ」

明久「僕も姉さんについて行くよ。」

僕は姉さんのストッパーだからね」

百代「ならあまり離れるなよ」

明久と百代の2人は森の奥に入って行った。

八雲たちSIDE

雄二「おっ明久が川神に捕まったな」

秀吉「頑張っておったのじゃがの」

八雲「もう少し鍛錬が　ん？」

大和「どうした？険しい表情をして」

八雲「雄二！皆を川辺に集合させる。ガクト！お前は皆の前に立て
！」

雄二「どうしたんだ？いきなり」

八雲「森の奥から不穏な気配を感じた」

雄二「何だと！？」

八雲「百代と明久もそれに気づいたらしい」

大和「それでか」

八雲「ガクトとまゆっち、クリスがいるからなおそらく大丈夫だろうから」

大和たちはワン子と京たちと合流してくれ」

大和「わかった」

優子「真田君はどうするの？」

八雲「森の中に向かう。百代と明久も中に入ったみたいだしな」

優子「あ、危ないわよ」

愛子「そっだよ危険すぎるよ」

康太「危険」

雄二「ここは川神に任せたほうがいいんじゃないか」

八雲「大丈夫だ。じゃあ行ってくる」

そういうと八雲は森の中へと駆け出していった。

秀吉「大丈夫じゃろうか八雲は？」

大和「あーそれは大丈夫だろうな」

ガクト「だな。くやしーがあいつは強いからな」

雄二「八雲って強いのか!？」

大和「ああ、大和はファミリー内では2番目に強いぜ」

康太「2番目!？」

優子「そんなに彼って強い!？」

大和「一応道場の次期当主だからな」

雄二たちは驚きながら森に向かっていく八雲の背中を見ていた。

「挑戦者!?!」

一子&京SIDE

一子と京は皆から離れた森の中で組み手をしていた。

京「せいっ」

一子「あぶな!やるわね今の蹴りは鋭かったわ!」

京「武器がなくてもある程度はやれないとね」

一子「大和のためか。さすが京ね。でもアタシだって進化してるわ!」

2人がやや一子優勢で攻防を繰り広げていく。

が、同じタイミングで攻撃を中止する。

自分達の組み手を見ている第3者の存在に気づいたからだ。

女軍人「お見事です、サムライガール」

外国人だった。長身に迷彩服姿が決まっている。眼帯が威圧的に感じた。

京「? こんなところに人が……」

女軍人「ほればれするような動きでしたね2人とも」

一子「ちょ、日本語よ！外国人が日本語しゃべったわ」

京「や、クリスだってそうでしょうが」

一子「あ、そつか。あははは」

女軍人「私も武術に心得があります。貴方達のお稽古に私も混ぜなさい」

京「（いきなり何を言ってるんだ）」

一子「へえ、言わば国際試合。なんだか面白いじゃない。

やりましようか！実践訓練大歓迎！」

女軍人「いい返事です。それでは構えなさい」

京「ちよつとそんな安請け合いして…」

一子「！来るわよ！」

京と一子が反射的に飛び退く。

今まで2人がいた地点に外国人女性の鋭い飛び蹴りが放たれていた。

一子「京……この外国人！相当鍛錬積んでる！」

京「うん。強い…展開の速さに戸惑っていたらやられるね」

瞬時に相手のおおよその力量を把握する2人。

女軍人「2対1でいいでしょう。かかってきなさい」

一子「川神院、川神一子行くわよ！」

一子は天真爛漫に相手に襲い掛かる。

一子「せいせいせいせいせい！！！」

気合の入った拳と蹴りの連撃に外国人はじりじり後退していく。

女軍人「なかなかの動き認めてあげても良いでしょう」

一子「まだまだあ！」

一子の連撃は速度を増して繰り返されていく。

女軍人「が、私から見ればまだまだ。野ウサギに等しい」

防戦一方だった相手が反撃に転じてきた。

稲妻が落ちるような蹴りを一子は回避する。

女軍人「ハッ！」

即座に敵が蹴りの連撃を繰り返し攻守が逆転した。

一子「っ……重いっ。ガードの上から削られる！」

一子の攻撃より遅いが威力が段違いだった。

ラッシュを防ぎきって、一子は間合いを取り直す。
と、同時に今度は京が相手に向かっていった。

一子「っく」。腕がしびれるわあ……でも燃えてきたー！」

一子がガードで痺れた腕を回復している間に、京と外国人の戦いが始まっていた。

だが、京は一子ほど上手く攻撃をさばき切れず後退していく。

京「やるなあ……」

女軍人「私への贅辞はもつと声高らかに言いなさい」

一子「京、これ稽古といわず真剣マクで行くわよ」

京「ん。本気出す」

まず一子が相手に突進して行った」

女軍人「そうだ！可能性をすてちゃいけない」

一子は思い切り体勢を低くする。

一子「蛇屠り！」

相手の足下を刈り取るような一撃。

女軍人「おっと危ない、このまま踏み潰して……」

足下への一撃を跳ねて回避した相手は
そのまま空中からしゃがみ状態の一子に蹴りを加えようとした。

一子「鳥落とし！」

俗に言う、サマーソルトキックが相手を襲った。

女軍人「対空！？あの体勢から馬鹿な、かはあっ！」

蹴ったのではなく斬った。

そう形容するに相応しい鋭いサマーソルトが相手の体に直撃していた。

女軍人「馬鹿な…！この私が嘘だ！」

体勢を崩しながら着地する相手。

京「次は私！」

京が、着地の隙を見逃さずに襲い掛かる。

女軍人「チィ！」

相手が迫り来る京の顔面に牽制で放った突き。

京「もらった！」

その突きを京の腕が弧を描くように打ち上げる。
それに向かって突き出された形となった相手の腕。

その腕を掴むと京は体を回転させて相手の懐に潜り込んだ。

女軍人「な　　!？」

全ては相手がそう思った一瞬の出来事だった。

京「せやっ！」

京の背負い投げが綺麗に入っている。

人体が地面に叩きつけられる豪快な音が響いた。

一子「ワオ!やるわね京、竜巻みたいな背負いよ」

京「ワン子もナイス連携。飛ばせて落とす」

イエイト、手を叩き合う仲良し2人組。

く挑戦者の反撃く

女軍人「……………」

京に投げられた相手がムクリと立ち上がる。

一子「あれ？まだやるわけ。勝負ついたじゃん」

女軍人「……ハーゼンHasen【野ウサギ達め】」

ドイツ語です。【】は日本語吹き替えです。

女軍人「ヤークツJagd【狩ってやる】」

京「……？雰囲気か」

京が違和感を覚えたのと同時に敵は突進してきた。

2人は冷静に左右へと展開し敵を挟む。

京「頭に血が上っているなら」

一子「これで眠りなよ！」

今度は2人同時に容赦なく蹴りを繰り出した。

それを敵は左右の手で同時に受け止めてみせる。

一子「この手応えは……木？」

相手はいつの間にか武具を装備し蹴りをガードしていた。

その2本1組の武具こそは

京「トンファーか！」

敵はトンファーを自らの手のように自在に操り、まず京に狙いを定めた。

女軍人「H a s e n J a g g d ! ! !」

武器を器用に回転させながら一撃が、防御した京をガードごと吹き飛ばす。

一子「京！」

京「っ、大丈夫！」

京をかばうように一子は敵の懐に飛び込んでいく。相当痛かったが、回転攻撃は見た目ほど怖くない。それより突きの方が危険そうだと京は判断した。

女軍人「ハアツ!!!」

一子が暴風のような攻撃をかわしていく。

一子「ち、このトンファーの乱撃、スキが無……」

女軍人「トンファーキック！」

一子「ぐっ!？」

一子はガラ空きの腹部を蹴り飛ばされた。

一子「…く…はっ、…今のはきいた〜」

振り回すトンファーにばかり気をとられ、蹴りの注意をおこたっていた。

女軍人「ハハハ! Hasen! Jagd!!!」

一子「けほっ、こりゃ死合いね…武器が無いのが痛いわ」

京「このテのは遠距離から射るに限るんだけど……」

弓矢が無い上に、素手では危険な相手。

一子はいい蹴りをもらいつつも、闘志たっぷりだ。
とはいえ、彼女も武器がないとやはりきつい。

〈挑戦者の反撃〉（後書き）

女軍人がきれてワン子と京がピンチになりました。

さて次回はどうなるのかお楽しみに

〜マル〜

京「（…しょーもない…誰にも知られてないけど…）」

京は“切り札”を、服の中から出そうとした。

女軍人「Hasen……」

百代「何してるんだお前。私の可愛い仲間と妹に対して」

女軍人「！？私の後ろをとるとは…！」

百代「闘気を感じて来てみれば面白い展開になっているな」

明久「本当だ。こっちにも軍人がいるよ。ワン子、京大丈夫？」

京「モモ姉、明久」

女軍人「モモ…！？そうか最強と名高い川神百代だな」

百代「勝負中か？襲われているのか？後者なら譲れ」

姉さんが心底嬉しそうに拳をバキバキと鳴らす。

クリス「何の騒ぎだ？…あ」

そこへ雄二やクリスたちがやってきた。

女軍人「クリスお嬢様」

クリス「マルさん」

百代「おいおい、殺気をおさめるのか」

一子「え？クリ知り合いなの」

クリス父「何やらややこしい事になっているな」

クリス「父様！」

クリス父「クリス、我が娘。今日も美しい……」

紹介しよう。私の部下のマルギッテ少尉だ」

マルギッテ「マルギッテ・エーデルバツハです。覚えてなさい」

クリス父「部下が失礼を働いたようだ」

京「失礼というレベルじゃなかったけどね」

クリス父「自尊心が高く、とても優秀な人材だ。

近接戦闘に長けている分、君たちのような

手練れを見ると勝負をふっかけるクセがある。

その若さゆえの無鉄砲さが私は嫌いではない」

京「それで襲われたほうはたまらないけど、もういいや……めんど
い」

一子「アタシはよくないわよ。やいマル！」

マルギツテ「野ウサギが私を呼び捨てに!？」

一子「今度はお互い武器ありで勝負よ！」

マルギツテ「人を指すのはやめなさい。マルもやめなさい」

クリス父「悪いがクリスと話をさせてくれサムライガール」

クリス「父様。何故このような場所に？」

クリス父「理由は1つに決まっているだろう」

クリス「と言いますと？」

クリス父「お前から連絡が来たからだ、友達同士でなんと

泊まりがけの旅行に行くというではないか……！」

そんな電話を聞いては、父親としてもたってもいられない。

心配でかけつけたのだ」

クリス「それで…わざわざ。父様。自分は幸せ者です」

ガクト「オイおっさん、そんなに俺様達が信用なら無いか？」

クリス父「信用とかそういう問題ではない。

旅行と聞いてただ心配だっただけだ。

とはいえ、私も子煩悩のバカ軍人ではない。

せいぜい部下30人を率いて様子を見に来た程度だ」

秀吉「十分にもほどがあると思うのじゃ」

優子「それ以前に軍って何よ？」

クリス父「楽しそうでした、愛しき娘よ」

クリス「はい」

百代「……やれやれ、聞いてられないな」

大和「娘が大好きな父親か。彼氏が出来たらそいつは苦労しそうだ
な」

クリス父「愛しき娘に彼氏が！？ふざけるなあ！！！！！！」

クリスの父親は頭をブンブン振って銃を取り出す。

クリス父「不穏当な発言はやめてもらおう少年。

私が穏和でなかったら発砲していたぞ」

大和「それは、温和でよかったです、ええ。

以後、彼氏とかそういう事は口にしません」

クリス父「うむ。もし彼氏など出来たら、その男のために

第3次世界大戦が起こるだろう」

マルギツテ「相変わらず中将殿のジョークは機知に富んでいます」

皆「（絶対ジョークには聞こえない！）」

く 軍人撤収く

一子「話終わった？いざ尋常に勝負！負けないわ！」

マルギツテ「……次の作戦開始の時間が迫っている」

クリス父「悪いなサムライガール。マルギツテ少尉は優秀な人材だ。
やるべき仕事が多くてな」

百代「だったらわざわざ連れてくるなという話だな弟」

明久「ちょ、姉さん楯突くのは良いけど僕に振らないで」

クリス父「だが、君の願いは後日叶うぞサムライガール。
マルギツテも君達の学び舎に転入予定だ」

ガクト「うおっ！？マジで？……アリだな」

京「どこまで親バカなんだか」

八雲「それ本当か！また面白くなりそうだな」

そこへ茂みから八雲が現れた。

明久「あれ？八雲どこ行ってたの？」

八雲「ちゃつとな」

雄二「ってか過保護すぎだろ」

クリス父「ふ、私とてクリスと同じクラスにマルギッテを
入れるほど過保護じゃないぞ。せいぜい、2 - Aだな。
優秀なマルギッテに相応しいクラスであるしな」

翔子「……私達と同じクラス」

クリス「おお、そうか。ではマルギッテをよろしく頼む」

雄二「つてかそれでも十分過保護だろ！」

百代「そんなことより、森の中にいるお前の部下を10人ほど撫でてといた。」

ちゃんと回収しておけよ」

八雲「あつ俺も10数人撫でておいたからよろしくな！」

クリス父「なんだと！？私が誇る精兵達をか？

マルギッテ！確認しろ」

マルギッテ「……全部隊連絡不能。制圧されていますね」

百代「軽く挑発したら乗ってくれてな。ははは」

八雲「あつちが先に手を出してきたからな正当防衛だな」

八雲と違い百代は満足そうに言った。

マルギッテ「貴様、いい気になるのはやめなさい」

百代「お前もやるか？部下達の仇を討つか？」

マルギツテ「……………やめておきましょう。撤収の時間です。

軍人は使命を守らなければ」

クリス父「こちらマルギツテが襲いかかったようだ。

互いに遺恨ナシとしよう」

百代「ま、こちらバカンス中だし、いいか」

クリス父「部下は責任持って回収していく。ではな、クリス」

クリス「はい！」

クリス父「娘を頼む」

優しく言われた。

クリス父「……………頼むぞ？」

2回目は怖く言われた。

八雲「任せておけて！それより銃見せてくれない本物を見てみた
いんだ！」

明久「ちょ！八雲失礼だよ！」

八雲「大丈夫だって。少しだけならいいだろ」

クリス父「機密事項だ」

そういうと2人は悠然と去っていった。

八雲「ダメだったか」

秀吉「さすがに無理じゃろうよ」

優子「ってあんな事言わないでよ！心臓に悪いわ」

愛子「うん、さすがにアレは心臓に悪いよ」

一子「マルチーズか………覚えたわ！」

明久「覚えてないからね。マルシカ合っていないからね」

く大和とクリスく

気を取り直し、皆で釣り再開。

八雲「やつほうまたヒットだぜ。20センチ以上あるな。

これ川下の釣り人に売りにいったら商売じゃね？」

雄二「確かにな。それぐらいの大きさならできるだろうな」

八雲「よーし。なら行って来るぜ。ワン子修行がてら一緒に行くぞ」

一子「はい！」

八雲とワン子は凄い速度で、川下へ駆けていった。……魚を数匹入ったショルダーを担いで。

大和「止めるヒマがねえ」

明久「仕方ないよ八雲だし」

百代「まあ私達は好きに動くさ……」

明久「釣りする気、もうないね姉さんは」

百代「こうして自然と一体化しているだけでいい」

姉さんは川岸に座り素足を水につけて遊んでいた。

明久「姉さんは足指も綺麗な形してるよね」

康太「……………!!」

明久がそう発言すると康太は素早くカメラを構え
百代を撮影しようとシャッターをきるが

百代「甘いぞムツツリーニ」

素早くその場から動いてカメラに写らなかった。

康太「……………また、撮れなかった」

明久「ムツツリーニドンマイ！」

ムツツリーニの撮影技術は学園一を誇っていいほど画質が良く量も
多い。

だがそのムツツリーニでも百代の写真は1枚も撮れていなかった。

明久が康太を励ましていると、

大和「勝負だクリス！俺という人間を認めさせてやるよ！」

クリス「なるほど、力が伴えばさっきの言葉にも説得力が宿るな。

面白い。その勝負受けた」

黛「あぁっ！？和やかな流れから急転しています」

秀吉「落ち着くのじゃ2人とも」

黛「ここは穩便に」

クリス「お前と決闘することになるうとはな」

黛「あぁっ！？聞いていない!？」

話を聞く限り、

クリスが大和のことを口先と小手先だけのタイプの人だと思われたみたいで、大和が自身の事を分からせるために決闘をすることになったみたいだ。

そこへ、下流から食材をたくさん持って八雲と一子が帰還した。

雄二「ちょうどいいところに来たな」

一子「ん？」

百代「今、面白いことになってるぞ」

八雲「なに!？よくわからないが俺たちがいない間にずるいぞ!」

翔子「・・・面白い？」

そこで八雲と一子に事情を説明する。

八雲「大和とクリスが勝負・・・“決闘”をね・・・フム。

事情は分かった。結局勝負に行き着いたか。まあ仕方がないか」

百代「何で勝負するかは平等に私と八雲で決めてやる」

八雲「これは川神院と真田の名にかけて平等に行く」

百代と八雲は先ほどまでとは違い真面目に言った。
いくら2人でもこういう場面ではマジメになる。

クリス「分かりました」

大和「なら、任せます」

雄二「単純な戦闘ならクリスが有利、頭脳なら大和有利だな」

優子「大丈夫なの？」

明久「2人が川神院と真田の名を出した時は真剣な時だから大丈夫だよ」

百代「ただ、それには準備が必要だから明日行く」

八雲「ま、それまで釣りを楽しもうぜ」

く覗き??

明日に決闘を控えた2日目の夜。

大和とクリスは喧嘩こそしなかったがお互い闘志をむき出しにして意識していた。

黛「うう……」

明久「どうしたのまゆっち？」

黛「い、いえ……あの、すみません、失礼します」

明久「？」

まゆっちは何か言いたそうだったが何も言わなかった。

ガクト「フッフッフ。俺様出現。右良し左良し」

雄二「安心しろよ。周囲には俺達以外にいないぞ」

今この部屋には秀吉以外の男子が揃っている。

明久「どうしたのガクト？」

ガクト「じゃ早速、下の旅館の覗きに行こうぜ」

大和「何故俺達を誘う？」

ガクト「秀吉はこういうことに興味なしな。

キャップはあまり女自体にそこまで興味ないからな
だがお前達はエロイからな」

大和「そこまで俺はエロくない」

雄二「俺だってガクト程エロクねえよ！」

康太「……………心外だ」

明久「ムツツリーニはエロイよね」

康太「フルフル」

ガクト「じゃあお前らは行かないのか？」

皆（男）「……………行く！！」「……………」

明久「ってアレ？八雲も行くんだ。こういうの興味ないような気が
したけど」

八雲「気配消していくんだろそれなら訓練になるしな。

それに仲間はずれは嫌だ！」

大和「キャップらしいな」

雄二「で、覗きポイントは分かっているんだな？」

康太「……………それはすでに調査済み」

明久「さすがムツツリーニだね」

大和「兵は神速を尊ぶ。早く行くぞ」

ガクト「では冒険に出発だ！財宝を求めて！」

俺達は大いなる一步を踏み出した。

だが、

百代「くくく。キイタゾキイタゾー」

ラスボスが現れた。

ガクト「大変だ！いきなりラスボスだ！」

明久「気配殺していたな姉さん」

雄二「俺達の冒険はここまでなのか」

康太「……………無念」

百代「私も行く」

八雲「はい？」

百代「私もねーちゃん達の裸を見る」

大和「ラスボスが手を組むと言ってるぞ」

ガクト「モモ姉は普通に風呂行けばいいでしょうが」

百代「私は無防備な肢体が見たいんだ。

どうも風呂場では視線が露骨過ぎるらしく

皆、変に警戒してしまう。視姦が楽しいにな」

大和「分かるような……」

百代「で、どっちだ？どこで覗ける？」

ガクト「頼もしい味方がついたぜ！ムツツリーニ案内を」

康太「……了解！」

俺達は百代を連れて山の中へと入っていった。

百代がピトツと明久にくつついてくる。

明久「な、なに？」

百代「胸が当たって気持ちいいか？」

明久「……やぶさかではないよ」

百代「ふふふ、顔真っ赤だな。男の子じゃないか明久」

百代は全く怒っていなかった。

康太「……ポイント到着。ターゲットはラクロス部女子学

生」

百代「ぷりぷりのピーチやメロンが並ぶ八百屋を堪能だ」

やはり、この人はちょっとおかしい。

ガクト「さあ、この茂みをかき分けるとエメラルドが……」

ガクトが茂みをかき分けて進もうとすると

突如、警報装置が鳴り響いた。

装置「フシンシャハツケン フシンシャハツケン」

ガクト「な、なんだ!？」

康太「……こんな装置昨日の昼間には無かった」

雄二「チツ、夜の間の警報装置か。敵も考えるな」

畏を調べる。カメラはない。姿は映ってない。

百代「む。早い。6人ほどの人間がこっちにくる」

大和「警備員の動きめっちゃ迅速だな」

百代「私や八雲ならいくらでも切り抜けられるが、

お前達と一緒に姿を見られかねん」

八雲「だな。全員切り抜ける方法は」

大和「任せろ、女性の百姉がいることで言い訳できる」

百代「いちいち言い訳などめんどいな」

八雲「だな」

百代は大和と明久を、

八雲は康太と雄二をそれぞれ片手で持ち上げた。

ガクトは百代の足に踏まれている。

百代「お前達は下の川まで逃げろ、私と八雲は走って逃げる」

ガクト「おいおい！下の川まで高さスゲーあるぞ」

雄二「ま、まさか」

大和「まさか落としたりしませんよね。八八は」

明久「ま、まさか、そんなことしないよね」

康太「……………そ、そんな事するわけがないはず」

百代「問答無用。無事戻って来いよ」

八雲「後で様子を見に行くから」

ガクト「うおおおおおお！？」

大和「バカなああああ！？」

雄二「嘘だろおおおおお！？」

明久たち5人は5月のまだ冷たい川に放り込まれた。

百代「さて私も走って逃げるか、と」

八雲「さて、俺も逃げるかな」

百代と八雲は、警備員達の間を堂々と走ってすり抜けた。

警備員男「突風？今、何か通ったか？」

警備員女「気のせいでしょう？それより覗き捕まえないと」

常人の目には何も映らなかった。

大和「はつくしよーい！」

秀吉「しかし覗きとは馬鹿な真似をしたものじゃな」

ガクト「けっ、男として正常なのは俺様たちだけ」

明久たちは全身濡れながら旅館にたどり着いた。

もちろん百代と八雲は濡れてはいない。

濡れて帰ってきたので温泉であつたまらないと、5月の川は冷たい。

大和「はつくしよーい！」

明久「大和大丈夫？」

大和「ヌウ・・・・・・・・オレサマ、サムケ、トレナイゾ？」

雄二「もしかしたら風邪でも引いたかもしれないな」

康太「・・・・・・・・早く休んだほうがいい」

大和「そうする」

寝るときはさすがに男女混合はマズイので

霧島たちの部屋にウチの女子達が泊まる事になっている。

もし男子が女子の部屋に寝ている間に侵入したら

捕虜としてあらゆる尋問を受けるらしい。

正直そんな真似誰もしないのでどうでもよかったが……。

ある男子達曰く

『女子側にも何かペナルティを作って欲しかった』と

翔子「・・・・・・・・草木の眠るうつしみ時。今宵こそラブゲット」

雄二は貞操を狙われていた。

雄二「翔子！布団に入ってくるな！」

翔子「……………遅い。もう侵入した。

下手に騒いだら一緒の布団にいる事がバレる。

そしたらアラ不思議、既成事実が」

雄二「冤罪だ！ってか誰の入れ知恵だ！」

それはもちろん京の入れ知恵に決まっています。

翔子「……………それに私だけじゃない」

雄二「なに？」

翔子が指差したほうに雄二は顔を傾けると

大和「た、助けてくれ雄二」

京「大和！」

雄二と同じ状況の大和がいた。

雄二「ひ、ヒデエ」

翔子「……………だから雄二」

雄二「や、やめるんだ翔子！」

眠りたいのに眠れない2人であった。
大和にいたっては明日クリスとの勝負なのに……

〈3日目、朝食〉

箱根旅行3日目

旅館の朝食はバイキング形式だった。

一子の前には大量の皿が置かれていた。

一子「ぐまぐま。お、このハム美味し。魚もグッド」

百代「ワン子、この牛乳とれたてでイケルらしいぞー」

一子「んぐんぐんぐんぐつ……ぷはっ、濃くていいわー」

百代「ほら、うつすら白いヒゲができている」

百代は指でふき取りそれを舐める。

優子「本当に凄い食欲ね」

クリス「ああ、本当だな。改めて見ると凄まじい食欲だな」

愛子「見てるだけでお腹いっぱいになるよ」

黛「私はご飯おかわり程度です」

翔子「……由紀江も凄い」

百代「強さと食欲、そこそこ比例するものさ」

一子「夜明けぐらいに起きて八雲と一緒に修行してきたもん」

クリス「まあ自分も朝練はしているが」

一子「アタシから言わせればクリが少ないって」

クリス「自分はそのままで腹にはいらん」

京「ワン子、次何おかわり？」

一子「あ、野菜でお願い。肉系いきすぎたわ」

京「ん。まあタマゴでも食べてて」

一子「よっはっ、とっ（卵を次々と割る）

ごくんっ……（そして飲み込む）」

優子「それにバランスのいい食べ方をしてるわね」

クリス「お前はこの先も病気とは縁がなさそうだな」

一子「うん！そう思い込んでるし」

京「毎日激しい鍛錬・たっぷり食事・寝たいだけ寝る。

ワン子に病魔入り込む隙、一切ナシ」

一子「そんなもん入ってきたら斬ってやるわ」

黛「もぐもぐ」

クリス「まゆっちは食べ方が綺麗だな」

翔子「……………育ちの良さが出てる」

愛子「本当に見事なものだよ」

黛「そ、そんなものでしょうか？」

京「まあここに露骨な比較対象がいるし」

一子「がっがっがっがっ！！！！！！」

百代「ウチは食事作法は奔放な方だからなあ」

京「クリスや翔子、優子は箸の持ち方完璧だね」

優子「そうかしら？」

翔子「ウチそういうの厳しかったから」

クリス「ああ、ドイツの時に友達の叔母さんに教わった。

って犬。ししゃもも頭も食べるのか？」

一子「食べるわよ。全てエネルギーにしてあげるわ」

百代「クリ、お前の鰹の開き食べるとこ多く残っているぞ」

クリス「そ、そうか……………」

優子「黛さんを見ると綺麗に食べているわね」

クリス「本当だ。比べると随分と自分のは雑だな」

黛「日本に来てちよつとでここまで馴染んでるなんて

私には凄すぎると思いますよ」

百代「ああ。気にするな。少しずつ覚えればいいさ」

黛「そういえば、大和さんまだ寝ているんですかね？」

一子「さつさと起きて朝ごはん食べれば良いのにね」

百代「ま、他の男達が起こして連れてくるだろう」

黛「私、ちよつと様子を見てきますね」

そついつとまゆっちは男子部屋へと足を運んでいった。

「負けず嫌いな大和」

・・・・・・・・部屋では

大和「はつくよーい！！・・・お、検温終了」

明久「えっと8度1分もあるよ！大和完全に風邪だね」

康太「・・・・・・・・川にダイブが原因」

ガクト「だったら俺様だって風邪ひいてるはず（元氣）」

明久「ガクトは参考にならないよね」

雄二「だな。バカだからな」

八雲「で、どうするんだ。今日クリスと勝負だろ」

秀吉「熱出てたら無理じゃ。やめたほうがよかつ」

大和「やめた方がいいというかバレたら勝負してもらえないだろう。

そして体調管理も勝負のうちだ。不戦敗になる」

八雲「だな。風邪でリタイヤでもお前の負けだ大和」

大和「それは嫌だ。勝負を挑んだ以上必ず勝つ」

明久「決闘の延期をお願いしたら？」

ガクトが原因なんだから責任とってもらおうよ」

ガクト「どーとるんだYO」

明久「実は昨晚ガクトがガイアに自分を捧げるとか言って裸になって庭に飛び出したから全力で止めたせいで風邪をひいた、とか
どうかな？」

雄二「確かにそれなら女子達は信じるだろうな」

ガクト「やめる俺様がただの変態だと思われるだろ」

明久「あ、もう十分に変態だと思われるから大丈夫だよ」

ガクト「おいおい、真の変態っていうのは

俺様じゃなくムツツリー二だろうが」

康太「……………失礼な」

大和「ともかくガクトの嘘は本人からボロが出るから駄目」

秀吉「ではどうするのじゃ？」

大和「誤魔化すしかないだろ。体は普通に動くしな」

雄二「宿の人に熱止めをもらってくる。少しは効くかもしれないし
な」

大和「すまない」

ガクト「なんか大変そうだな大和……………」

大和「お前のせいだろうが!!!!」

ガクト「うむ。吠える元気があれば大丈夫だ。心配したぜ」

大和「！ ガクトお前……」

ガクト「ふっ」

大和「何まとめようとしてんだ、ふざけるな（蹴り）」

ガクト「ぐはあっ 結構……鋭い蹴り放つなあお前……」

大和「明久、俺一目見て風邪だと分かるか？」

明久「分からないね。でもバレるよ。付き合い長いし」

大和「少しだけ真実を言う“風邪気味で薬を飲んだ”

だが体を動かすには支障がないってな」

秀吉「やめておくのじゃ。そこまでして戦う問題じゃないじゃろ」

大和「俺はクリスに軽く見られてるんだ。そうはさせん」

ガクト「男の意地だな。分かるぜ」

明久「まあ大和は負けず嫌いだからなあ。

でも本当にやばそうだったら止めるよ」

八雲「話はすんだな。」

大和とクリスの決闘は続行でヤバくなったらとめるだな」

大和「ああ」

八雲「で、そこで話を聞いてるまゆっち入って来い」

明久「え？」

黛「……………はい」

八雲がそういうとまゆっちが部屋に入ってきた。

黛「皆さんを呼ぼうと部屋に来て……………そしたら」

大和「うん。聞いたって事だね。お願いがあるんだけど」

黛「お願いですか」

大和「俺が熱出している事、秘密にして欲しいんだ」

黛「で、でででも、そんな状態で勝負なんて」

大和「うん。ムチャは分かってるんだけど負けたくない」

黛「で、でも……………」

結局まゆっちは大和に負けて秘密という事になった。

く大和VSクリス 前哨戦く

午前9時。大和とクリスは河原で対峙していた。観客は他の仲間達や霧島たち。

八雲「これよりクリス対大和のタイマンを行う」

百代「ジャッジ兼司会進行は私とキャップだ。夜露死苦」

クリス「やや風邪気味とのことだが？」

大和「なあに問題ないさ。さあやろうぜ」

京「昨晚、少し調子悪そうだったもんね」

まあ京のせいもあって大和の風邪まで進化したけどな。

黛「……うっ」

一子「どうしたのよ？お腹痛いとか？」

黛「そういうわけではないのですが…心配です」

一子「別にガチで喧嘩するわけじゃないわよ。競っだけ」

黛「（大和さん…解熱剤は効いたみたいですけど）」

百代「私は3分ほど考えた。公平な決闘方を」

八雲「まあ結局の所、川神戦役の収縮版をやるうかと」

黛「川神戦役？何かとてもつまらない戦いの予感が」

京「これは中国でいうところの“童貫遊戯”」

黛「知っているのですか京さん？」

京「南宋の時代、童貫という元帥がいて彼が敵国の遼との間でやっていただけ。

兵力を失わず戦の優劣を決められる優れたシステムとして……」

八雲「まあこれは主に学園でクラス同士がやりあう時に使われる決闘法で、くじを用意するんだ」

クリス「くじ箱……その中に戦う種目が入ってる？」

八雲「その通り。くじで引いた種目で戦ってもらおう。

勝負を繰り返して先に5回勝ったほうが勝ちだ」

クリス「中に入っている勝負はどのような？」

八雲「知力重視、体力重視、感性重視：色々な勝負が

存在している。つまり勝つには様々な力が問われるわけだ」

クリス「なるほど」

八雲「本来は出た勝負に対して強いヤツが行く団体戦だけだな。

それをタイムマンでやってもらおう」

クリス「5回続けて自分に不利な勝負が出てしまっただら？」

百代「平等にくじは入れた。普通そこまで偏らないぞ」

八雲「それに偏ったとしても“運も実力”のウチだろ。

俺はカリカリ君が5回連続で当たった事あるしな」

雄二「それは凄いな」

明久「でも、それを全部食べてお腹壊したとこまで言おうよ」

八雲「あの時俺はバスの中で地獄の腹痛を戦った。

何度隣の席にいたワン子にもうダメだと訴えた事か」

優子「それは一子さんも災難ね」

愛子「大丈夫だったの？」

一子「うん。アタシが隣でどれだけ必死に励ましたか」

八雲「お前あの時は涙目だったからな」

一子「隣でお腹痛いって人間が“もうゴールしていいよね”

とか言えば涙目にもなるわ！」

秀吉「それはとんだ災難じゃのう」

八雲「話が逸れたが運も実力。いいな」

クリス「ああ、複数回戦えるならクジでも問題ない」

大和「同じく」

八雲「じゃんけんでクジを引く番を決めろ」

クリス「では、はじめよう大和。じゃんけん」

大和「クリス。俺はチヨキを出す」

クリス「（何！こいつ自ら出す手を教えるとは……分かん。ん。」

そんな事をして何の得になる？……！？そうかこいつ嘘を突く気だな。

という事は自分にグーを出せば大和はパーを。

こしやくな。ならばチヨキを出してくれる」

クリス「じゃんけんっぽいっ！！！！」

クリス チヨキ LOSE

大和 グー WIN

クリス「ナニッ！？」

大和「は〜（ため息）やれやれ予想通り過ぎる……」

やりやすいなあクリスは（上から目線）」

クリス「む……！むむむむむっ！！！！

腹立つ！大和腹立つーーーー！！！！」

クリスは地団駄を踏んでいた。

く大和VSクリス 1戦目く

雄二「ま。前哨戦は大和の勝ちだな」

京「こういう風に思考が読みやすい相手だから、勝負しても勝てるよとふんだんだね大和は」

明久「（風邪さえひいてなければなあ）」

黛「（やはり……とめるべきだと思います。）

でもそんな差し出がましい事は、あう）」

百代「さあ第1試合の種目を決めるクジを引けい大和」

俺はクジ穴に腕を入れた。

京「あんっ！そ、そこは」

大和「今日の運気を試してみるか（ゴソゴソ）」

京「な、中をかきまわすなんてえ」

大和「誰かそいつのイメージーションプレイをとめる」

八雲「了解。百代頼む」

百代「京。おあずけ」

京「チッ」

百代「あれ舌打ち？何その態度。あれー？」

大和「さあて……俺はこの赤の紙を選ぶぜ！」

百代「どれどれ。おー大和よ。お前凄いくジ運してるな」

八雲「ん？どれどれ。おー大和凄いなお前」

八雲も大和が引いたクジをしてみる。

大和「どんなもんよ。クイズ勝負とか頭脳系でろ！」

百代「じゃーん。

Chain Death Match」

大和「ははは殺せよ」

大和は笑っしかなかった。

明久「……よりによって肉弾系ひいてどうするのさ」

クリス「ふふふ。これは面白いなあ大和？ははは」

百代「ギブアップかライン外に出るかで負けとなる」

大和「特殊ルールとか何も無いチェーンデスマッチ？」

百代「寝技ありだ。良かったな。試合にかこつけて襲え」

クリス「な、ふ、不埒な！大和め！」

大和「俺は何も言っただろうが……う？（いかん、頭がボーッとする）」

クリス「姑息な手段を使うから運に見放されるのだ」

八雲「ほら大和、腕出せ腕。チェーンでつないでやるから」

鎖で腕と腕をつながれる大和とクリス。

百代「それじゃ第1試合。いざ尋常に勝負！」

大和「ふ……クリスよ俺はたとえ勝負でも……」

女の子を素手で殴るような真似できない」

クリス「なに？それは自分を戦士と見ていない愚弄だぞ大和」

これは誇りをかけた勝負。遠慮は無用。来い」

大和「勝手な自己満足は覚悟の上だが、もう1度言っ」

俺は女の子をブン殴るなんて、できないのさ……」

だから次の勝負で頑張る事にするぜ。ギブ……アップ」

八雲「第1試合勝者クリス！」

クリス「な、釈然としないぞ！」

優子「え？どういうこと？」

大和「他にいくらでも競うようがある。他は負けん。」

納得してないなら、次で俺の戦いぶりを見る」

クリス「……」

明久「はい。解説の京さん。今の攻防を説明してください」

京「えー、第1試合の大和の狙いはこんな感じでしょう。

肉弾系では勝てっこないので余計なダメージを受ける前に
ギブアップすべき。だが、ただマイツタをするだけでは
相手が納得しないので理由をこじつけ」

秀吉「なるほどのう」

クリス「ええい、それでは次だ次！」

雄二「クリスも勝ちを拾ったようでもいい気分じゃないな」

雄二の言ったクリスは腹を立てていた。

く大和VSクリス 2戦目く

百代「ほらクジを引けクリ。面白いのをあてろよ」

クリス「んー（クジ箱まさぐり中）これだー！」

百代「おっ、これは互角勝負か。テーマは“絵を描く”」

大和「絵か……まあ俺は普通だぞ。美術に関しては」

クリス「自分も心得があるわけではない……」

八雲「平等に行くからな。絵のお題は“まゆうち”だ」

黛「……え？わ、私なぞを描くのですか？」

八雲「俺達が被写体だと、大和と長年の付き合いだから

クリスが不利になる。で雄二たちもやはり出会いは

同じくらいだが、俺達という時間が多かったから

クリスが不利だからな」

黛「わ、わかりました。そういう事であるならば」

百代「脱いでくれるか。ヌードデッサンだからな」

黛「生まれたままの姿に！？い、いきなりの展開に

私の心臓は凄いいびートを刻んでいます……」

雄二「冗談に決まっているだろ。普通にしていざ」

ガクト「え！？マジか！？期待して損したぜ」

康太「・・・・・・・・・・・・・・・・無念」

明久「本気でそう思ってたんだ2人とも」

ガクトと康太は膝を地面につけ落ち込んでいた。

八雲「絵の具や筆は用意してある。

勝負は1時間審査員はまゆっち自身。でははじめ！」

クリス「ん。では動かないでくれまゆっち」

黛「ば、ポーズはいかががしましょう？

私としては刀を構えているところなぞお勧めします」

クリス「自然体でいい」

黛「あうそうですか」

優子「今、何か凄い単語が聞こえたんだけど？

愛子「うん。僕も今、刀って聞こえたんだけど？」

雄二「ああそれは・・・・・・・・（説明中）・・・・・・・・だからだ」

優子「ああ、そういうことね」

愛子「本当に皆は面白いよね」

クリス「む。直江大和。目が真剣そのものだな。
自分も負けん。懸命に描き上げるぞ」

八雲「面白そうだから俺も描いてみようつと」

……そしてあつというまに1時間後。

百代「よし。じゃあまずクリの絵をオープン！」

クリス「ちょっと照れがあるが……見てくれ」

クリスは、まゆつちが1人風を受けて川辺に立つ姿を綺麗に描いていた。

黛「わあ、凄いです。私なんかをこんなに綺麗に」

クリス「綺麗はオーバーだろう。照れる。

だが、心は込めたつもりだ」

黛「はい、ありがとうございますクリスさん」

明久「おー。確かに上手いねクリスの」

ガクト「意外と何でも出来るぞ相手は大和大丈夫か」

大和「俺の絵は、こうだ」

まゆっちが俺達に囲まれて幸せに笑ってる絵。

正直クリスより大和の画力は落ちるかもしれないが……………。

黛「わああああ……………この絵の私、幸せそうです……………」

クリスさん。クリスさんの絵はとても素敵です。

でも私、この絵を見て少し涙ぐんでしまいました」

クリス「審査員がそう思うなら、思うがままに」

黛「はい。私は大和さんの絵を推します」

八雲「絵の勝負は大和の勝ち!!」

大和「俺の1勝1敗だな」

クリス「……………振り出しか」

当然大和は狙ってああいう構図の絵にした。

今まで友達がいないまゆっちだ。

自分が仲間囲まれる絵はともうれしいだろう。

画力では負けたが、心遣いで勝った勝負だった。

八雲「あ、勝負には関係ないけど俺の絵はこんな感じだ」

そこで俺も大和たちと同じ時に描いた絵を皆に見せる。

雄二「しゃ、写真!?!いや違うな。

普通に描いたのかこれ?」

クリス「負けた……上手すぎるぞキャツプ！」

秀吉「これが本当に芸術というものかのう」

康太「……本当に写真みたいだ」

八雲「これもやるよまゆっち」

黛「はい、ありがとうございます」

くまゆつち動く」

その後も3回戦・4回戦と続いていき次は5回戦目
現在、大和とクリスの勝敗は互いに2勝2敗だ。

大和「……………クリスも中々やるな。ちょっと驚いたぜ」

雄二「大和少しやばそうだな。熱が戻ってきたか」

明久「あ、雄二も気づいた？うん、相当きてると思うよアレ」

秀吉「そろそろ限界じゃろうのう」

大和「はあ……………はあやるなあ」

クリス「ふふ、顔が赤いぞ。怒ったか」

百代「2-2か。白熱しているな」

京「大和。熱上がってきてない？」

愛子「顔色もあまりよくないよ？」

百代「ああ。ちょっと額触らせてみる」

大和「心配無用……………げほっ」

黛「……………!も、もうダメです。松風私に行きます!」

松風「行けまゆっち！まゆっちならできる！」

優子「ど、どうしたの黛さんいきなり!?」

黛「そ、その大和さんは熱が上がってきたのではなく

元から、もう……かなりの高熱だったんです！」

大和「おい、まゆっち！」

黛「熱を薬で抑えて戦ってたんです！」

大和「まゆっち黙って」

黛「だってだってもう見てられませんか！

熱を無理してまで戦うのが友達なんですか？

ち、違うと思います……!!

友達って言うのは……その、分からないですけどどう
じゃなくて、

その……大和さんとクリスさんには仲よくしてほしい
のに

う、うう……」

まゆっちはそう言つとその場で泣き出した。

大和「……お、おお」

クリス「まゆっち……」

黛「す、すみません……私みたいな新参が、

でもどうしても……言いたくて」

百代「いや、よく言った」

八雲「ああ。思ったことをズバッと言ってもらわないと」

黛「え……」

百代「弟お。薬で誤魔化していたのか」

一子「ったくさあ、どーでもいい時はすーぐギャーギャー言うくせに、

ツライ時黙っちゃってさ」

大和「だって言ったら確実に不戦敗だろ。やだね。

まゆっちは仲良くして欲しいと言っただけ

これはそのために必要な戦いなんだぜ。

クリスに俺を認めさせるために。

だから引き下がれない。男の、意地があるんだ」

ガクト「分かる。男だな大和」

百代「ガキンチョだなあ」

京「かつこいい大和」

大和「とにかく、このまま終われないぜ。

……でもまゆっちにそこまで心配させて悪かった。

確かに見ていて気分は良くないよな。クリス提案なんだが」

クリス「聞こう」

大和「今、丁度2対2だから、次で決着にしないか？」

クリス「5本制から3本制か。別いぞ自分は」

大和「ってことだまゆつち。試合数を減らした。

あと1勝負だけやれさせてくれ。頼む」

黛「わ・・・・・・・・わかりました。そこまで言われるなら」

大和「ありがとう！」

く大和VSクリス 最終戦前く

一子「やるじゃんまゆっち」

黛「え……………」

百代「これからも言いたい事があればガンガン言え」

黛「あ……………」

八雲「1年だからってかしくまる必要なんてないからな」

明久「そうだよ。おどおどしていると気をつかうからね」

京「今ぐらいが、丁度いいかもね」

黛「は……………はい……………（もしかして私、認めてもらえたんでしょうか？）」

ガクト「多分、お前が思ってるとおりだと思うぜ」

黛「ガクトさん」

ガクト「まゆっちやったな。」

鼻毛を抜いてやるっていうのは今みたいな事なんだぜ」

明久「相変わらずガクトは意味不明だね」

黛「はいっ」

明久「あれっ、通じてるの!？」

黛「ありがとうございます!」

雄二「表情は相変わらずソレなんだな」

黛「はあう!？」

大和「って事で、ラストバトルだ」

クリス「クジを引くといい大和」

大和「(キツイが・・・種目しだいでは・・・いける)」

大和は神頼みしながらクジを引いた。

大和「山頂からダウンヒルランニングバトル。

・・・都合のいい時だけ神に祈った報いか……………」

雄二「土壇場でそれを引いてしまうか」

百代「山頂の展望台からここまで駆け下りるランニングレースだ」

京「大和不利……………」

八雲「そこらへんは考えてある。山の中腹にチェックポイントを

2つ設けた。このチェックポイントに行ってクイズを答えて
サインボールをもらってこよう必要がある」

クリス「クイズ？知力も必要なわけか」

八雲「ああ。道の途中にあるポイントには難しいクイズ、離れた場所にあるポイントには簡単なクイズを用意した。好きなほうに行くといい。どう走ろうと乗り物にならないければドコを通っても合法だ。ただし相手チームへの妨害は禁止だ」

クリス「クイズがわからなければ立ち往生か？」

百代「その時は次の問題を頼めばいい。

間違えた場合も次の問題が出てくるまでは1分かかる」

クリス「1分は痛いロスだな・・・なるほどこれは油断できん」

百代「問題は西洋史、日本史、雑学、数学、物理から選べるぞ」

八雲「さらにパートナーを1名選べる」

大和「パートナー？」

八雲「クイズを一緒に考えてもらってもいいし、終盤疲れたら代わりに走ってもらってもいい。とにかくサインポールを持ってるほうがゴールすればそのチームの勝ちだ」

大和「ぶつちやけパートナーに全部任せてもいいのね」

八雲「ああ、勝ちも勝ちだ。俺と百代がレース中の審判をする。そしてガクト、康太、工藤の3人がゴール地点で待つ。」

明久、秀吉、優子、雄二、まゆつち、霧島の6人が
チエックポイントで問題係だ。
で、パートナーはワン子と京のどちらかだ」

一子「イエーイ」

京「イエーイ」

大和「これはどちらになっても心強い事で」

八雲「これは公平を期して雄二がコイントスしてくれ。

表ならワン子、裏なら京だ」

雄二「ああ、わかった。大和。どちらが出ても恨むなよ」

京「裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏」

大和「呪いをかけるのはやめてくれ」

そして雄二がコイントスする。

その結果は

表

京「サイッテー」

雄二「仕方ないだろこればっかりは。確率だぜ」

京「言い訳カッコ悪」

翔子「……………雄二。空気呼んだほうがいい」

雄二「お前には言われたくないな」

一子「頑張ろうね大和。アタシフルパワーで行くわ」

大和「うむ、やるからには勝つぞ」

一子「おー！」

クリス「京。お前大和のために手抜きをするのでは」

京「いいセンついてる。でも安心していいよ。」

今回は純粋な勝負だからね。私は全力でクリスを援護する」

クリス「そうか」

京「（大和を負かして、落ち込んでいるところを思いっきり甘やかす…………ククク）」

「山頂までの道のりのこと」

百代「では山頂まで行くぞ」

百代は大和とクリス、京、ワン子を連れて先に山頂まで行ってもらう。

その間に俺は明久たちを連れてチェックポイントへ向かう。

明久「ねえ八雲。チェックポイントに3人も人数っているの？」

明久たちには各チェックポイントにいてもらう。

難しいポイントは明久、秀吉、優子の3人、
簡単なポイントは雄二、まゆっち、霧島の3人に分かれてもらっている。

雄二「そうだな。確かに3人もいないんじゃないか？」

優子「確かに2人の言う通りね」

八雲「まあそうだな。最初は明久と雄二にしてたんだが、

一応クイズだから成績のいい霧島と優子を

2つのポイントに振り分けたんだ。

前回の戦争を経験してお前ら1人ずつだと回答が分からない気がしてな」

雄二「うっ」

八雲「で、さすがに男子と女子1人ずつも良くないかなと思い、まゆつちと秀吉をわけたんだが……」
雄二は霧島と2人きりのほうがよかったか？」

雄二「いや、黛を入れてくれてありがとう。
だがせめて翔子とは離して欲しかった」

翔子「……雄二照れてる？」

雄二「全然照れてなんかいねえよ!？」

翔子「……そういうことにしておく」

明久「なんか少し京の影響がでているような……」

八雲「まあ!そういうわけだ。まあとにかくよろしく頼むぞ」

明久「分かったよ」

八雲「悪いな霧島と優子。俺達の問題なのに手伝ってもらって」

翔子「……別にかまわない。私は雄二といわれればいい」

優子「アタシもかまわないわよ。」

それにこちらのほうが少し面白いし……」

八雲「そうか。ならいいんだけどな」

そして俺は6人を

各チエックポイントに連れていき山頂へと向かっていった。

「バカの回答」

そして、山頂

八雲「ゲームの進行は俺と百代が責任持って監視しているからな」

百代「大和の状態がやばいようなら無理に止めるぞ」

大和「分かった。判断は2人に任せるよ。

クリス。これで決着だ」

大和はクリスに向かって拳を差し出す。

クリス「受けて立つ！」

クリスが大和の拳に合わせる。

百代「よし！最終戦！始めっ！」

一子「そらああああああ！！！！！！！！！！」

クリス「はああああああ！！！！！！！！！！」

京「ついていく！」

大和「俺も適度に急ぐぜー！」

勝負開始と同時にワン子とクリスが猛ダツシュ、
京はそのあとに続き、大和も適度にその後を追いかける。

スタートしてしばらくしてワン子はルートを外れ林の中へと入っていった。

クリス「なに、林のほうに入った！？さすが犬！」

京「おそらく近道をしているはず！」

クリス「どうする京」

京「林の中の道分かる？」

クリス「正直分からない」

京「どうせクイズは簡単に答えられないはず。

私達は確実に道なりに行くこう」

クリス「だな」

京「……大和もショートカットを使わず。

これは苦戦かな」

〈近場チェックポイント〉

秀吉「今はどころへんじゃろうか？」

明久「もうそろそろ来る頃かな」

優子「え？もう？いくらなんでも早くないかしら？」

3人が話していると

一子「「イエーイ！アタシ一番！！」

優子「きゃー！！」

明久「どこから出てきてるんだよ！」

一子「山はアタシの庭よ。さあ問題出しなさい」

秀吉「では、まずはジャンルを選ぶのじゃ」

一子「良く分からないけど物理！」

優子「1モルの理想気体の圧力 p 、体積 V 、絶対温度 T は
ボイルシャルルの法則と呼ばれる状態方程式……」

一子「ちよつと日本語でしゃべりなさいよ！」

優子「え？日本語なんだけど？」

明久「つてか何で物理選ぶのさ！バカでしょ！」

一子「あ、大和から電話」

そこでワン子の携帯が鳴る。

大和「着いたか？問題を言ってくれ！」

一子「モルモツトのボイル焼きについて……」

秀吉「まったく違うのう」

大和「日本史を選べ！！！！それ物理選んだろ！！！！」

一子「わああああごめんなさいいいい」

大和「ともかく俺もそっち向かってる！」

明久「いやあ……次まで1分待つてね」

一子「ぬぬぬ。この1分はキツイわねえ」

1分経過

明久「……1分。じゃあ次。ジャンルは？」

一子「日本史で！あ、ちょっと待つて電話かける。

大和に問題そのものを聞いてもらおう。

……… ってうわああああ圏外になっちゃったああああ！！

こうなったらアタシがやってやるわ！」

秀吉「では問題じゃ。江戸幕府13代将軍の名前！」

一子「織田信長！！！」

明久「何勝手に歴史改ざんしてんの！せめて徳川は当てようよ！」

一子「こ、こ、この1分は辛すぎるううう」

優子「……これがFクラスなのね。

ちなみに秀吉と吉井君は分かる？」

秀吉「……わからぬ」

明久「確か……徳川家定じゃなかったっけ？」

優子「吉井君正解よ」

明久「日本史なら僕は得意だしね」

クリス「……チェックポイントだ！」

一子「うぎ、おいつかれちゃったわ」

京「クリス、ジャンルは？西洋史？」

クリス「当然日本史で行く！」

京「当然なんだ」

優子「江戸幕府8代將軍徳川吉宗は、米相場の安定に頑張った事から
何將軍と言われたでしょう」

京「これ簡単だね」

明久「うん、そうだね」

秀吉「これならワシにもわかるのじゃ」

クリス「ははは、もらったな、自分に言わせてくれ」

京「うん、いいよ」

クリス「暴れん坊將軍！」

優子「……不正解。次まで1分待って」

京「や、米將軍だから……」

明久「まああながち間違ってないけど……」

クリス「なんだとっ!？」

一子「ほっ……」

クリス「自分には向いていないな」

京「ここは任せて。作戦2で」

クリス「作戦2。了解した。行動を開始する」

一子「あれ、クリどっか行っちゃった。

あ、もう1つのチェックポイントか!？」

そこへ大和が林をかきわけチェックポイントに到着した。

くクリスと京の策

そこへ大和が林をかきわけチエツクポイントに到着した。

大和「ワン子！戦局は？」

一子「まだお互い不正解。もうすぐアタシに問題が来る。

クリは道を下っていったからもう1つのポイントかと」

大和「あそこはとにかく遠い、愚作だな」

京「大和……熱本当に大丈夫？顔がちょっと……」

大和「男の子だからガマンしますわな！

それに彼女のの前では倒れるわけにはいかないしな」

京「……大和カツコイイ」

明久「大和問題行くよ。日本史？」

大和「ああ。それで頼む」

優子「貞永式目の3条、8条はそれぞれ何の項目？」

大和「第3条：諸国守護人奉行事。8条：土地占有之事」

優子「正解よ」

秀吉「はい、サインボールじゃ」

野球のボールには百代のサインが入っていた。

京「私も1分。西洋史」

一子「おおお、これがボール。大和凄いわねえ」

大和「これで勝ったな」

一子「ええ、京が今、正解しても走りではアタシが勝ちよ」

優子「カエサル派に暗殺された共和政末期の政治家は？」

京「キケロ」

優子「正解よ。さすがね」

秀吉「これがサインボールじゃ」

一子「さあ京。競争しましょうか」

京「その余裕が命取りすぎる」

一子「はい？」

京「クリスが行ったのは他のチェックポイントではなく

ここから遙か下の道路。そして、私は……このボールを！」

大和「！！しまった！ワン子作戦3だ！今だ！」

一子「え、え？だって勝ってるでしょこれ」

京「投げる！」

京はボールを大遠投した。

そのボールの落下店には

クリス「！ 飛んできた！（キャッチ！）」

見事だ京。お前がパートナーで良かった」

下でクリスが待っており京の投げたボールをキャッチする。

一子「まずい！下でクリがボールを受け取ったのね！」

ワん子は急いで道路を駆け下りた。

京「ボールを持ったパートナーさえゴールすれば勝利」

大和「やるな。チエツクアイテムがボールと決まってるから

たくらんでやがったな」

優子「でも普通あそこまでの距離を投げるなんて普通男子でも難しいわよ」

明久「京はウチの狙撃手だからね。アレくらいは余裕だよ」

京「弓矢があればもっと遠くに撃ち込めるんだけどね」

大和「クリスとの差が開きすぎてる…ダメか」

秀吉「あの差ではいくらワン子でも難しいじゃろこの」

明久「……」

京「ふふふ。大和は悪くないよ」

大和「京」

京「大和は風邪で良く頑張ったよ。よしよし。

私が、看病しつつ慰めてあげる……任せてね」

大和「あの、僕トイレ行ってきます」

京「……また逃げる」

秀吉「京は恐ろしいのう」

くクリスと京の策く（後書き）

さて、大和VSクリスの勝敗の結末は？

皆さんの感想お待ちしています。

く大和VSクリス 決着く

クリス「ふふ、後ろから犬が健気に追ってきてるが、
150mは離れているな。余裕だ」

ボタン

クリス「お……！なんだ犬が転んだぞ！大丈夫か？
む、立ち上がった。問題ないか」

そこでクリスはワン子の異変に気がついた

クリス「……あれ？速度が遅すぎる…あの走り方、犬め足を痛めた
な。

ふふ、これは余裕の勝負になったな。
気持ちいいランニングとなりそうだ」

.....

京「………大和遅いなあ」

秀吉「本当じゃのう。どこまで行っておるのかの」

京「……………あああああ！！！」

優子「ど、どうしたの椎名さん！？」

秀吉「いきなりどうしたのじゃ大声なぞ出しおって」

明久「京にしては気づくの遅かったね」

京「知ってたの明久」

秀吉「どういうことじゃ？」

明久「僕見てたもん。京がボールを投げた時、

後ろでワン子が大和にサインボールを渡していたのをね」

京「ボールを持っているのは大和の方が…………！」

優子「全然気がつかなかったわ」

明久「その後、大和は服の中にボール隠していたしね」

京「でも分からない。ワン子が追いかけてるなら

クリスは油断せず走るからすり替える意味ないのに」

優子「そうよね。川神さん足速いから

油断したら負けるかもしれないし」

明久「さっき審判している八雲からメールきてさ」

優子「八雲君からメール？」

明久「ワン子が道路で転んでケガしてノロノロ走ってるって、
もうチエックポイントはいいからゴール地点に来てくれって、
で、治療の準備しておいてって」

秀吉「ワン子が怪我をしておるのか」

京「それをクリスが見ていれば……」

明久「少しは油断して楽するかもね。

クリスは100%ボール、ワン子が持つてると思っただろうし」

京「クリスの携帯……！は番号知らなかった。

裏道から走った所でクリスを抜けるとは思えない。

けど……大和なら……私のヒーローならもしかして」

秀吉「……色々複雑じゃのう京も」

.....

大和は林の中を走り続けていた。

大和「げほっ、ごほっ ごほっ。 はあ ハア 負け
ねえ！」

大和は懸命に林の中を走り続けた。

そして

大和「ここだ……」

昨日、百姉と八雲に川の中へ放り込まれた場所。

ここから川へ飛び込めば最速のショートカット。

が、かなり高い上に5月の冷たい川。そして大和は風邪を引いている。

大和は一瞬だけ戸惑ったが……

大和「揺ぎ無い意志を糧として闇の旅を進んでいく！

くだらない事でも、俺は負けたくねーんだ！」

大和は叫びながら跳んだ。

.....

ガクト「クリスこっちだ、俺様にタッチすれば勝ちだぜー！」

愛子「頑張れクリスー！」

クリス「ふっ、ゴールが見えたぞ、犬は遙か後方。」

風邪とはいえ、ぬるい勝負だったな直江大和」

ガクト「大和、こつちだ。俺様にタッチすれば勝ちだぞー！」

康太「……………頑張れ大和」

クリス「！？ どこに向かって言ってる」

そして川の上流から、直江大和が走ってきている。

クリス「！？ 何故？ いやボールは犬が……………」

クリスは後ろを振り返った。

遙か後方で、一子が確かにニヤリと笑っていた。

クリス「しまった！ ……！」

そこでクリスが気づき全力疾走する。

だが、間に合わない。

大和「俺の勝ちだああーっ！！！！！」

ガクト「おいおいおいおい、飛び込んでくんのかよ！！！！！」

百代「おい、避けるなよ！」

ガクト「チツ、しょうがねえ来い！」

クリスが手を伸ばしてくるが遅い。

大和は勢いよく突っ込んだ。

ガクト「おわあー!!ビチヨビチヨじゃねーか!?!」

百代「勝者!直江大和!」

クリス「…………クツ。負けたのか…………」

大和「ふ、そうだ…………ゼエ…………ハア、お前の負けだ」

クリス「むむむ」

〜和訳〜

クリス「なるほどそういう作戦だったのか」

大和「ハア……ハア……ワン子、いい演技だったな」

一子「あはは、こけるを思い切り良すぎて血がでちゃった」

大和「ありがとうな」

一子「フフン、アタシやれば出来るんだから」

八雲「ほら動くなワン子。手当てが出来ないだろ」

一子「くっはー。消毒液がしみるわー」

百代「大和も根性見せたが、敗因はお前自身だクリ」

クリス「……転んだ犬を見て、気を緩めてしまった。

……明らかに自分のミスだ」

大和「少しはゼイ、ハア、分かったか俺の実力」

クリス「……ああ。許せ。お前は強い男だった。

自分自身が未熟。またそれを思い知らされた」

大和「ふふ、分かんないんだ！分かれれば！　ガクリ」

バタッ

一子「あ、やっぱり限界だったわね」

京「看病しましょう。まず熱をはかります」

明久「熱を計るのに股間に手を置こうとする意味がわからないけど」

翔子「……………」

雄二「…………翔子お前何考えてる。…………真似するなよ」

翔子「…………ダメ？」

雄二「ダメだ！」

翔子「…………ケチ」

優子「この旅行で代表のイメージが…………」

愛子「いいじゃない。面白いんだから」

……………

大和「ぬ…………ウ？こっちは…………」

気がつけば、皆で仲良く昼食をとっていた。

京「ようやく起きたね。2時間ぐらい寝てたよ」

大和は京の膝枕で寝ていた

そのあと大和は京から薬を受け取りまわりを見渡した。

百代「ほら、クリ。さっさと携帯番号皆に教えろ」

クリス「ああ。ちょっと待ってくれ……よし、赤外線送るぞ」

一子「オツケオツケー」

明久「うん、来たよ」

雄二「俺もだ」

秀吉「ワシにもきたのじゃ」

康太「……………来た」

京「こっちも問題なし」

一子「うっは、クリのメアド、EDOとか入ってるわ!」

クリス「ふふ。幕府の名前を使わせてもらった」

明久「逆に得意げだよ!」

秀吉「よほど日本が好きなのじゃな」

ガクト「俺様こねえな。近づけてくれ」

クリス「はいもう1度」

八雲「おー。俺も来たぜ」

ガクト「こねえええええ!!!」

クリス「じゃあガクトは教えなくてもいいな」

ガクト「じよ、冗談だろ……俺様だけハブかよ……

女は怖いぜ……もう、いつそ男がいいな……」

明久「ちよ、クリス！ガクトが危険な暴走する前に
教えてあげて」

秀吉「そ、そうじゃ。教えてあげるのじゃ」

康太「……………（コクコクコクコク）」

クリス「もう1度。赤外線照射！」

ガクト「キタキタ俺様に来たぜ！ははは、やっぱり女最高」

明久「ふー危なかった」

八雲「そうだ。ついでだし霧島たちのも教えてくれよ」

翔子「……………私たちの？」

八雲「ああ、今回の件で色々仲良くなったしな。
イヤじゃなければだけど」

翔子「……私はいい」

愛子「私もいいよ！」

優子「アタシもいいわ」

黛「……おお。ま、松風。赤外線とか何ですか？」

松風「ば、まゆっち……そんな事も知らんで女子学生なんて
ジョブやってんのかよ。やべえって」

黛「しょぼんです」

百代「まゆまゆ。帰ったら携帯を買いに行こうな」

黛「え……」

八雲「ないとすぐ連絡つかないだろ？」

一子「大丈夫、携帯安いのはトコトン安いから」

明久「うん。毎月の電話代はかかるけどそこを気をつければ……」

秀吉「そうじゃぞ。ワシも最近携帯を持ち始めたのじゃ。
あれば便利じゃぞ」

雄二「ムツツリーニが安い場所知ってるからな」

康太「……………任せろ」

クリス「自分も一緒に行こう。まゆっち」

愛子「私も一緒に行つてあげるね」

明久「ようやく松風もストラップの役目を果たせるね」

松風「……………」

秀吉「む？しゃべらないのかの？」

黛「あああ幸せです、私の心にも春が来ました」

八雲「本体がこれじゃあな」

皆で「ハハハハハ、と笑いあう。」

大和「すっかり馴染んでるじゃん」

……………

八雲「よし。後はお前達に川神魂を授けるぜ」

クリス「川神魂？」

翔子「……聞いたことある」

雄二「Aクラス戦のとき明久に言っていたヤツだな」

八雲「ああ、そうだ」

百代「こういう詩がある。

光る町に背を向け、我が歩むは果て無き荒野、
奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ、
揺ぎ無い意志を糧として、闇の旅を進んでいく。
これが川神魂だ」

ガクト「あえて荒野を行かんとする男の詩だぜ」

一子「女の子のアタシだってわかるわ」

八雲「まあ一言でいえば『勇往邁進』だな」

クリス「勇往、邁進」

黛「困難をもともせず、突き進む事ですね」

優子「いい言葉ね」

クリス「前に進む意志が溢れている」

百代「辛いときは口にするといい。

同じ旅に行く仲間がいる。力が出るぞ」

八雲「それさえ刻み込めば他には何も言う事ねーな」

明久「そうだ。せっかくだし皆で乾杯しようよ」

百代「いいなそれ。皆飲み物持つんだ」

皆に飲み物が配られる。

一子「皆行き渡ったわね。キャップ！」

八雲「えー。若葉かおるころとなりましたが……」

一子「堅苦しいわよー！」

ガクト「小学校の校長かテーマは！」

八雲「分かった分かった。じゃあ簡潔に行く。ゴホン。

楽しくやるうぜ。それで十分だ！カンパニー……！！

！！」

皆「カンパニー！」

14つのグラスががちーんとぶつかり合った。

11人のファミリーに加え、3人の準ファミリーの誕生だった。

〜四天王について〜

午後、俺達は観光する事になった。 芦ノ湖を横断する遊覧船。

八雲「いいねえ船首！風が気持ちいいぜ」

船はグングンと芦ノ湖の中心へ進んでいる。

一子「海賊船っぽいデザインが素敵だわー」

八雲「周囲にチラホラいる小船を砲撃よな！」

愛子「少し物騒だね」

康太「……………（コクコク）」

大和「砲撃機能なんて物騒なもんはないからね」

一子「えーないのー」

優子「普通ないでしょ」

クリス「大和、風をダイレクトに受けて熱は大丈夫か」

大和「あー。薬と八雲と百姉のおかげもあってスッキリしてるよ」

秀吉「気をわけてもらったのじゃったかの？」

大和「ああ」

優子「あの2人はそんなことできるのね」

愛子「少し次元が違う気がするよ」

一子「おー、あっちからも海賊船みたいなものが!」

康太「……………逆からきた船」

一子「イエーイー!イエーイー!」

八雲「イエーイー!イエーイー!」

八雲とワン子が元気いっぱい手を振ると……………。

きぬ「イイイヤツホ……………イ!」

あっちの側の船に乗ってるヤツも返事してきた。

大和「ははは。どこにでもいるな。元気のいい奴は」

秀吉「同じ年ぐらいじゃのう」

八雲「あれって確か……………」

大和「知ってるヤツか?」

八雲「ん?まあな。バイト先1つに料理好きな子がいてな。

確かその学園の先輩だな。よく店に来てたから覚えてる」

学校は俺達とは違うけどな」

大和「そうなんだ」

八雲「あ、でも知ってる学園だけ。あの学園には川神四天王の1人『鉄乙女』さんがいるからな」

大和「マジか！？あの乙女さんがいるのか？」

優子「鉄さんがいるんだ」

愛子「あれ？優子も知ってる人？」

優子「ええ、去年の秋にウチの学園と向こうの学園が3ヶ月学生を交換してた時にね。とても優しい先輩だったわ」

八雲「すぐにみんなの人気者になったからな」

愛子「それで川神四天王って何なの？
ウチの学園の文月四天王と同じようなもの？」

秀吉「ワシも聞きたいのう。ワシも詳しくは知らぬからのう」

八雲「まあだいたい同じだな。
違うのは『文月四天王』は武道と召喚獣の操作技術が高いヤツのことだな。

武道で2人、召喚獣で2人ずつ決められている。
まあ今は、九鬼揚羽さんたちが卒業したから3人不在だけだな」

愛子「じゃあ、1人はいるんだ？」

八雲「その1人は武道の座にいるウチの百代だな」

秀吉「そうじゃろつな。あの強さじゃしろう」

愛子「じゃあ『川神四天王』ってのは？」

八雲「『川神四天王』っていうのは川神市の武道最強の4人の事だな。

『川神百代』、『九鬼揚羽』、『鉄乙女』、『橘天衣』の4人の事だ」

大和「変わってないみたいだな」

優子「それって凄いわね」

愛子「身近にそんな人が居るなんて」

一子「さすがお姉さまだわ」

八雲「まあ、今は少し違うか……」

大和「どういうことだ？」

八雲「武道四天王最速を誇る武道家『橘天衣』が何者かに敗れたみたいだからな」

一子「え？あの橘さんが？」

八雲「ああ、だから四天王の称号は剥奪されるだろうし、

九鬼英雄の姉である『九鬼揚羽』も仕事に集中するみたいだから

四天王から脱退するみたいだしな」

大和「なら2人空席になるわけか」

八雲「まあそこは川神のジイサンが決めるさ。

さて、じゃあ話はやめて船を楽しもうぜ」

.....

午後4時、観光も終わり、荷物をまとめ帰る準備をした。

帰りは霧島が手配してくれたバスで帰っていった。

その道中

ガクト「すげえよ！リムジンかよ！」

明久「もう乗る機会はないね」

一子「ねえキャップ。もう隣で気分が悪いなんて言わないでよ」

八雲「ああ、大丈夫だって.....多分」

一子「多分って何なのよ！アタシイヤよ」

明久「ワン子は前の件があるから臆病になってるね」

大和「だな。ワン子静かにしろよ」

と、賑やかに帰っていった。

〜夜、真田寮に帰宅〜

八雲「ただいまー」

忠勝「おう」

八雲「ちょっととした冒険だったぜ。魚を売り捌いたぜ」

大和「そうだな。俺は川に飛び込んで風邪ひいたぜ」

忠勝「テメエ達は普通に旅を楽しめんのか」

黛「でも楽しかったです！！」

クリス「本当にな」

京「部屋に帰るまでが旅行だよ」

大和「どこの遠足だよ」

忠勝「ああ、クリス……でいいのか」

クリス「何だろっ源殿」

忠勝「殿って……なんか調子狂うなオイ。荷物届いてるぜ。ほらよ」

クリス「マルさんからだ。何だろっか？」

忠勝「確かに渡したぜ。で、真田。土産は？」

八雲「俺っていう存在」

忠勝「マジ殴っていいか？」

八雲「嘘だよ。持つて行くから茶菓子用意して待つてて」

忠勝「チ、調子に乗んなボケ。今回ただぞ。次は殺す。

洋菓子系と和菓子系どっちがいいかぐらいは

せめてもの慈悲で聞いてやる」

八雲「洋菓子系で」

.....

八雲「さすがゲンさんだ。部屋が凄く綺麗だ」

忠勝「ああ、掃除しておいたぞ。テメエの部屋から

ゴキブリでもでたら俺が迷惑なんだからな」

八雲「で、何やらお盆にケーキと紅茶がズラリと」

忠勝「ケーキ。まーたでかいのもらって食いきれねえ。

他のヤツらにも分けてやれ。味は相当いいと思っぞ」

八雲「本当にありがとうなゲンさん。

はい、これお土産。あっちで有名な箱根細工」

忠勝「ありがたくもらっておく」

八雲「今度はゲンさんも行こうな」

忠勝「……気が向いたらな」

八雲「その時を待ってるぜ」

その後他の皆を呼んで軽いケーキパーティを開いた。

さて、これから騒がしい毎日になりそうだな。

〜四天王について〜（後書き）

今回で箱根旅行編は終了です。

皆さんの感想お待ちしています。

まゆっち友達計画 1 - 1

（ 1 - C ）

1年C組

ここは真田ファミリーの1人、黛由紀江がいるクラスである。

このクラスでは今日、席替えが行われたのであった。

由紀江「席替えによって大チャンスが来ましたっ！」

まゆっちは友達を作るべく奮起していた。

由紀江「友達…友達…友達を増やすんです…」

松風「おう！確変入ったぜまゆっち！

とりあえず前後左右は押さえておきたいよね」

由紀江「そうですね！身近なところから攻めましょう。

まずはフレンドリーな笑顔から！」

そしてまゆっちは行動を起こしたのだが、

正直まゆっちの笑顔は気合が入りすぎて怖いので、

怖がられていた。これが友達の出来ない原因の1つである。

そして最後に隣に座っている女性に挨拶をすると、

彼女はまゆっちの笑顔にも動じず軽く会釈してくれた。

由紀江「お……お隣の大和田さん感じの良い方ですね！

ぜひともお友達になりたい感じですよ！」

松風「だなー！まゆっちと同じ地方編入組だし仲良くなれるかも
しれないんだぜー！アタックチャンスだまゆっちー！」

由紀江「は、はいっ」

女子「ま、また黛さんがストラップと話している……」

女子「こわいよお……」

再びであるが松風とはまゆっちが持っている携帯ストラップのこと
である。

それをまゆっちが腹話術で会話しているので周りには
1人でストラップと話しているこわい人という認識である。
そしてたびたびまゆっちは松風と話している？ので
周りから怖がられているのも友達が出来ない原因である。

由紀江「では、勇気を出して話しかけてみます！」

松風「いけー！かませまゆっちー！フランクに横文字とかでいって
みよー！」

由紀江「横文字っ！ハイレベルですね」

松風「いけーまゆっちー！」

由紀江「あの、ボンジュー……」

まゆっちは意を決して話しかけようとすると

伊予「ああーっ！何してんのよもっ！！」

いきなり大和田さんは席から大声をあげ立ち上がった。

由紀江「はい、すみません!？」

まゆっちもつられて謝ってしまっ。

大和田さんの大声で教室が静まってしまっ。

伊予「はっ、いやなんでもないで……ちょ……おトイレ行ってきま
すっ!！」

大和田さんはそれに気づき、顔を真っ赤にさせ教室から出て行っ。

由紀江「突然どうしたのでしょうか？」

ももももしかして私がおかしな話しかけ方したからでし
ょうか松風!？」

松風「いや、悪くなかつたよ！」

でもちよっと接近を焦りすぎたかもしれないなー？

次はもう少しゆっくり行こう! うつくしい日本語で!」

由紀江「はいっ!！」

黛由紀江

友達100人計画

達成人数14人

真田ファミリー（源さん込）+翔子・優子・愛子のみ

（河原）

由紀江「…うう、また誰にも話しかけられずに終わってしまいました…」

松風「…っていつか絶対皆から避けられているよな」

由紀江「やはりそうでしょうか」

松風「笑顔振りまいたのにな」

八雲「あれまゆっち？」

由紀江「あつ八雲さん」

八雲「どうしたんだ？たそがれちゃって……って
友達関係で悩んでいるって顔だな」

黛「なぜそれをつ！？」

八雲「見りゃわかるぜ。キャップの俺に相談してみな」

八雲はまゆっちの隣に腰を下ろす

由紀江「実は……（説明中）……というわけです」

八雲「なるほどねえ、まゆっちの性格からして
いきなりクラスにとけこむのは難しいかもなあ」

由紀江「入学して1ヶ月半経っているのですが……」

八雲「よし、わかった。なら1歩ずつ進もう。」

まずは1人だ。誰か具体的な友達候補はいるか？」

由紀江「友達候補………エへへ」

八雲「心当たりがあるみたいだな。なら手助けしやすいな。力にな
るぜ」

由紀江「や、八雲さん……あ……ありがとうございます……すっ！」

八雲「だから怖いよ。まず駄目な原因はソレだな」

↳翌日 とあるレストラン

八雲「とりあえずバイト先の1つに彼女が良く来ているから教えて
おこな」

由紀江「ありがとうございます八雲さん」

八雲「ここに通って何度も偶然を装って接近するのはどうだ？」

同じ店をよく利用することで印象づけるんだ。

それに何か困ったことがあったら俺も頼ればいいし、

店でバイトしてるから頼りやすいだろ」

こっちとしても助けやすいし、店の売り上げにも反映するし一石二丁だぜ。

由紀江「なるほど」

八雲「まあそれはさておき」

俺は1度振り返ると

八雲「何でお前らがいるんだ？」

そこには明久と雄二と秀吉、康太、ワン子、ガクトの姿があった。

明久「まゆっちが友達作るため頑張るって聞いたから」

康太「……………たまたま立ち寄っただけ」

雄二「八雲がおごってくれと聞いてな」

ワン子「右に同じよ」

ガクト「ぶっっちゃけると野次馬だ！」

秀吉「もちろん応援のためじゃ」

八雲「おごらないからな。

……………さて、次の情報だが、大和田伊予。10月7日生まれ A
B型……………」

由紀江「A B！いつしよです」

八雲「父母ともに健在でサイクリングが好き。

……………すまん情報はこれしか集められなかった」

由紀江「いえ、充分です」

一子「ねえあの子なんか誰もいないのにブツブツ言ってるに？」

由紀江「はい、ときおり何か聞きながらああいう感じに……………」

秀吉「まゆつちみたいじゃな」

由紀江「私と同じようなものなのでしょうが」

雄二「いや、それはないだろうな」

八雲「何言ってるか聞こえないから聞き耳立ててこよう」

由紀江「八雲さん、私も……………」

俺とまゆつちは少し大和田さんに近づき柱に体を隠しながら聞き耳を立てていると

伊予「ゲツツー！？ああーもう8回だつて言うのに

なんで無援護なのよ……………！三崎が投球頑張っているんだから打たないとー！」

八雲「どうやら聞いているのは野球のデーゲームぽいな」

康太「……今の時間だと七浜ベイスターズとナクルトとの試合中」

八雲「どうやら七浜ベイスターズのファンらしいな。それも熱血な」

由紀江「野球ですか……」

不良A「うーし、腹ごなしたし“川神”さがしにいくぞおめーら」

不良が大和田さんのいる席の横を通ろうとしていると

伊予「やったー！打ったー！」

大和田さんが喜び両手を広げ立ち上がった。

その手が都合悪く不良にあたってしまう

伊予「えっ？」

不良A「ねーちゃん“何”してくれてんだ？おお」

伊予「ひっ……！あ、あの、ごめんなさい」

不良A「ごめんですんだら“おまわり”はいらねえんだよアあ！？」

秀吉「なんじゃあいつらは？」

不良A「お、何聞いてんだおめえ？

ヒトと話す時は“イヤホン”外すのが礼儀だべ？」

伊予「あっ」

不良はそういうと乱暴に大和田さんからイヤホンを奪い取り自分の耳に当てる。

不良A「野球中継？七浜ベイかよ。だつせえ」

伊予「むっ」

不良B「おめえ七浜ファン？あんな負けっぱなしのチーム応援してんの？」

不良C「“ロッチ”に切り替えるよ」

伊予「今日は勝てそうなんです。か……返してくださいっ！」

大和田さんは震えながら不良たちに返してもらおうとしたのむと

バシイン

伊予「きゃあっ！！！」

由紀江「っ！！！」

不良が大和田さん突き飛ばす。

不良A「おいおい、そっちからぶつかつたクセに

なんだあその“態度”は、クズチームのファンはクズだな
おい」

伊予「わ、私のことはいいですけど、七浜を悪く言わないでくださ

い
「

不良A「まあいいわ。オメエちよつと付き合えよ。

結構好みのタイプなんだぜ」

伊予「あっ」

不良はそういうと大和田さんの腕をつかみ連れて行くところ。

伊予「や…ごめんなさ…い、いや…」

ガッ

伊予「えっ？」

そこへまゆつちが入って大和田さんから不良の手を離す。

不良A「なんだテメエ？」

伊予「黛さん!？」

由紀江「あ…謝ったのに乱暴はダメです…それに…

人の大事なものをバカにしたらいけません!」

伊予「ま…黛さん…!」

不良B「おうゴラ」

不良A「なんだテメエ!？」

不良C「売ってんのか? ああん?」

八雲「なんだじゃねえだろ」

そこで俺達も乱入

不良A「ああん?」

八雲「どっかで見たとあると思ったら、ちば軍団じゃねーか」

雄二「なんだ? 知ってるのか?」

一子「前にお姉さまにボコボコにされた人達よ」

ガクト「もう来ねえはずだろ」

不良A「げ、げえ! ? お、お前らはシルバニアファミリー!」

八雲「真田ファミリーだ!!」

明久「アレだけやられてもうつくるなって言ったのに

また来るとかバカでしょ」

八雲「それにウチの後輩に絡むとはな。またお仕置きが必要か?」

不良B「ひ、ひい」

不良A「お、おくするな。俺達にはあの方がいる」

不良C「おう、そうだったな」

不良A「橘の姉御お願いしやす」

不良たちが振り返ると2mくらいのゴリラみたいな化物じみた女性
が現れた。

不良A「このお方はかの武道四天王の橘天衣！

MOMOMOを倒すべく雇ったお人よ！」

八雲・由紀江「ブツーーーーー！！！」

俺とまゆっちは思わず噴き出してしまった

秀吉「ぶ、武道四天王じゃと!？」

雄二「あれが日本最強の1人だというのか!？」

不良A「川神を探す手間がはぶけたぜ？」

こないだの借り…利しつけて返してやる。そっちのベイ子
「！」

伊予「は…はいっ！」

不良A「テメエの落とし前はこの後でつけてもらっせー！」

八雲「で、俺たちはその橘さんと戦えばいいのか？」

不良A「おうよ。逃がさないぜ。」

早くMOMOMOYを呼ぶんだな」

八雲「いいだろう。相手しようじゃねえか。

ここだと店の迷惑になるから近くの河原に行くぞ」

雄二「おい、いいのか？」

八雲「大丈夫だ」

そして俺たちは不良たちをつれて近くにある多摩川へと向かった。

まゆつち友達計画 1 - 2

（多摩川）

不良A「さあ年貢の納め時だぜ。いつMOMOMOは来るんだ」

八雲「・・・・・・・・・・」

秀吉「どうしたのじゃ八雲よ？盛大に笑いをこらえておつて」

八雲「いやな。おかしな話なんだがな」

雄二「どうしたんだ？」

八雲「俺は橘さんと会ったことがあるんだよ」

雄二「そうなのか？」

八雲「百代と橘さんは戦ったことがあつてな。その時にな」

一子「そうよね。アタシの勘違いかと思っちゃった」

八雲「つまり何が言いたいかというとな。

お前のような橘さんがいるか！！

第一、橘さんは四天王以外にやられてもう四天王じゃない」

雄二「はあ？」

皆「「「「「はあああつ！？」」「」「」

不良A「ちよつと姐さん！聞いてないっすよ！」

不良B「アンタニセモンかYO！」

偽橘「ええい黙れ！強さは本物じゃき、

コイツらを倒せばいいんじゃないっか！」

明久「まゆつち」

由紀江「はい？」

明久は大和田さんと偽橘を交互に指差し

明久「GO！」

由紀江「え、えっ！？」

松風「なんかすげえスルーパスきたぞまゆつちー！」

由紀江「でですよね。そういうことですよね」

松風「もう行くしかねー！」

由紀江「あ、あの八雲さん」

八雲「ん？どうしたまゆつち」

由紀江「最初に私のお友達（候補）が絡まれたのでその……

この勝負…私にやらせてくださいっ！」

伊予「ま…薫さん！？危ないよっ！」

明久「大和田さん大丈夫だから見ててあげて」

八雲「……そうだな。かまわないが条件がある。友を守るため力を見せる。」

“お前が倒した強敵”を騙り返礼も含めてぶちのめせ」

由紀江「知っていたのですか？」

八雲「まあ予想はつけてたな。んで、できるか？」

由紀江「八雲さん…はい、大丈夫です」

まゆっちはそういうと一呼吸おいて刀を握り

由紀江「そういうわけですので、

文月学園1年C組薫由紀江、お相手します」

不良B「はあ！？俺らは“川神”に用があんだよ！」

八雲「このまゆっちに勝てないようじゃ百代がでる必要もない」

不良C「な、なめやがって！」

不良A「いいだろう。まずソイツをぶちのめしてやるよ！」

八雲「じゃあ、いざ…尋常に…はじめ！」

俺が開始の宣言をすると、

偽橘はまゆつちに向かって飛び出していく。
対するまゆつちはその場で刀を構えている。

偽橘「けえ〜い!」

相手は奇声をあげると同時に体に隠していた暗器でまゆつちを攻撃してきた。

雄二「いきなり暗器だと!」?

秀吉「見た目に反してセコイのじゃ」

偽橘「ははは!どんなもんじゃーい!」って

そこで土煙が晴れていくと

由紀江「威力は充分ですが…暗器を使う時は殺気も隠さなければ無意味ですよ」

攻撃を全てかわしたまゆつちの姿があった。

明久「おお!当たっていない」

一子「不意打ちを完璧に見切っているわ!」

偽橘「ふん!なにもあたしや暗器だけじゃないんだよ!死ねえ!」

ドゴッ

ただ殴っただけで地面がへこんでいた。

偽橘「どうだい！これは取ったろ………うっ！」

偽橘の目の前にはまゆつちが自分の腕に乗ったままこちらに向かってくるのが見えた。

由紀江「せいっ！」

偽橘「へげえっ！！」

まゆつちの剣筋は綺麗に相手の顎に入り切り上げていた。しかも峰で。

偽橘「プゲラ！」

八雲「それまで！勝負あり！」

不良B「にせ橘の姐さ〜〜ん！！」

雄二「でかしたな黛」

一子「あの巨体を一撃！やるわねっ」

八雲「さて、お前たちどうする？」

俺は不良たちのほうを振り向いて尋ねる。「

不良A「いえ！結構です！観光ですから！

川神いい街ですよね！ごきげんようっ！」

不良たちは一気に逃げ出そうとするが

雄二「まあそういうなよ」

ガクト「もう少し遊んでいこうぜ。なっ?」

ガクトや雄二たちにつかまりボコボコにされた。

八雲「まゆっちお疲れさん。さすがというべきかな」

由紀江「いえ、そんな…」

八雲「そんなわけで一段落したしさ」

俺は大和田さんのほうを向いて

八雲「大和田さんに言う事あるんじゃない?」

由紀江「えっ!? えええっ! いやまだ心の準備が!」

八雲「大丈夫! いいとこ見せだしフラグは立ってる!

ドカーンと行って話でもして来い!」

俺はまゆっちの尻を叩いて大和田さんの前まで出させる

由紀江「うひゃっ!」

松風「おいコラ八雲! セクハラ!」

由紀江「はっ！あああ改めましてこんにちは大和田さん！
大丈夫でしたかっ！」

まゆっちは笑顔？で挨拶をする

伊予「う、うん。凄いね黛さん驚いちゃった」

由紀江「えと……それですね……」

松風「しゃー！世間話だーイケー！」

由紀江「や…や…野球好きなんですわね！」

伊予「えっ！」

まゆっちの大声による質問に驚いたかと思うと

伊予「……………あ…ああ…やっぱり聞かれていたんだ…恥ずかしい。
変だよな？女の子なのに野球大好きで、しかもベイファンだ
し……」

大和田さんの顔が見る見るうちに赤くなった。

由紀江「いえ！」

そこでまゆっちが大声で否定する。

由紀江「わ、私もこんな剣とかやっていますし！おかしくないです！
むしろお友達になりたい感じです！

大和田さん雰囲気良くてちょっとストーキングしたちし

て……」

松風「いやいやストーキングはイメージ悪くねえ！」

由紀江「ああっ！慣れなくて言葉が出ません！」

伊予「友達……」

今度はまゆっちは顔を真っ赤にさせパニックっていた。

伊予「あはははっ黛さんいい人なんだね。

きっかけはこんなんだけど話せて嬉しいな。

良かったらこれからも話してくれるかな友達として」

由紀江「！！！！……」

そこでまゆっちが俺のほうを振り向いたので俺は親指を立てて返事をする。

由紀江「……！一筆！！奏上！！！！せやあ！！」

『我が世に春が来た』

由紀江「今の気持ちを書にしたためました！」

松風「いえあー！ほとぼしる魂の一筆！」

由紀江「スタッフー！スタッフー！これ飾っというー！」

松風「任せろー！神棚に入れてやるぜー！」

伊予「うん、でその腹話術がなんなのか教えて欲しいかな」

八雲「おい、まゆっち落ち着けよ」

その後落ち着いたまゆっちは大和田さんに簡単に松風の事を話し、この前俺達と買いにいった携帯でメルアドなどを交換した。

大和田さんは松風の事をすんなり受け入れてくれた。

帰った後はまゆっちにメールの送り方を教えてあげた。

最初は読むのが面倒なほどの長文を送ろうとしていたので焦ったが

……

なんとかそちらのほうは事なきを得た。

黛由紀江

友達100人計画

達成人数15人

転入生1 熊とロリ

（朝のHR）

梅子「突然だが今日は転入生を紹介する」

Aクラスとの試召競争以降俺達の担任は梅子先生に副担任が鉄人とある意味最凶の教師に変わったのであった。

八雲「転入生？突然だな」

F男子「女子はいますか？」

Fクラスの男子全員（俺、雄二、明久、秀吉以外）の男子が一斉に先生に質問した

梅子「ああ、いるぞ。転入生は2人いて男と女1人ずつだ」

F男子「女子キタアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

皆大はしゃぎだ。だから男子もいるんだぞ。

梅子「入りたまえ」

ガラガラガラッ！

扉が開かれると大きく丸々とした男子が1人と

小学生みたいな女子が1人教室に入ってきた。

梅子「では、自己紹介を」

満「えつと熊谷満くまがいみつるです。」

食べる事が大好きです。よろしくお願いします」

と熊谷が自己紹介を終えると鞆からパンを取り出し食べ始めた。

梅子「おい、熊谷HR中に食べるな」

満「す、すみません。つい」

食べる事がよほど好きなんだろう。気が合いそうだ。

梅子「では、甘粕自己紹介を」

甘粕「はいっ！甘粕真与と言います。家庭の事情で転校してきました。」

皆さんと仲良くしていけたらと思います。

これからよろしくお願いします」

そこで一瞬静まると

F「ロリっ子来たあああーーーーー！！！」

F「やべえ今までロリ否定してたけどこれはマジでいいわ」

F「「こちらこそよろしくー！！！」」

男子学生の叫びが教室にこだました。

梅子「ええい、うるさい。静かにせんか！

2人とも空いてる席に座るといい」

甘粕「はいっ！」

満「はい」

そこで2人は席に着いた。

ちなみに今俺達の席は

教卓

姫路 島田

クリス

京 大和 秀吉 康太

甘粕 一子 百代

満 八雲 明久 雄二

源 ガクト

となっています。

Eクラスとの戦争で勝った為設備を交換したときに

席替えしました。

梅子「さて、今日の伝達だが来月行われる“清涼祭”の時期になる。何をするか決めておくこと。

それともう1つ、来週行われる“文月ボール”についてだ。

私達のクラスはAクラスとの試合になるから心してかかれよ！以上で伝達を終える」

梅子先生はそういうとHRを終わらせ教室から出て行く。

八雲「そういえばもうそんな季節か」

甘粕「あの……すみません……」

八雲「ん？」

甘粕「えつと……」

八雲「ああ、俺は真田八雲っていうんだ。よろしく甘粕さん！に熊谷！」

甘粕「あっはい！これからよろしくお願いします」

満「よろしく」

そこで俺たちは軽く自己紹介すると

甘粕「それですねお聞きしたいことがあるんですが？」

八雲「なんだ？」

甘粕「あの“文月ボール”っていうのは何なのでしょう？」

大和「そういえば俺も気になった」

クリス「自分も気になるぞ」

八雲「ああ、文月ボールっていうのはウチの学園の名物で、

ルールは野球と基本的に同じなんだが、走者への妨害ができたり、

召喚獣を操作して守備を行うことができるなど

全体的にサバイバルな競技のことだ。しかも試合は前半と後半の時間性だ。

んで、毎年2年が各クラス毎に試合を行う。

これは一般公開もされるし、1年生も見学するので

1年生はコレを見て召喚獣の操作なども見ることが出来るんだ。

まあ学園の宣伝もかねているな。

ウチの学園はこのようない行事が多いからな。楽しまない」と

甘粕「へえ、そうなんですか」

明久「でも、気をつけないといけないのはやっぱり怪我かな？」

大和「そんなに激しいのか？」

百代「ああ、去年はひどいヤツで骨折や1ヶ月の入院もあったな」

甘粕「そんな事が……」

八雲「まあ、そこまで気にする必要はないな。
で、雄二。スタメンとか考えないとな」

雄二「だな。相手がAクラスなら負けるわけにはいかないしな」

康太「……………そういえばAクラスにも転校生が来るらしい」

八雲「へえ、Aクラスにね」

康太「……………情報では明日来るらしいが」

八雲「……………なら仕掛けるか。仕掛けて仕損じはないし」

明久「どうしたの八雲？」

俺は教卓の前に立つと

八雲「おーい皆聞いてくれー！

ムツツリー二の情報で明日Aクラスに転入生が来るらしいが
性別もわからなくて、謎に包まれているだろ？
どうせなら男か女か賭けないか？」

雄二「またか」

須川「いいな。真田が胴元になるのか」

八雲「ああ。手数料なんざとらねえよ。男か女か1つに絞って賭けるってことで。」

で、札は1枚千円。配当はどっちも2倍、公平だろ？」

甘粕「ちよつと真田君！」

百代「よし、乗った！私は女に10枚だ！！」

八雲「おー早速か。買うねー毎度あり。ちなみに上限1万ね

つてか百代、金大丈夫なのか？」

百代が自信満々に買ったことで他のメンバーも買い始めた。

八雲「俺はバイトしまくっているから大勝ちしても金の心配はするなー」

須川「情報がねえからわからねえな。俺は男に5枚！」

八雲「おー買うねー。毎度ありー」

甘粕「ちよつと皆さんこんなことやめましようよ」

忠勝「はっ……くだらねえが…小遣い稼ぎにやいいか」

一子「ちよつと軍師大和、これどつちななのよ正解は？」

大和「……ヒントだ。お前は1度あったことあるし手合わせもした」

一子「ん？……あつ！わかったわ！キャップ女に5枚よ！」

明久「僕も女に5枚で！」

クリス「私はこういうことは……」

甘粕「ああ、クリスマスさんはいい子ですね」

一子「あれクリはやらないの？ださいわね」

クリス「なんだと！やってやる！！キャップ男に5枚だ！！」

八雲「毎度ー！」

甘粕「あああああ、皆が悪い子になっていきます」

雄二「元から悪いヤツらだからバクチにも乗りやすいんだろ」

甘粕「私がいるのに」

ガクト「あまり気にすんなって。よし、俺様も札買ってこよう」

甘粕「島津さんだけでも不良の道から救い出さねば

しがみついても止めてみせます」

ガクト「おーいキャップ。女に3枚！！」

甘粕「うわわわわ」

八雲「毎度！おいガクト、甘粕を引きずってる！」

ガクト「え？あ、ああ悪い掴まってるの気付かなかった」

甘粕「あううう（ちょっとピョロっている）」

八雲「大丈夫か甘粕」

甘粕「だ、大丈夫ですよ」

群集心理とでもいうか皆が買っていると

俺も一枚ぐらいとなるわけで、

結局クラスの大半の人間が一枚は買っていった。

買っていないのは胴元である俺と、情報を知っている康太、

そして甘粕さんのみである。

そして放課後は熊谷と意気投合し商店街を食べ歩いて帰った。

転入生1 熊とロリ（後書き）

今回は熊谷と甘粕の2人を登場させました。

今回はあの人が転入してきます。

もう少しあとになりますがちやんと義経たちも登場させるつもりです。

これからも応援よろしくお願いします。

感想お待ちしています。

Fクラスの日常？

（翌日）

今日は珍しくファミリーの皆とではなく
クマちゃんと一緒に登校してきたのだ。
クマちゃんとは昨日転向してきた生徒だ。

それはとあるケーキ屋が朝一に数個だけ
珍しいケーキを販売しているという情報を聞いたので、
2人で買いに行ったのだ。

行ったかいてもあり俺とクマちゃんは1個ずつそのケーキを手に入れ
ることができた。
ケーキは昼休みに食べる予定なので今は鞆の中にしまっておいてあ
る。

（HR後）

俺達が他愛もない話をしていると

八雲「……………ん？」

百代「……………なんだこの気配？」

八雲「……………百代も気づいたか？」

百代「ああ」

明久「どうしたの2人とも」

百代「学園が、何者かに囲まれているな」

八雲「気配を殺してはいるが……だいたい100人程度か」

雄二「そんなことまでわかるのか？」

八雲「この訓練された気配からすると軍隊だな」

姫路「軍隊ですか？」

甘粕「GUN？」

百代「ああ、この気配しかも遭遇した覚えがあるぞ」

八雲「ああ、なるほど。そういうことか」

秀吉「どういうことじゃ？」

八雲「答えは簡単だ。今日Aクラスに転校してくるヤツだ」

明久「ああ！クリスの知り合いの」

秀吉「そういえばそんなこと言っておったのう」

ガラッ

そこで扉が開かれる音がした。

クリス父「今日もバルド海のように美しいなクリス。

誰かお前を困らせている者はいないか？」

そこにはクリスの父親の姿があった。

雄二「そこで名前が出たヤツはやはり……」

クリス父「55口径の滑空砲をブチコムまでだ」

康太「……戦車で乗り込むつもりだ」

クリス父「それ以外にマルギッテ少尉の特殊部隊が学園を取り囲んでいる」

京「なるほど。不穏な気配がしたはずだ」

明久「まるで戦場だね」

康太「……それなら俺は戦場カメラマン」

明久「でもムツツリーニは女性専門でしょ」

康太「……そんな事実は確認されない(ブンブン)」

明久の言葉を否定するように康太が首を振りまくる。

クリス父「前にも言ったように。マルギッテをこの学園に目付役として

……建前は生徒だが派遣しておいた。
何かあれば彼女に言うが良いぞ。
では私は部隊とともに引き上げよう」

そういうとクリス父は何やら電話で連絡を取り始めた。

く昼休みく

康太「……見てきた。やはりこの前の軍人だった」

明久「着物にメイドに軍服……2・Aは濃くなるね」

康太「？……何の話だ？」

満「話題は男の在り方だつて。もぐもぐ」

明久「それおいしそうだねクマちゃん」

満「真田君と一緒に買いに行ったんだ。

吉井君も今度一緒に買いに行く？」

明久「ん〜そうだね。今度一緒に行ってもいいかな」

満「もちろんだよ。もぐもぐ」

須川「男なら1度は独り暮らししてみたいよな」

近藤「でも、独り暮らしって金かかるだろ」

横溝「それは人それぞれだろ。直江はどう思うよ」

大和「必要なら独り暮らしもする。

ただ必要ないのにするのは非効率だな」

須川「つてか直江は寮生活だろ」

近藤「まあ1回は家を出て生活始めてみるのは良いんじゃないか。

精神的に成長するだろ」

英雄「フハハハ！庶民の考え方だな」

明久「うわっ、九鬼君！どこから！！」

英雄「我はヒーロー。どこからでも現れる！

お前の考えはおおむね正しいぞ！

庶民の目から見ればな！全く庶民は愛おしいなあ！」

明久「えっ？否定からの肯定？」

英雄「ただ我は違うぞ。例え独り暮らしをしても家事をする人間を
雇い

すべてをやらせるだろう。我は選ばれし者。

いちいち家事に時間をかけてはおられん、適材適所というも
のがある」

雄二「選ばれし者が洗濯もできないってのはな……」

英雄「フハハハ！愚か者が！やろうと思えば出来る！

だが我のようなビジネスはお前たちにはできない！
結論言つと庶民は働け。そして我は一子殿ラブ！」

真与「ワン子ちゃんなら真田君とどこか行きましたよ」

英雄「むっ、話に夢中で見失つておったか。

では我はこれにて」

英雄はそついうと去っていった。

く昇降口く

八雲「危ないな。またも英雄に迫られるところだったなワン子」

一子「そ、そうだね」

八雲「お前、英雄のことを苦手そうだから連れてきたが……

ダメだったか？空気よんだつもりだったんだけど」

一子「ううん、サンキューキャップ」

八雲「まあ仲間が困っていたら助けるさ」

一子「むー」

八雲「どうした？腹減った？トイレ？宿題忘れたか？」

一子「お腹も減ったけど、九鬼クンの事。

好き好き言われてもアタシどーいたらいいの…
いつもこれ思うんだけどさ、嫌いじゃないよ全然。
でも嫌いじゃない人に嫌いなんて言うのできない」

八雲「落ち着けワン子。

英雄が一方的に言ってきた事だ。

お前はゆっくり考えて結論を出せばいいさ」

一子「うん……そうだね……」

八雲「じゃあ教室に戻るか。

さて、お楽しみにケーキ、ケーキ」

一子「ケーキ！」

八雲「うおっ！いきなり元気になったな」

一子「ケーキってなに？」

八雲「朝クマちゃんと並んで買ってきたんだ。

一口だけなら分けてやるぞ」

一子「わーい！ありがとうキャップー！」

武神VS軍人?!?

「Fクラス（場所はEクラスの教室）」

クリス「直江大和……やはり自分はお前の考え方が気に入らない」

大和「へっ、これが俺のやり方なんだよ」

何故か大和とクリスは口げんかしていた。

明久「まただね」

雄二「いつ見てもあきねえな」

もうこれはファミリィ内ではいつものことなので誰もきにしてい
ない。

そこへ

ドンッ!!

明久「ゴペッ」

皆「……?!?」「」「」「」

そこには吹き飛ばされた扉に巻き込まれた明久と軍服をきた女性の
姿があった。

マル「今、クリスお嬢様の声が聞こえたが……」

誰がお嬢様を困ませたのだ？

事と次第によつては狩る（jagd）！！」

F「どちらさまーッ！？」

雄二「お、おい明久大丈夫か？」

明久「な、なんとか……」

クリス「マルさん！！」

マル「おい、そこのお前。クリスお嬢様となにをしていた？

なにやらお嬢様が困っていたように見えたが……」

マルギツテはそういうと大和に近寄り、腕の関節をきめていた。

マル「事と次第によつては五体満足でいられると思うなよ」

クリス「ま、マルさん違うんだ！」

マル「お嬢様」

クリス「とりあえず大和を放してくれ」

マル「……わかりました」

マルギツテはクリスにそういわれると大和から手を放した。

クリス「では、皆に改めて自己紹介をしておく。

この女性はマルギツテ・エーデルバツハ。
父様の部下で自分の姉のような人だ」

マル「マルギツテ・エーデルバツハです。覚えてなさい。
何やら誤解があったようです。謝罪しましょう」

百代「おいおい、随分と上から目線だな」

そこへ百代が現れた。

マル「お前は……」

百代「マルギツテとか言ったな。文月学園へようこそ」

マルギツテ「……こちらこそよろしくお願いします」

百代「ふ。見るからに年上にそう言われるのは面白いな。
ここで勝負しろ、マルギツテ」

明久「姉さん、いきなり？」

百代「マルギツテはワンス子達をいきなり襲ったんだぞ。
お互い様だろう。なあ」

雄二「穏やかな状況じゃなさそうだな」

秀吉「殺気が凄いのじゃ」

康太「……冷や汗が止まらない」

百代「お前はなんとなく私と同じ匂いを感じる。
戦えば楽しくなるかもしれないぞ」

マル「…ふ。その言葉そうくり返してあげます百代。
聞きなさい。私もあなたと戦ってみたかった」

百代「ならば問題あるまい。時は今、場所はここだ」

マル「……が、私は軍から1つ命令を受けている。

川神百代とは交戦するな危険すぎる、と
だから戦うわけにはいかないと思いなさい」

百代「……ふっ軍か。ただの飼い犬だったようだなお前」

クリス「百代さん。マルさんは……！」

マル「ただ私は1つサガを持っている。驚いたほうがいい。

それは強きものを見ると手合わせしたくなる心！

この甘美なる誘惑の前には私といえど命令無視も辞しません」

明久「！戦う気だよマルギツテさん！」

雄二「ここですか!？」

クリス「ま、マルさん！命令違反は危険だと思っ」

マル「申し訳ありませんが、性分なので諦めなさい」

百代「……ふ。飼い犬発言は訂正しよう。お前もまた、戦士だ」

忠勝「ピリピリ来るな。両方すげえ気合だ」

F「すげえ俺達の目の前であの武神の戦いが見られるのかよ」

いつの間にか教室の中には百代とマルギッテの2人しかおらず、皆は廊下から観戦しようとしていた。

大和「クリスこれ戦いはじまっちまうぞ」

クリス「一騎打ちとなれば、とめられるはずもない」

大和「ん、まあそうなんだが……」

クリス「皆、もう少し離れたほうがいい。」

マルさんが本気を出すなら巻き込まれるぞ」

忠勝「巻き込まれるだど?」

雄二「相手はあの武神だぞ?」

秀吉「始まるのじゃ」

Fクラスで百代VSマルギッテの戦いが今始まるうとしていた。

武神VS軍人?!?

マル「覚悟しなさい！」

百代「来い！」

マルギツテが跳躍して、百代に襲い掛かった。

マル「はあああっ！！！！！」

裂帛の気合を込めた蹴りの連打。
鍛えに鍛えた格闘術を、百代に繰り出していく。

百代「遅い！！！」

マル「ぐはっ！！！」

百代の回し蹴り一発で机や椅子を巻き込んで吹き飛ばされてしまった。

ガクト「また1撃かモモ姉は」

京「いや、浅かったみたい」

マル「H a s e n J a g g d ! ! !」

マルギツテは即座に立ち上がっていた。

百代「武器も構えて……スイッチが入ったか」

マル「シッ!」

嵐のようなトンファアの乱撃。

百代「見切った!」

百代の手のひらがトンファアをつかみ取る。

マル「高速で回転しているトンファアを手掴みで!？」

マルギツテが驚くと同時に、腹部に蹴り。

マル「ぐッ……!」

再びマルギツテは吹き飛ばされた。

今度は倒れることなく体勢を立て直そうとするが……

百代「なかなかの防御力だ!」

次は百代がマルギツテに向かって突進してきた。

マル「チッ」

トンファアでガードを固めるマルギツテ。

しかし、己のトンファアにヒビが入っていたのをマルギツテはその目で見てしまった。

武器を握られた時、既に武器も破壊されていた。コレでガードしても何の防御にもならない。

百代「はっ!!」

世界最高峰の木で最高の職人が作成した自慢の武具がこうも脆く砕かれるとは……

それを理解した時、再びマルギツテは蹴り飛ばされていた。

マル「ぐはあっ!!!!」

地面に倒れるマルギツテ。受身もままならない。今のでまた机などが吹き飛ばされた。

明久「あつ八雲の鞆が……」

今の衝撃で八雲の鞆も巻き込まれてしまった。

雄二「今度こそ決まったか？」

百代「まさか。これからが本番だろう。なあ」

マルギツテは立ち上がると、腹を抱えこみ……。

マル「……ふ、ふはは、ははははは!!!!!!」

笑った

マル「今日は気分がいい……だから見せてやろう。」

この幸運を神に感謝しなさい」

マルギツテはそういつとつけていた眼帯を外す。

マル「……ふうう……」

明らかに先ほどまでとは気配が違っていた。

京「今まで猛々しかった気が驚くほど静かに……
でも強さはこちらのほうが上だね」

秀吉「先ほどから肌がピリピリするのじゃ」

マル「世界を両目で見るのは久しぶりです」

予備のトンファーもどこから取り出していた。

クリス「自己制御装置みたいなものだ。あの眼帯は」

明久「某漫画の隊長さんみたいだね」

マル「いわゆる自分で自分に課したハンデみたいなものです。
能力が高すぎるのも問題だ」

雄二「本当みたいだな」

マル「全力を尽くして戦える相手に感謝します。
貴方に感謝した私にも感謝したほうがいい」

百代「おしゃべりになったただけか？さっさと来……」

マル「もう行っている」

百代「むー！」

マルギツテがトンフアーを構えた瞬間、彼女は既に百代に肉薄していた。

マル「喰らいなさい！」

その光景を見ていた周囲の皆が啞然として見つめていた。勝負を一撃で決めていた百代が防御に回っている。

百代「速いな」

さっきまでマルギツテとは動きが違った。

トンフアーをガードする重い打撃音が響き渡る。

百代は防ぎながらも後退を余儀なくされていた。

雄二「凄いな。本当に竜巻みたいだ」

クリス「だから巻き込まれると言ったんだ」

大和「モモ姉が押されるなんてな」

百代「ふふ……ははは！」

マル「!?!」

百代も笑った。

瞬間、マルギツテは大きく後退した。

マル「何だこの殺気は……」

マルギッテの全身から汗が噴き出していた。
いや、マルギッテだけでなく、
周囲で見えていたものも汗を噴き出していた。

雄二「なんだ？あ、あの気は……」

中学の頃、悪鬼羅刹と言われていた雄二でさえ冷や汗を流していた。

ガクト「おい、これヤバくねえか？」

明久「うん、ヤバいね。このままじゃ……」

康太「……………百代なら大丈夫」

明久「うん、それは心配してないんだけど……」

雄二「どうしたんだ明久。心配そうな顔して？」

明久「このままじゃ姉さんが……」

秀吉「百代がどうしたのじゃ？」

百代「久しぶりの死合いだな」

百代の気迫が明らかに違っていた。
マルギッテも負けじと構えた。
2人が構えて、対峙する。

そのまま動かない。

大和「どうなってるんだ、あれは」

京「互いの発している気がぶつかりあってるんだよ」

雄二「先に動いた方が負けるってヤツか？」

京「いや、それとは違うかな。」

逆に、動かずに勝負が決まるかも」

マル「……はあ、はあ……はあ」

マルギツテの呼吸が荒くなり、汗もなおかき続けている。

逆に百代は汗1つかいてない。呼吸も冷静だった。

クリス「勝負あったか……」

マル「（なんだこいつは…本当に人なのか。」

この私が一方的に負ける？）」

マルギツテはドイツでは神童と言われてきた。

少なくともヨーロッパでは眼帯をとれば

自分より接近戦が長けているものなんていなかった。

それが一方的に負けるなんて納得いかない。

マル「……ふっ」

マルギツテはへそに力を入れさらに気を発した。

京「凄い。まだ食い下がってる」

さらに互いにならみ合い、気をぶつけあっている。

マル「はああああっ！」

マルギツテが咆哮し、百代に向かっていく。

百代も同時に前に出る。

そこへ誰かの影が入り込み、百代とマルギツテの間に入り込み腕を掴んで床に叩き伏せた。

武神VS軍人？

八雲「2人共そこまでだ」

明久「八雲っ！！」

百代とマルギツテを叩き伏せたのは八雲だった。

百代「な、なにをする八雲っ！」

マル「勝負の最中に入り込むとは無粋な真似を……」

百代とマルギツテの2人は勝負を邪魔されたことを不快にしていた。

明久「なんでここに？さっき出て行ったばかりなのに……」

八雲「百代の闘気を感じてな。で、なんで邪魔をしたかというとな、今の状況を見てみる」

八雲がそう言うと百代とマルギツテだけでなく皆が周りを見渡した。

秀吉「机やイスがボロボロじゃのっ」

教室の中はボロボロになった机や椅子が散乱していた。

八雲「別に戦うのが悪いわけじゃないが時と場合を考えろよ」

百・マ「っ！」「っ！」

八雲「あゝあ、こんなに教室がボロボロになってどうするんだよ」

明久「これじゃせつかくEクラスの設備を手に入れたのに意味がないね」

八雲「もちろん、この教室の修理代は払ってくれるんだよね？」

そこのお二人さん」

百代「え！？……も、もちろん……」

マル「もちろん支払います。今回は私達に非がありますから」

八雲「じゃあ早めによろしくな」

俺は2人にそういうと

一子「ねえキャップ。ケ〜キは？」

八雲「あ、そういえばそうだった。俺の鞆はっど……」

俺はワン子に言われ自分の鞆を探していると、

雄二「なあ？八雲の鞆ってアレじゃねえか？」

雄二が指差したところには確かに八雲の鞆があったが……

康太「……………机の下敷きになってる」

八雲「なにに！？」

明久「……つてことはケーキは……」

忠勝「潰れてるだろうな」

一子「ケーキが!？」

八雲はすぐさま机をどけ鞆の中のケーキを見てみると、
ゲンさんの言う通りペツシャンコに潰れたケーキの残骸が見つかった。

大和「……これはマズくないか？」

京「うん、ヤバいね」

明久「姉さん謝ったほうがいいよ……マジで」

百代「ああ……あのな八雲。す、すまない」

百代が土下座して八雲に謝る。

先ほどまで武神として戦っていた百代が土下座して謝ってる光景を見て

Fクラスの皆は驚いているみたいだ。

八雲「……いいよ……また買いに行けば良いからさ……」

百代「ほ、本当か!？」

その後、百代とマルギツテがある程度教室を片付けて昼休みが終了となったが、

その後の八雲はまるで魂が抜けたように静かだった。

武神VS軍人？（後書き）

八雲「……………ケーキ……………」

一子「……………ケーキ……………」

明久「凄いかわいそうに感じてきたんだけど……………」

秀吉「生気が抜けておるのう」

その翌日、百代が同じケーキをかってきてようやく八雲は今までどおりになった。

ただし、今度は明久の懐が寂しくなったが……………

それはもちろん百代が明久に教室の修理代とケーキ代を借りたから

試合開始！

今日は文月学園のイベントの1つ“文月ボール”の日だ。

八雲「今日は晴れた良かったな。

先週の休日は雨だったから心配だったんだよな」

一子「雨の日はなんとなく匂いで分かるわ」

八雲「相変わらず頼りになる鼻だな」

一子「色々かぎ取れるもん。インフルエンザはすぐにかぎ取れるよ」

秀吉「どういった匂いなのじゃ？」

八雲「まあ細かい事は気にするな。今日は勝つぞー！」

一子「おーっ！」

京「やたら気合入ってるなあ」

ガクト「そりゃ気合入るだろ」

雄二「ガクトはこういうときしか活躍できないからな」

大和「まあな。でもそれはガクトだけじゃないだろ？」

雄二「そうだな。ウチのヤツらは皆そうだったな」

Fクラスの皆が甘粕の元に集まる。

Fクラスの代表は雄二だが、雄二曰くこういったのは面倒なので甘粕に一任したらしい。本人も嫌がっていないので良いのだろう。

真与「皆さんの力を集結させて頑張ってください！」

梅子「お前たち、川神ボールのルールは知ってるな」

一子「はい、完璧です!!」

鉄人「そうか。なら吉井、説明してみる」

明久「え！？僕ですか……分かりました。

基本的には野球と全く同じだけど、違いがあるとしたら前半戦と後半戦かな。

9回までやるんじゃなく時間で区切る。

最大の違いは、ボールを持てば走者への攻撃が自由という事。

そして一番の特徴は試合中であれば好きなときに召喚獣を

召喚する事ができること。ボールには特殊な設定を施しているから

触る事ができるから召喚獣を使ってキャッチすることができません。

そして欠員は5名しか補充ができないところです」

梅子「ああ。野球とアメフトの間、といった所だな」

鉄人「召喚獣はボールは触る事ができるが選手には触る事ができないし、

操作が難しい点があるが使用すれば便利だぞ」

梅子「ゆえに、強力な戦士を送り込む必要がある」

鉄人「直江。お前が監督となり皆に指示を出すんだ」

大和「ひとつ確認が。俺が監督で良いか？」

雄二「ああ、俺は試合に出るから大和に任せたい」

秀吉「雄二が認めたなら問題ないじゃろう」

八雲「いつも通り策を立てる軍師。

それに雄二の策は相手の代表に見破られそうだし」

雄二「……否定できない」

真与「皆、賛同していますよ」

大和「では、監督の大任確かに承った。じゃあオーダー発表するぞ」

大和は一呼吸おくと、

大和「1番セカンド ワン子 切り込め！」

一子「任せておきなさいな！先陣の誉れね！」

大和「2番シヨート クリス 好機を広げろ」

クリス「クラスの勝利のためだ。自分の力使うがいい」

大和「3番センター キャップ 頼りにしてるぜ」

八雲「おう！俺の守備範囲の広さ見せてやる」

大和「4番キャッチャー ガクト 主砲はお前だ」

ガクト「おう大砲ここに参上！」

大和「5番サード 雄二 頼むぜ」

雄二「ああ、任せておけ」

大和「6番レフト ゲンさん 期待してるよ」

忠勝「俺かよ……ま、仕方がねえな」

大和「7番ピッチャー 京 狙撃兵頼むぞ」

京「めんどいけど大和のために頑張る」

大和「8番ライト 明久 召喚獣の操作頼むな」

明久「うん！任せてよ」

大和「9番ファースト クマちゃん（暴走）」

満「うう……オナカヘッタヨ。相手食べていい？」

大和「ああ、飲んじゃって良いよ！」

梅子「他に控えの5人だ」

大和「こんなオーダーを選んでみました」

大和がメンバー表を書いた紙を鉄人と梅子先生に見せる。

鉄人「……直江本気か？どれも悪手に見えるが……」

梅子「いや……西村先生。案外これはいいかもしれません」

鉄人「確認するが、いいんだな？」

大和「先生たちさえよければ」

梅子「ふ、いいだろう。ではこの紙を提出してこよう」

須川「あれ？そういえば川神はどうしたんだ？武神のほうの」

八雲「ああ、百代ならあそこだ」

俺が指差した場所は放送席。

八雲「この前教室で暴れたのが学長にバレテな。

その処分とアイツが入ると圧倒的にこちらが勝ってしまうかな」

須川「あゝ納得」

大和「じゃあ雄二試合前に」

雄二「ああ……皆、戦いの始まりだ。

所詮ゲームみたいなものだから勝ち負けは関係ない

……なんて考えをしているヤツは去ってくれ」

雄二は皆の前でそう言うが誰も去ろうとしない。

雄二「去るものはいないな。よし、やるなら勝つぜ」

クリス「当然だ。負けるのは悔しいからな」

雄二「敵は2 - A、相手にとって不足無い。

試召戦争では引き分けてしまったが、今回はそうはいかねえ。普段俺達をバカにしているヤツラにきつい敗北をくれてやる

ぞ！」

皆「お———！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030v/>

バカと武術と召喚獣

2012年1月6日18時46分発行